
放課後に帰宅部で青春で

時津風洋々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後に帰宅部で青春で

【コード】

N0406V

【作者名】

時津風洋々

【あらすじ】

世界は広くて

僕はとても高校生

…とても高校生？

日夜、青春の淡い1ページ

もといラブコメを体験するために奔走しているのであった

繰り返し返す

これはラブコメに憧れる僕の日常であって
決して、SFやファンタジーやバトルが繰り広げられるようなモノ
ではない!!

いちごが100%になりそうな展開を希望していた僕のほんのわず
かなお話

他のサイトでも掲載しています

青春の輝きとは儂い

春の匂い

桜が咲き誇る

入学式

田舎とちよつとだけ発展した都会が行き交うそんな町並みを駆ける

小さい頃から見慣れた桜並木がキレイな高校

舞台はついに高校まで来た…

春の描写以下略

僕は人とは人とは違う

そんな事を思っているとかいないとか

思春期の誰もが考えるであろうそんな願望を胸に秘めている

思春期といえどエロに興味を抱くと思う

もれなく僕もそんな一人だ

『エロに興味のない男子はいません!!』

…いや…男なら分かってくれるよね？

甘い匂いのする女の子 うっはうっはの甘酸っぱい思い出たひたる高
校生になる

少年誌のハーレムラブコメは僕の人生の指標だ
女の子とあんなことやこんなことをすることに對して限りなく積極
的に行動してきた事だろう

小学生の時は幼馴染みを作ろうとひたすら女子の側をうろついていた
中学生は体育倉庫で閉じ込められることを期待して体育倉庫に引き
こもってみたり思った

以下略

まとめると
すべて失敗した

しかし、今日にいたるまでくじけた事などない

そこが

僕が人とは違うと言える所だ

いや、大なり小なり人は積極的だ
身なりを気にしたり
異性に積極的に話をかけたり

フフフ…

僕からいわせれば全然合格点とはいえないな

僕はわざと遅刻ギリギリの時間に出発して
こうやって食パンをくわえながら登校しているということだ

パンに塗るものは、バターにするかジャムにするかで迷ってしまった
既に勝負はそこから始まっているかもしれないからだ

一切のぬかりなく恋愛小説のように…学園ラブコメのように…

僕はベタが好きだ

お約束と呼ばれるヤツだ

『王道なくして邪道はない!!』

熱湯風呂が目の前にあれば身構えて、絶対に押すなよと言つてあるう
やめるはやれってことだ

こつやつて王道を一つずつ埋めていけば

人生は必ずラブコメに近づくッ!!

そうこつ言つうちに既に曲がり角を何回か通り過ぎた

今日は特別な日なので

曲がり角を多く使うルートを選んでいた

しかしそれももうすぐ終わりに近づこうとしている…

次の曲がり角を曲がればいちごパンツの可憐な女の子とぶつかった

りする…

おおおおおう

そこから僕の新しく甘酸っぱい高校生活の第一ページが刻まれる訳だ

よし!!!

次の曲がり角から輝かしい青春がはじま…

オウフ!!!!

「…………ア？オイ…ニーチャンなにしとんじゃ！！」

…え？

「人にぶつかつたとして謝罪の言葉もナシか？アあ？」

…え？…え？

「コイツ、ガンつけてますぜ？ヤツちまいますか？」

…ちょっと待つてほしい

可憐な女の子との出会いを期待して

いかにもな連中とぶつかってしまった

これはギャグマンガやコメディのベタだ

希望に満ちあふれた高校生活でフラグをたてすぎた一般高校生にありがちなパターンだ

「…まるで僕じゃないか！！」

「…ア？お前何言っテんの？」

しまった。心の声が漏れてしまった

しかし複数の典型的な不良と呼ばれる人種に囲まれるとは…

所々に無駄にカタカナが入ってるあたりで教養のなさが出ている…

汚物と呼ばれて消毒されてしまいそうな勢いだ

これはこれで漫画の王道とも言えるだろう

イヤイヤイヤイヤ…

違う！違う！

それは大体の場合はあまり良い方向に向かない気がする

これではどこかの世紀末救世主に助けられてしまっ気がする

(俺は名もなき村人Aかつ！?)

少なくとも僕が望むようなラブコメにはならないであろう

フラゲ

「おい！！いい加減にシヤが…フラペチ…ッ！！」

そう、胸ぐらを掴まれそうになり、今にも殴り掛かられる瞬間

相手がコーヒー屋にありそうなドリンクの名前を叫びそうになる途中

空中に吹っ飛んだ

…まさかのバトル展開？

現実問題

人間が空にふつとぶことなどない

それこそ漫画の読みすぎだ

「なんだオメエ！！ザけんナッ！！いきな…トリニダーツトバコ…
ッ！！」

次は、はっきりと見れたぞ

なぜ吹っ飛んだ時にカリブ海にある共和国の名前らしき言葉を叫んだのかよく分からないが…

もっとよく分からないのは

映画とかでしか見た事ないような

黒人で黒スーツを着た、屈強なスキンヘッドのおっさんがいた
何か、アイルビーバックとか言いそうなくらい屈強だ

僕の世紀末救世主は修羅の国から来たような国籍不明の男だった

ここまで登場人物全員男

「オー、少年タテマスカ？」

そつと手を差し伸べられた

ふむ

この人は味方のようだ

が、しかし

「ドウシマシタ、少年エース…イヤ思春期迎エタモンキーミテーナ
顔シテ」

こいつ外人面して日本ギャグかましてきやがる
う…うさんくさすぎる…

助けられたことは事実だ

素直に手を取る

「はは…ありがとうございます。あの…」

「オオ、名前ヲ言うの忘レテマシタっ！…ワタシは田中一郎デース」

…嘘だっ！！

一分の望みに賭けてコイツが田中一郎だとしても
タアナツカ・イティーロとかそういう名前だろ！！

「ありがとうございます…その…田中さん」

しかし、そんなツツコミが出来るほどの余裕は既に僕にはなかった

「イイデスヨー。オット、ボスの晴れのカドデをオイワイに行かな
ければナラナイノデシタツ！これにてシツレイイタス」

黒人の…いや田中さんは僕の前から走っていった。

つか、足早いだろ…

こうして僕は可憐な女の子との出会いはなく

謎の黒人…いや、田中一郎さんとの出会いを果たしたのであった…

迷う事は悪い事ではない 逃げちゃダメだ 立ち止まれ

これはひどい

あんまりじゃないか

入学初日に遅刻してしまった…

入学式遅刻ギリギリという時間を選択した僕も悪いのは認めよう

でも不可抗力というものだよ先生

不良に絡まれて

謎の屈強な黒人…いや…田中一郎さんが不良を圧倒的な武力にて退治して助けてもらった

「…信じられるかつ…!」

「ん？何か言ったか？」

おっとイカンイカン

また心の声が飛び出してしまった

ここは素直に反省という気持ちを中心に押し出すでいいころ

- 職員室なつ

頭で分かっただけでも心で納得出来ていないとすぐに表情に出てしまうのが思春期の所以だろう

教師という絶対的な大人には見抜かれてしまう

「しかし…入学式で遅刻なんて今時流行らんぞ」

良かった、気がついていそうだったけどスルーしてくれた!!

でも…

うう…好きで遅刻したわけじゃないのに…

本当なら遅刻ギリギリで

教室内でばったり朝にぶつかった女の子に出くわす予定だったのに…
…予定だったのに

「…まあ、今日は初日だ。浮かれる気持ちも分かるが今後は気をつけるように。これからホームルームだ。お前は戻っていいぞ」

…先生!!ありがとう!!

こういう時は大体、反省文とか色々これこれがあるのかとばかり思ってたよ!!

先生が担任で良かった!!

「しかし…担任の氷室先生も大変だな。お前みたいな生徒が受け持ちだなんて。いや…氷室先生が担任だということでお前にも同情するよ」

おおっと

ここで新事実発覚

この仏のような先生は担任ではないというのか

これはイカンイカン。僕の早とちりみたいだった

…ん？

だったら何で、この先生は私を注意しているのだろう

「他の先生は入学式に行ってるから残った私が注意しているが、普通は担任がやることだからな。良かったな私で」

まるで僕の心の声を聞いてくれたかのような説明をありがとう

とにかくこれからホームルームらしい

本番はここから

俺の戦いはこれからだッ！！

「それじゃ、先生。失礼します」

先生にそう言うってから私は廊下に出た

さあ、クラスに向かおう。

クラスに向かおう

クラスに向かおう

…クラスに向かおう

ここでみなさんに新しい事実を伝えよう

クラスが分からないっ！！

- -

これぞ叙述トリック

イヤイヤイヤ

何も叙述もトリックもないよ

普通はプリントなり何なりで分かるんだろうけど

とても残念な事に僕は初日の入学式遅刻という大罪の身分だった

今更、戻って職員室で聞き直すか…？

小さい頃から見て育った高校

知らないことはないと思っていたが

井の中の蛙だった

さすがに内部構造までは把握してなかったし

それ以前に自分が属するクラスが分からない

そして入学式が終わるか微妙な時間帯

人がいない…

たどり着くのに必要な情報が圧倒的に足りていなかったのだ

これは砂漠で地図も方位磁針も持っていない状況に等しいのだ

いや、言い過ぎた。等しくはないかもしれない

しかし、僕がそれくらいの気持ちでいることは伝わっているだろうか

「いや、誰に伝えているんだよっ!!」

「なんや!びつくりした。何や自分、いきなり大きな声出して…」

ふむ、私の心の声表に出る時は必ず誰かに聞かれているな

…ん?

…誰か?

これはこれは…

誰かがいたっ!!

「変なヤツ発見。人の顔をまるで砂漠でオアシス見つけたヤツみたいな顔して見るなんてどうしたんや?」

ええ、その通りです

アナタは砂漠で見つけたオアシスみたいな存在です
リアムとかノエルとかそんなくらいに偉大です…

「あ…あ…あのおおっ!!」

「なんやねん!!そないにデカイ声出さんでも聞こえてる!!聞こえてるから!!」

「スイマセン…不安で心細くて…」

「何や、その会いたくて震える乙女みたいな心情は…」

「じゃなかった！すいません。大変にアホな質問をしてしまいましたが…」

「ん？」

・僕のクラスはどこでしょう？

……？

おおっといくらテンパってるとは言え凄くバカな質問してしまった
そりゃ、いきなり初対面のヤツに自分のクラスを聞くバカがどこに
いるっ！！

「…ここにいましたっ！！」

思わず口に出してしまうほどだった

これはもはやバカと言われても仕方がない…

僕がこんなこと聞かれたら、知るか！！と言ってやるとこだ
まったく…せめて違う聞き方があるだろう…

「…B組や」

「…え？」

「だから、B組やる自分。」

「ちょ、ちょ… つつと！な…なんで知ってるんですか？」

「いや、聞いてきたの自分やる？知ってるから答えただけなのに、なに言ってるの？」

コイツ…狐みたいな顔しやがって

本当に狐に包まれたみたいない気分だ

うん、冷静に見てみれば見るほど狐ヅラだなコイツ

「ちなみに狐には包まれんで、包まれてどないすんねん。正確にはつままれる。や」

「読まれた！！心を読まれたっ！！」

「何や、ほんとにそんなこと考えてたんか」

恐ろしい…

「さて…自分のクラス分かった事やし、行こか」

…？

「ほら、自分のクラス！いや正確には俺たちのクラス…やな」

なんと、クラスメイトだったのか！！

これは盲点盲点

…？

いや、クラスメイトでも普通顔は分らんぞ

同じ中学校とか小学校なら俺だつて知ってるはずだし

本当に狐みたいな顔しやがって…

「まあ…なんで自分を知ってたか言われたら…そりゃ…」

- あきんど 商人の企業秘密や

はあ…今日は色んな出会いがありすぎた…

やることなすこと

ことごとくラブコメ展開ではなく

違う展開に向かっていってる気がする

「ほら、ここがB組や」

様々な思考が渦巻いていると

クラスに到着したみたいだ

「もう、みんな戻ってきてると思うぞ」

僕たちは廊下

少しの歓談と新しい出会いなのか緊張した雰囲気は教室の方から伝わってくる

「ありがとう…えっと…」

「神山」

「かみやまいなり
神山稻荷や」

「神山君ね…」

「いなりちゃんって呼んでほしいな〜」

「呼べるかつ!?!」

もう少し頑張れば漫才が出来そうな気がする
とか思ってしまったが会話も早々に
さて…

気を取り直して…

ドアに手をかける

次こそ…

僕の戦いはこれからだ…

-
- オーツ!! 今朝のモンキーボーイ!!
-

戦いはこれからですらなかったのかもしれない…

春は出逢いの季節 それは日頃の行いを見ている

オーツッ！！今朝のモンキーボーイ！！

ふう…

今朝のモンキーボーイ？

僕は猿なのか？

何を言ってるんだ

教室を見渡す

神山君は足早に自分の席に着席

「ナニシテンダヨ！！モンキーボーイ！！コツチダヨ！！ヘイ！！」

明らかに不釣り合いな筋骨隆々の男がいる

「…オオイ！！」

田中！！

今だけは呼び捨てにする！！

僕は決めた

オイ田中！！

恩人に向かって言うのもあれだが

…なんでここにいる…！

机とボディのサイズが違いすぎるだろ…！

漫画で比率を間違えて人を大きく描きすぎちゃったみたいになるよ…！

なんで誰もツッコまないの…！

黒スーツから制服にいつ着替えたの…？

似合わないにもほどがあるぞ…！

「ボス…！コイツデス…！ワタシがタスケタモンキーデス…！」

…ボス？

ボスがいるのか？

この際、モンキーはどうでもいいよ
好きに呼んでくれ

ボスってなんだボスって

高校生だぞ…？

日常会話でボスなんて言われているヤツはそうじゃないぞ
どこの国だよ。

こんなVIPのボディガードみたいなヤツを従えるなんてどんな男だ

マフィアのボスか…？

それともハリウッドの俳優様でもいるというのか!?

とにかくとんでもない男に違いない

僕の好奇心はそのボスが知りたくてたまらなくなっていた

「…おうイチよ。オメエも人助けをするようになったか…。カッカ
ツカ!立派になったもんだ!」

「イエス!!ボース!!ボスにホメラレテ光栄デース!!」

僕の位置からちょうど死角

巨大な身体に隠れるように座っている

僕はそっと覗いてみる

「おう。にーちゃん。イチがいて良かったな。入学早々ボコられて
ちや幸先悪いかんな!」

ふむ…文字では伝わらないだろうが

僕はとても驚いていた

とても貫禄のある想像していたボスとは
似ても似つかない

そして

今日で一番

気だるげに机に足を乗せる

口には…飴？

いや…そんなことはどうでもいい
つまり何が言いたいのかというところ

ボスは女の子だった

ここまで僕の気持ちを中心に書き連ねてきたが
やっと女の子が来た

…僕の求めるような可憐な女の子とは違うわけだけど

そうだね

みんなに伝わるように

どんな女の子か説明しよう

金色の髪は腰元くらいまで伸びた

まさにサラサラヘアと呼ぶにふさわしい髪だ

染めてるのか？

いや地毛っばいぞ

それにしてもキレイな髪だ

僕はいまだに教室前方の入り口から動いていない訳だけど
教室の一番後ろにいる 彼女からイイ匂いが漂ってきてそうだ

色白でとても気だるげ

ハーフなのかなんなのか

とても日本人離れた顔立ちをしている
スラリと高身長 モデル体型ってのはこういう人のことをいうんだ
ろうな

なぜか私服

ダルダルのTシャツにスカジャン
ダルダルのジーンズ
スニーカーだった

「安心しろよ。室内用のスニーカーだ！」

また心の中を読まれた！！

「カッカッカ！女に興味がある年頃だもんな！！無理もねえよ！！」

…なんとというか

見た目は可愛いんだけど
いちいち豪気というか
女らしくないんだよな

なんなんだろう

これはこれでアリなんだけどもつたいないというか
雰囲気はお嬢様っぽいのに

っていつか制服着てこいよ…

「俺は流川みとる。流川るかわじゃないぞ！流川ながれかわだ。バスケットは得意じゃね
えから！ヨロシクな猿！！」

「えっと…田中…君？に助けていただきました。ありがとうございます。」

「おう！礼はイチに言え！困ったことがあつたら何でも言えよ！」

うゝむ

男らしい

ボスと言いたくなる気持ちもなんとなく分かる気がする

猿とは僕のことだろう

田中エ…

「カツカツカ！学生つてのも悪くはねえなイチよう？」

俺は、もう一度ここからやりなおすぜえええ！！

「ボース！！ワタシはナニガアツテもボスに一生ツイテイクト決メ
タよ！！ボース！！」

雄叫びだ…

立ち上がったかと思えば

教室の窓をバーンと開け外に向けて叫んでいる

色々と述べる部分はあつたけど

どうやら興味の対象が僕から移つたようだ

田中君のスキンヘッドをベシベシ叩きながら叫んでいる

普通ならあんな屈強な男は絶対に友達になんねえよ…
なんなんだよ…

さて

気を取り直して自分の席に座ろうじゃないか

えっと座席表座席表…

…

…うっ

凄く嫌な汗をかいた

僕が何に気がついたかというところ

クラス中からの視線だ

そりゃそうだ。

いきなり入ってきて誰だという感じだし
むしろ今まで気がつかなかった方が不思議だ

大声で意味不明な黒人に話しかけられ
私服の金髪女に話をかけられているんだ

当たり前だろう

僕は日本人特有の

苦笑いをしながらのペコペコを繰り返していた

なんなんだろうなコレ

場を取り繕おうと必死になっていると

神山君がニヤニヤしながら見つめていた

「こっちやで、ジブンの席は俺の隣や」

神山君に手招きされる

僕はまだ空席だった自分の席に座った

座ったと同時に頭を抱えた!!

…

…恥ずかしいっ!!

僕の第一印象はどうだったんだ!!

「ジブンやるなあ。いきなりインパクト抜群やで…クックック…」

笑わないで…

間違いなく今日という日は僕の黒歴史確定だ

あまりにも色んなことがありすぎた…

誰か!!僕に時の砂をくれ!!

やり直したいっ!!

「そついえば神山君…」

「稲荷ちゃんって言うてハァト」

「呼ぶかつ!!」

何回やらせる気だこのやりとり…

「じゃあ…イナリは…」

イナリはギリギリOKにしてくれたらしい

「何か二人の情報もってないの？」

「高いで？」

「金とんのかよっ!!」

「なんやねんジブン。当たり前やないか」

少し間を置いて少し真面目な顔つきで言われた

情報は価値あるもんやで、俺にとっては命綱やねん

…ひょうひょうとした態度の人間のふとしたギャップに気圧されてしまった気がする
あいているのか閉じてるのか分からないくらいに細い目からギョロ
りと目を出した後に

またいつものニコニコ顔に戻って続けた

「…言うても、謎だらけで何も分かつたらんけどな」

「ふ、ふくん…そうか…」

まださっきとのギャップが拭えないので
何とも気の抜けた返事になってしまった

「全校生徒の大半は既に調べがついてるんやけどな。」

「なんなんだ、お前の情報網…」

こいつ…絶対に漫画の主人公の悪友キャラに向いてると思った
いかんせん思考が読み取れない不気味さもあるんだけれども

「いま、俺のこと主人公の悪友キャラとか思ったやろ？ジブン」

「分かりやすいのか！？僕は分かりやすいのか！？」

くうう…自分の考えてる事をここまで読み取られるとは
高校とは思った以上に恐ろしい所なのかもしれない

そうこうする内に教室前方のドアが開いた

これから相対する相手は

とても大きな壁でヒドく冷たい

北極大陸で寒中水泳をするかの如き人間だった

冷たさは暖かさの再確認 逆も然り

教室のドアが開いた

入学式後の堅苦しい雰囲気が一気に戻ってきた

教室の全員が静寂に包まれる（流川さんと田中くんは相変わらずだった）

なるほど

これが仏のような先生が言っていた先生か

…

…悔しいけど…イケメンッ!!

なにあのフェイス!!

ヨーロッパの貴族みたいな品格があるう!!

同じ男として嫉妬せざる得ないくらいに眩しいよっ!!

僕があまりの男性としての敗北感にうちひしがれていると
イナリがヒソヒソ話しかけてきた

「あのセンサーが氷室冬樹先生や。別名『ダイヤモンドエンペラー』」

「

…なにそれっ!カッコいい!!

凄く奇妙な物語っばい!!

「校長先生やPTAの会長すら逆らえない圧倒的な存在感。最強の石頭。権力と融通の利かなさでこの界隈の有名人や…」

イナリは話を進める

「そして、あのルックスやろ？女子生徒にモテモテや。」

ここまで聞いてみての感想

あいつこそ、少女漫画の王子様役みたいじゃないか！！

僕が恋愛や青春でウツハウハになるにあたってアイツは敵だ！！

必死にフラグをたてようとあくせくしている僕

ダイヤモンドエンペラーこと氷室先生はフラグが自ら歩いてくるよ
うな人間

「格差だよっ！！それは！！！」

「ふむ…お前…そうだお前だ…私の話を途中で遮り、さらに格差について語るっというのか？」

教室中の一斉に視線がこっちに向けられる

しまったああああ！！

隣でイナリが笑っている

ぐぬぬ…

何が僕をそこまで駆り立てるのだろう

そこまでして僕は心の声を聞いて欲しいというのか…

僕は心の露出狂か！！

ああ…もつと僕を見て…／／／

つてチガウチガウチガウ…

今はこの場を切り抜ける策を考えるのが先だ…

「あー…いやですね。高校1年生の入学初日に人生への深く哲学的な憂いを論じるにはいささか急ぎすぎたというかなんというか…ハハ…」

「…」

怖いいい！何を考えてるのこの先生！！

僕の言い訳のへたさも相当だけど

記号一個で返してきたよ！！

三点リーダーだよ！？

「…入学式も来ないで、人生について憂っていたのだな？」

やっぱバレている

そりゃそうだ

入学式からいきなり遅刻をかますような問題児に注目しない教師は
いない

「…さつきからお前は私をバカにしているのか？」

「ひゃい？…？あかになんてひていまひえん！！」

声が裏返った！！

自分のヘタレ具合にびっくりだ

3の倍数だけアホになるよりアホだ…

「…」

また沈黙

「…よし、明日までにお前の人生についての考察を4000字の原稿用紙5枚以上で提出しろ。…いいな？」

なんとというスパルタ！！

スパルタは古代ギリシャ時代にあつた軍事都市国家で…

じゃない！！

とにかくなんとということだ！！

入学初日にいきなり宿題とはこれいかに…

なんとしても避けなければ…

どうする…どうするよ…！！

「カツカツカ！おもしれーな！なあイチ？」

「オー！！ボス！！ニッコーに行力ナクテモ、コンナトコでサルマワシがミラれるなんてエキゾチックジャパンダヨ！！！」

誰よりも日本人らしい名前をしている（名前だけだが）お前がエキゾチックジャパンとか言っちゃったよ！！

それで、この雰囲気ですぐに会話を切り出せるボスすげえよボス…

「せんせー！社会にも出た事のないケツの青い学生という身分で人生について語れることは多くないと思うぜー！！カッカッカ！」

「ソウネ！マダ、シタのバナナもグリーンナモンキーにジンセーはムズカシイヨー」

親戚のおじさんばりの下ネタに走りやがった…！

だがこの現状を打破してくれそうな気がする…！！

二人の擁護が有り難いよ！！

「…ほう。お前ら…田中と流川だな。…お前らも晴れて今日から立派な高校生だ。お前らはコイツとは違うと言いたいのか？」

「そりやせんせー！俺とコイツじゃ月とマンドリンくらい違っぜ！カッカッカ」

それはいくらなんでも違いすぎだああ！！なんだマンドリンって！！

「俺はよー世界回ってきたけど、人生って言葉じゃ言い表せないくらいにひでーところがたくさんあったぜ」

「…」

「それこそ社会体制とか法律とかそういうの以前の問題もあったぜ。そんな俺が言うんだ。平和な国で育ててきた卵が社会を語るには経

験が足りなさすぎるぜ」

「…何が言いたい？」

「早急な結論は幅を狭めるぜせんせいさん。せつかくの高校生活だ。色んな経験がここでは待ってたんだ。コイツはまだ始まってすらねーんだよ。卵に空を飛べつてのは無理な話だ。」

「コイツが高校生活で雛鳥になるまで待つちゃくれないか？きつと先生も唸るような立派なヤツになると思うぜ！」

「…流川…お前の言い分は分かった。」

「さすがせんせいさんは違うぜ！！カッカッカ！！」

助かった…のか…？

おおおお！！

なんだか僕抜きで話が進んでいたが
思いのほかうまく進んだみたいだ！！
ありがとうボス！！

「モンキーはハイスクール初日からビーバップネー！！エグチヨースケヨー！！」

田中！お前には感謝してやらん！！

そもそも違う作品を組み合わせるな！！

「…とにかくだ。今日から高校生活だ…。学校のルールに則り、厳しく指導していく。コイツのように入学式から遅刻するような醜態を私の前で見せるな。分かったか」

静まった教室は同意したと見なされたのだろう。
氷室先生は荷物をまとめ教室の扉に手をかけようとした。

「おい、お前…」

「は、はひっ!？」

またうわずってしまった!!

今のは奇襲だ!!

安心しきった俺にまた緊張が走った

「…まずは卵のお前の答えを提出してもらおう。そして…また雛鳥とやらになったときに提出してもらおうとする。…分かったな。」

「ハイ…つて、おおうえ!？」

状況!!何も変わらずッ!!絶賛悪化中!!

なんだ!!今までの下りはなんだったんだ!!
物語の進行でいらなかったんじゃないか!?

ダイヤモンドエンペラーのスタンド攻撃は思った以上に強烈だった
まさか入学初日に宿題を出され、さらには高校生活を通じての課題
を提出されてしまうとは…!!
あれは完全に宿題がなくなるフラグだったじゃないか!!

ここが新喜劇の舞台じゃなくて良かったなオイ!!

全員でズッコケるところだったぞ！！

「カツカツカ！やっぱり猿はサイコーだ！！気に入った！！これからの学校生活楽しみめそうだぜえ！カツカツカ！！」

うるさいうるさい！

ボスを少しでも崇めかけていた自分を呪いたいっ！！

「H A H A H A！！サスガB O S Sネ！！サルマワシノサイノーアルヨ！！」

田中あああ！！

しかも猿回してたのはボスかよ！！

「カツカツカ！おう！猿！ちょっとツラかせ！」

「何なんだよおお！！さつきから人を小馬鹿にしゃがってえ！」

僕はもはや自暴自棄寸前だ…

いや既に自暴自棄かもしれない

「手伝ってやるよ」

「え？」

「だから、お前の高校生活に協力してやる」

女の子に肩に手を回されてドキマキしてしまった

どことなく柔らかいモノがフニフニと…
ふにふに
どうへへへへ…

「おいゝ猿。お前の大好きな女の子のおっぱいを堪能してるとこ
悪いけどよ…」

「ドウフエフエフエゝ／＼／ふあゝい？」

「今から衝撃の事実を教えてやるよ！お前のことが気に入った。そ
して信頼の証として話そうと思う。これは俺と田中と猿。このクラ
スでは俺らしか知らない秘密だ。」

「いいか？覚悟して聞けよ？」

「エフエフエフエ／＼／ふあゝい」

俺は男だ

…俺は今後の人生で誰も信じられないかもしれない
世の中に賢者がいるとしたら
まさしく今の俺のことだ

この現代社会において私は
この時

この場所で

一言で
賢者になった

確認するまでは夢すらも真実になり得る

俺は男だ

もうお先真っ暗…

この横腹にあたるフィンフインは何…？

そりゃボスは男らしすぎて

僕の理想郷にいる乙女とは違うかもしれない

でも

でも…

どうみても女の子ですけどおおおおお！！

これが男なら日本の女の子とはなんなんだろうか…

ボス！！恐ろしい子！！

「カツカツカ！！イチ！！人間ってこんな表情出来るんだな！！」

「OH！ボス！ジャパンのモンキーはヒョウジョーがユタカネー！！オザキダヨー！！」

もはやツッコむ気力も削がれている

「オイ猿！安心しろ！！お前はシロだ！」

シロ？ついに猿から犬にレベルアップしたのか？
…あれ？レベルアップしたのか？

俺を殺した犯人じゃない

…？

僕はこの地球に生まれ落ちてから
日本語には慣れ親しんできたつもりだ
でもこのような日本語はマンガでしか聞いた事がない

「殺した…犯人…？」

「そつ。俺はよ」

一回、殺されちまったんだ

ふむ

S F ううう！???

さっきからとんでもない単語が飛び出しすぎて思考が追いつかなくなってきた

S F が少し不思議なら

これはとんでもない不思議だ T F だよ

人類は昔から未知の領域に憧れている
それが様々な創作を生み出し

いま僕たちはそんな創作に触れてきて非日常に多少なりとも免疫力
があると思っっている

未来からやってきたロボットや

触っただけで人が破裂する拳法家

空から女の子が降りてくる

e t c .

S F の定義は幅広い

しかしどうだろう

僕らの日々の生活にそれらの要素はまったく含まれていない
いや、だからこそS F なんだけどさ

君はこんな場面に出くわして

なるほどなぁと素直に納得出来るだろうか

「納得出来る訳がない!!」

「お、珍しく強気じゃないか猿。カッカッカ」

俺の心の声がかみ合った!!

「まあ、聞けよ。そりゃ、こんな話をされても前の俺なら鼻で笑う
レベルだぜ」

「あ…当たり前じゃないですか！一般的な高校生にそんな話を打ち
明けられても…」

「お前の意見はもつともだ。だから信じてくれとは言えねえよ」

「だが…これから話すことは全て真実だ。黙って聞いてくれ」

若干トーンが落ちて迫力の増した声に僕は何も言えなかった

「さっきも話したみたいに俺は男だった

死ぬ前にとある国でギャングとかマフィアって呼ばれるような集団
やってたんだよ」

ギャング…

「OH！ボスはトツテモグレイトなギャングスタダツタネ！」

「殺し以外はなんでもやった…みたいな感じですか…？」

「カツカツカ！！」

殺し以外もなんでもやったぜ

…僕はとんでもない人と知り合いになってしまったようだ

「まあ、貧しい区画の出身だったんだ。生きる為にはなんでもするさ

世界中渡り歩いてきた…。結構偉かったんだぜ俺？カツカツカ！」

「ストリートでリョーシンモイナカッタワタシを拾ッテクレタノモ
ソノトキネ」

「今にも死にそうだったイチがここまででっかくなるなんて思わなかったがな！！カッカッカ！」

でっかくなりすぎだ…超人ハルクか…

「そんでよ、とある取引で日本にやってきた。問題はそんときだ」

僕は息を呑んだ

「取引相手と対面した。そんときに

圧倒的な力で何も理解出来ないまま俺は殺されたんだ

取引相手は全滅だ。俺自身も何が起こったのか分からなかった

気がついた時には腹にでっかい穴が空いていた。

死ぬのは怖くなかった…と言ったら嘘になるが、ここまで色々やってきた。いつ死んでも覚悟は出来てたさ

話はここからだ

俺のどてっばらに光が降ってきた。お迎えがきたと思ったさ。でも違った

次の瞬間、俺の身体がなんらかの力で女になった」

「なんらかの力すげえな!!」

そこ省いちゃいけない描写だろ!!」

「ボスヲタスケラレナカッタ…キヲウシナツテテ、ボスがキガツイ
タラガールにナツテタヨ…。」

「何が起こったのか分からなかったさ。そこで起こった全ての事
が
な」

「はあ…。素朴な疑問を一ついいですか？」

「なんだよ。なんでも言ってみろ」

「そんな事があって、どうしてここにいるんですか？」

「猿にしては良い質問だな。カツカツカ」

僕はどんな風に見られていたというのだ…

「犯人さ」

ドキリとした

「この学校に犯人がいるって話さ。」

K O E E E E E E E E E E ! ! !

なんだそれ!!

仮にもギャングとかマフィアと呼ばれる連中を一瞬で分からないうちに

瞬殺してしまうような人間

いや違うよ。それはもう

人間の粋を超えてる

だしぶ現実とSFのギャップに慣れてきた
僕の所にネコ型ロボットが来ても大丈夫なくらいに慣れてきた

「で、その話嘘だ…」

「本当の話だ」

遮られたっ！！

「でもな、俺は復讐とかそんな事は考えちゃいねえ

何の気まぐれか知らないが、こうやって俺は生まれ変わったんだ。
儲けモンさ」

「OH、ボス…」

「ただ、知りてえんだよ…。俺を殺したヤツを。実際に目の前にいたらどうなるか分からないけどな…」

何だかよく分からないが、同じ男（今は女だけ）としてカッコイ

いな…

自分を殺した人間を僕は許せるだろうか

「まっ、日本のハイスクールで過ごせなかった青春…？ってやつを
味わうのもいいだろ！カッカッカ！」

「なんで、そんな話を僕に…？」

「言つたるお前はシロだ。犯人じゃねえ。それに」

お前が個人的に気に入ったんだよ！！

屈託ない笑顔

恐らく生前の彼は愛されていたんだろうなあ…

「昔の俺は死んだ。まさかファミリーに女の子になったなんて言っ
ても信じてもらえねえだろうしな！！」

今は大人の汚い力を使って、晴れて日本の高校生！カッカッカ！」

やめて！まだ大人の汚い部分は早いの！

聞きたくない聞きたくない！！

「まっ、お前がクロだったらどうなってたかな！…俺は構わないん
だけど！」

「構わないんだけど…？」

「実はもう一人、俺の部下がいるんだよ」

「はい？」

ボスはおもむろに右手を上げた

…？

何をするんだろうか…

右手をフツと下ろした

その瞬間僕の鼻先を何かがかすめた

それと同時に

教室に飾ってあった花瓶が割れた

「H A H A H A ! ! !」

「カツカツカ ! ! !」

! ! ? ! ? ! ? ! ? ! ?

二人が笑っている ! ! !

何かされたのか僕は ! ! !

「ここにはいないけど、ちょっと離れたところで俺らを見てんだよ。」

「モンキーのアタマズドンネ ! ! ! ゴルゴヨ ! ! !」

何となく分かってきたぞ

あれだ、俺の後ろに立つんじゃないかねえみたいな人がいるんだ…

「…その人はどんな人なんですか？」

「ん〜、名前は………じゃあ…す、鈴木」

「絶対に今考えたでしょ！！じゃあってなんだじゃあって！！」

ベタだ！！

田中に続いて鈴木！！

田中の偽名説が濃厚になってきたじゃないか…！

つか、鈴木（仮）が見てるのか…

コードネームに13とか付きそうな不吉な数字が付いちやうような人が見てるんだ！！

「カッカッカ！！まあ、俺が合図を出さない限り何もしねえよ。それに姿を見る事もないさ」

こうして僕は二人の秘密（顔も名前も知らない一人も）を知ったのだった

「さて、さっさと課題を終わらせようぜ！！手伝ってやるよ…！！」

…

…！！

忘れてた！！

濃い話の流れですっかり宿題の話を失念していたっ！！

「その代わり明日から猿も犯人探しを手伝えなっ!?!」

「OH! モンキーが加ワレバ、鬼二玉棒ヨ〜!」

なんだよ鬼に玉棒って!!!

一字間違えただけで卑猥で生々しいわ!!

「いや…元々、あなたたちのせ…」

「手伝えなっ!?!」

問答無用かい!!

「なんで僕なんか…」

「カッカッカ! 猿は変なヤツだ! お前は何かを引き寄せる力がある。何千のトップに立った事のある俺が言うんだ。間違いいえ」

引き寄せられるのは災難ばかりなんですけど…

「それがいいんじゃないか!?! 変なヤツには変なヤツが集まる。スタンド使いはスタンド使いと惹かれ…」

それ以上言うな!!!

ああ、そうさ!!!

二人みたいな人間を引き寄せた時点で変なヤツの仲間入りしてしまっただけかもしれない!!!

僕の周りは常に恋愛ではなく、違うモノが引き寄せられてきたさ!!
だけど、それは一般常識の範囲内さ!!

高校生初日、これまでとは訳が違うレベルの人間が引き寄せられてきたっ!!

「類は友を呼ぶってヤツか!!カッカッカ!!」

「…僕はトラブルはトラブルでもトウーラブな方が良かった…」

仕切り直しに失敗したのもう一度

こうして僕はトウーラブな方ではなく
本物のトラブルを抱えて高校生活初日を終えたのだった…

縁は縁でも腐れ縁 腐ってもつながってる縁って凄くない？

前略、母さん…

なんだかんだで1週間が経ちました…

今は昼休みの時間帯です

何故か、お弁当を教室の隅っこで寂しく食べている訳で…

思い返せば僕は初日から遅刻と課題の提出を求められるというレアイベントを体験した訳ですが

高校生活という貴重なひと時を更なるイベント（恋愛限定）に向けて邁進してる所存であります

しかし、重大な問題が発生致しまし入学3日目…

友達作りのスタートダッシュに乗り遅れました…！！

これはとても重大な問題であります

恋愛とはおおよそは友人関係から発展する場合が多く

また交友関係の広さとはそれだけで女の子へのアピールにも繋がるのになあ…！！

ああ…！悔しい…！！

何よりも悔しいのは…

「流川さ〜ん！ここの部分分からないの〜！おしえてほしい〜な〜？」

「カツカツカ！いいぜえ！ここはなあ……」

「すごい！流川さんって頭いいよね〜！」

…むむ

「田中くん。ちょっと荷物持つの手伝ってえ〜」

「OH！オヤスイゴヨウネー！」

「田中くんすごい！何かスポーツやってたの〜？」

「H A H A H A！！昔、ウミに浮かぶ孤島で亀ノコウラを背負ッ
人とブリュツのシュギョーシテタヨー！」

「へえ〜！素敵〜！」

…素敵じゃないよ！！

なんだよそれ！！

絶対、嘘だろ！！

「頑張ッテシュギョーシタラ、手カラ気功ミタイナヤツデルヨウニ
ナッタヨー！」

出ちゃうの！？

全国の少年が一度は真似したアレをお前は出せちゃうのか！？

「ワザのナマエは…ショー…リュウ…ケン…？」

違うよ！！
それ絶対に違う技だ！！

とにかく、この二人は何故か知らないが非常に人気が高かった
田中は何故か見た目の事はノーツッコミ
そしてあの屈強な身体で愛されキャラクターになっていた

ボスは男女問わずに人気が高かった
やはりボスはボスなだけあって、その人徳は高校生にも通じるので
あるう。

人心掌握術にでも長けているのだろうか…？

「それはチガウで。人心掌握術ちゅーのは悪意や人間の醜い部分
に使うもんや。あの二人は単純な人徳や。
それが一番大事やったりするけどな」

「なるほどな。…ってイナリ！？いつから聞いてた！？」

ってというか僕は喋ってないぞ！

「しかし、見事に孤立したな。ジブン。このまま3年間過ごす訳に
もいかんやろ」

いつもの

ニヤニヤ顔で話してくる…

不気味なヤツだ…

でも実際、それが現実なのだから受け入れるしかないだろう。
実際に話をかけてくれるのは、あそこでモテモテの二人とイナリだ

けだった

「ギギギ…残念ながら反論出来ないよイナリ…」

「なんやねん、そのゲンみたいな悔しがり方…」

中学までは地元のコミュニティの中でうまく回っていたのだろう

僕は高校という少し広がったコミュニティの中でとても戸惑っていた

しかし…!

出会いは劇的でなくてはならない…!

いや

そんなことはないはずだが

王道では必ず出会いはとんでもない所からやってくるのだ…!

「イナリ…!」

「ん?」

「ちょっと、トゥーラブな出会いをトゥーハーしてくる…!」

「なんやねん…!…!…!…!…!…!…!…!…!…!…!」

僕は教室を飛び出し

…駆け出した…!

…そう行くアテもないままに

きつとバイクを盗んだ少年は同じような気持ちだったに違いない

一見、現実逃避に見えるかもしれない僕の行動は
実は理にかなっているのだ

そう、教室を飛び出して廊下に出る

そして急いで駆けていけば

きつと曲がり角で劇的な出会いが生まれるはず…！！

さあ…行こうぜ…ピリオドの向こうへ…

きつと、この曲がり角を曲がれば劇的な出会いg…カスペルスキッ

！！

「ん？なんか当たった、あ…ちょっとおどろいて歩いてんの
〜？（怒）」

…僕は大きな過ちをしたことに気がつく

「やだ〜。コイツパンツ見てんじゃね〜？（蔑目）」

この高校に入って一番最初にこのパターンで出会ったのは田中だった
まさか二度も続くとは思わなかった…

それはぶつかった瞬間にウイルスソフトの名前を叫んでしまいたく
もなる

このパターンは最悪だ

一つ言おう

これが王道であるなら

ピチピチギヤルとぶつかってパンツが丸見えで

少年読者たちから歓喜の声が挙がるシーンである

「マジサイアク〜。今日に限って私、勝負下着履いてきちやったし
い〜（怒恥）」

さて、どこから説明したものか

とりあえず僕の目の前にある状況を説明しよう

確かに僕はいまパンツと呼ばれるものを目にしている

それは若者には刺激が強すぎるくらいに過激な下着だ

いち男性として私は『その下着をどこで買ってくるんですか?』と
問いかけたいくらいだ

そして僕はその下着を目の前にしている

ラブコメ的なぶつかって女の子を押し倒すような形を想像している
だろうか?

…残念ながらそれは間違いだ

僕は駆けていった曲がり角で

圧倒的な弾力性に吹き飛ばされ廊下に倒れていた

そう

… 例えるなら4トントラックに高速道路で轢かれた以上の衝撃だ

そして廊下に倒れたままにスカートをのぞき見てしまったのだ

「なに〜、もしかして当たり屋あ？私に気があるとかあ〜？（得意気）」

圧倒的な弾力性の正体はコイツの脂肪だった

くう、世の中にこんなヤツがいたなんて…！！

絵に描いたようなデブだ…

そしてハデな頭髮にハデな化粧、ミニスカート

そこから覗かせる足はまさにボンレスハムそのもの

大根足なんてレベルじゃない。

こんな巨大な大根を作れる農家がいるならぜひお会いしたいものだ

…！！

おおまかに外見を言い表すならギャルと呼べば良いだろうか…？

あまりにも太ましすぎやしないか！？

その自意識過剰はどこから湧いてくるのか…

そう言いたくなるくらいルックスであった

ハム子だ。うん。ハム子と呼んであげるにふさわしい！

仮にも女の子だ。あまりにもヒドいあだ名と思われるかもしれないがそれしかいいようがないくらいなのだ

「ちよつとお、倒れたままでばーっとしてないでなんとか言いなさいよ〜（微怒）」

マズいな。これではハム子のパンツを覗くという何とも奇妙な変質者じゃないか
残念ながら、思春期の僕でもさすがに欲情には限度がある
ハム子の布切れは僕に理想と現実の全てをぶち壊すほどの破壊力があつた

ここをどう言い繕うかの案が全く出てこない…このままジエンドなのか…

「…って…やだ…（視認）」

よく見たら、私好みの超タイプかも…（一目惚れ

…くっ

僕の魅力的な甘いマスクに虜になったか…

「…っておい！！なんだそれは！！お前は！！不細工です代か！！」

「やだ〜！もう！冗談つますぎい！！おさるさんみたいでちょ〜可愛い〜（はあと）」

なんだ！！これは凄いフラグが立ってしまった！！
誰か！助けてくれ！！

「…子（小声）」

「…え？」

「…だあかあ、私は公子っていうの！その…よろしくね…だありん（照笑）」

はええよ！！

ダーリン認定早すぎ！！

なんだよ！！

しかも公子って！！

けっきょくハム子じゃねえか！！

曲がり角は鬼門で

僕には不幸しか呼び込まないモノだと身をもって実感してしまった…

「これが携帯ねえ…よしっ！これでアドレスと番号交換完了ってカ
ンジい？（笑）」

「ああ！！僕の携帯…！！！」

なんと素早い行動！！

とても厚い脂肪に覆われているとは思えない俊敏さじゃないか…！！

「これからヨロシクね。だありん（ラブ2000）」

なんだラブ2000って！ミレニアムか！！

愛はどこからやってくると思ってた！！

「ああ～！もうお昼おわっちゃう。マジサイアク（怒
だありん～また会いにくるからね（ノシ）」

大きい身体を揺らして素早い動きで去っていった…

あれは動けるデブの見本のようなヤツだ…

くううう…

どうせならきまぐれなオレンジ道っばい後輩にダーリンって呼ばれたかった…!!

なんで…なんで…

僕にはこういうフラグしか立たないんだ

はあ、教室に戻るっ…

教室に戻る足すら重たい…

…

「そんでトゥーラブな出会いでトゥーハー出来たんか？」

放課後

キツネ顔でニヤニヤしながらイナリが話しかけてくる
たぶん僕の答えを聞かなくても答えが分かっているんだろう
彼はそういうヤツだ…

「いや…それ以上はなにも言わないでくれ…イナリ…」

「くっくっく…おもしろいなあジブン。出会いがあっても、なかなか
思い通りにはイカンもんやな」

コイツはどこまでも知ってるな…

「だけど、多かれ少なかれ引き寄せられるのはそれだけ魅力がある

「つちゅーことや。」

慰めてくれているのか何なのかよく意図が見えないな…

「ジブンのおかげでだいぶ色んな情報がもらえてるで。俺も魅力に惹き付けられた一人つちゅーことや」

僕がいつたいなんの情報を与えているのかはよく分からないけど

「本当に…僕を見て楽しんでるだけじゃないか…まったく…」

「なに言うてんの〜！友達やないの！」

…友達？

「えっ！なに今まで友達じゃなかったみたいな顔してんのジブン！ひどいわ〜」

そうか…友達か…

「そつだよね…友達だ…ハハハ！」

全然、意識してなかったけど友達か…

改めてそう認識すると非常に照れくさいもんがあるな…

「カツカツカ！！青春してるかぁ！！少年達よぉ！！」

「OH！！甘酸っぱいラズベリーパイミターナ匂いガスルヨ！！」

どっから湧いてきた！！

「友達作りが出来ないイ？そんなことで悩んでたのかサル!!」

「モンキー!! BOSSとワタシハトックニモンキートフレンドヨ
!!」

「クックック…トウーハーは出来なかつたけど、友情ちゅーんは身
近にあるもんやで」

なんだなんだ… ちょっと嬉しいようななんとも言えない気持ちにな
るじゃないか…

「いや…その…素直に嬉しいといつかなんといつか。みんな…あり
がとつございます…」

「カツカツカ!! よっしや〜!! みんなあの夕日に向かって競争
だ!!」

それは…さすがにベタすぎて恥ずかしくて出来ない…
でも、今日は入学してから一番いい日かもしれないなあ〜
アハハハ…

「よし、友情の証にここにサインしてくれ!!」

サイン?…って田中…なんでぼくの手を取って勝手に書いてるの…?

「OKOK!これであと一人集まれば…部活が結成出来るな…」
ん?

「え？え？ちよつ…ちよつと！つい抵抗せずになされるがままサインした自分もおかしいけど、何ですかそれは！！」

「これは部活の結成の為の書類だ！！俺はこれからの高校生活に向けて部活を作ろうと思う！！以上！！」

何が『以上！！』だ！！

こんなの異常だ！

「しっかし、サインするとは思わなかったで…将来は借金の連帯保証人とか注意せなアカンで？」

おかしいと思ったよ！！

この人たちがこんなに純粹に僕に対して接する事に疑問を持つべきだった！！

「…なんで部活？目指せ！甲子園！とか言っちゃうつもりですか？」

「カツカツカ！それも悪くネエけどな！！」

「っていうか、イナリとボスはいつ仲良くなっただんですか！？」

「おいおい〜サル〜この前言ったばっかじゃねえかあ〜」

お前は何かを引き寄せる力があるんだよ

「こつやって僕の知らないところで3人が引き寄せられたのも僕の力…?」

そんな能力持った覚えないんですけど…
というよりウマく丸め込まれてる気がする…

「よっしゃ〜！！明日からこの4人で部員探しをするぞ！！」

「OH！！ボス！！モンキーとキツネ捕まえるなんてまるでモモタローネー！！」

桃太郎にキツネはいねえよ！！

「クツクツク…面白くなってきたなあ？ジブンのおかげで高校生活が楽しくなりそうやで」

僕は理想の高校生活から遠のいてきてるんですけど…

「カツカツカ！！騙すような真似をして悪かったサル！！
でもお前がいなきゃつまんねえし！何より…大事な仲間だからな！
」

…うん、反則的だなあ

そんな良い顔されて断れないじゃないか…

それに僕は心のどこかでイヤイヤしながらも

3人といることが楽しい

そんな風に思ってしまったのがなんとも言えない複雑な心境だ

「僕の憧れの学校生活は普通の学園ラブコメの恋愛と青春なんですよ！…こんなじゃないです…！」

まあ

楽しいだなんて口が裂けても言わないけれど（絶対にか
らかわれるに決まってる…！！）

こうして僕は放課後に帰宅部にならずに
謎の部活に入る事になったのだった

恐怖は未知への恐れ 既知に対しての臆病

草木も眠る丑三つ時…

しかし、現代社会には眠る時間なんてあってないようなもので恐怖の意味合いも昔に比べてだいぶ薄まってしまったように思う

暗闇には必ず光があつて

それが闇に対する恐怖を薄めているんじゃないかな

それでは

闇に対する潜在的な恐怖は拭えない

むしろ大事な根本から目を逸らす為に光があるようにも感じてしまう

そんなわけで僕はいまベッドに横たわり

草木も眠る丑三つ時

つまり日付が変わって間もない深夜にこうして語っている訳だ

人間は逃避行動というものをするとどこかで聞いた

ラブコメで恋愛に不慣れな主人公が女の子に迫られて、素数を数え始めたりする

煩惱と戦うアレだ

そして僕はその同じような状況に置かれたら煩惱と戦うまでもなく現実を堪能するだろう

どうして長々とこのようなどうでもいい話を僕がしているかというところ現実からの逃避行動の為だ

つまり

僕は現実から逃れたいと思えるほどの状況にたっているわけだ

…みんなはこんな経験ないだろうか？

夜中に暗い中、隙間が気になる事

微妙にクローゼットとかが開いてたりすると何かが見えてるような気がしてならない

隙間こええええ！！

…いや、僕が直面している問題はそこじゃないんだ

むしろ、そのくらいのほうがマシだった

だって

ホンモノが僕の目の前にいるんだから

窓際になんかいる

そのなんかを確認出来ないまま今に至る

未知の恐怖だ

幽霊がいる！！

GYAAAAA！！

言っちゃった！

幽霊とか言っちゃった！！

K O E E E E ! !

だって、なんかいるんだもん!!

否定しようがないよ!!

こんな事は生まれて初めてだ!!

誰か!!ゴーストスイーパー呼んでくれ!!

鬼形くんでもいい!!頼む!!

何か部屋の隅であらぬ方向を向いてるソイツ

っていつか髪が長くてどっち向いてるんだか分からない

まさに貞子だ

ん?

気のせいか

さっきより僕に近づいてきてるような...

...そんなことあってはならないと思うよ僕は

そつだ!気のせいだ!気のせいだ!!

...トンデモ体験は学校だけで充分だ

まさか安息の地である家でこのような事が起きよつとは誰が予想し

ていたであろうか

…僕は予想していた

高校に入ってからからのトラブル続きに僕は慣れきってしまっている

いずれは僕の生活を飲み込んでとんでもない事態になっていくことは想定していた

想定範囲内です（キリッ

でも、オカルトがくるなんて想定はしていないよ

女の子が空から降ってくるとか

そういう方面の妄想はたくさんしてたんだけどなあ

世の中は甘くないと何度教わっただろうか…

そうこうしてるうちに

僕の足下まで幽霊が近づいていた

金縛りというんだろうか

身体が動かない

…これは実に怖い…！

ここまであたかも視認して、その幽霊がいるほうを見ているかのよ
うに語っているが

実は

怖くて（怖すぎて）

なにかがいる方は見ていないのだ

ただ

確かにそこにいる

その気配だけはしっかりと伝わってきているのだ

ホラー映画でノソノソと近づいてくる幽霊っているでしょ？

あれは嘘だ

気がついたら一気に距離を縮められてる

某サイヤ人の瞬間移動みたいに突然目の前に

…そう目の前に

…目の前

…

目の前にいるっ！……！！……！！……！！……！！

「…っ！…！！！」

あまりの驚愕に声が出なかった

というより、さっきから叫び声一つあげれない

さっきから幽霊と言っているが

この何かが幽霊なのかすら分からない

恐らく僕との距離はあと数センチでキスしてしまいそうなくらいに
接近している

近すぎる！！

心臓がとまりそうだ！！

僕に長い髪がまとわりついてくる

顔は…髪の毛で覆われていてまったく確認出来ない

白い洋服？みたいなものを着ているのはなんとなく分かる

なんなんだ…なんなんだ…なんなんだ…！！

なぜこの何かは俺にまとわりつき、俺に何を求めているのかまったく
くをもつて謎だ

…！？

まさか、僕に取り憑いて呪い殺そうとでもいうのか！？

そんなオカルトは怖すぎる！！

まだ巨大なマシユマロマンに踏みつぶされた方がマシだ

そんな事を言ったら余計に怖くなってきた

その何かが僕の耳元に近づいてきた…

ぎゃあああやめてええ!!

呪いの言葉で僕を殺さないでえええええ!!

「…わぶ」

「…え？」

ちくわぶ…

…？

どうやらリアルな呪いの言葉はとても美味な練り物のように聞こえる
というより練り物そのものだ

「…は？なにいつてんの？」

声が出た!!

金縛りとは何だったのか!!

思わず素のトーンでつつこんでしまうほどだった

「ち…くわぶ…」

また言った!!

こいつ、ちくわぶって言ったぞ!!

関西人には馴染みが薄いよ!!

関東の方じゃないとなかなか出てこないぞ!その単語!

なんて残念なヤツなんだ！！

幽霊だとしたら残念幽霊だ！！

せっかく出だしは良かったのに一言でぶち壊しやがった！！

僕の中で恐怖感はすっかりなくなっていた

未知が既知になる瞬間を確かに感じていた

「なんの目的があつてここにいてる？出だしからの流れで混乱するぞ

！」

「ひっ…！か、歌舞伎揚げ…」

一瞬、僕の反応に驚いた仕草のあとに

また関東圏ネタを絡めてきやがった！！

お前は関東圏の幽霊なのか！？

「…」

無言かよ！

僕がベッドから身を起こし

幽霊らしきモノは僕から転げ落ちた

「…高杉晋作…」

ひょっとして単語しか喋れないのか…？

チヨイスがいちいち分からない

今回の言葉は関連性が見いだせないし…

おもむろに転げた姿勢から立ち直りまた僕のそばにやってきた

「…なんの目的で僕に近づいてきたんだ。」

「……………すりの銀次」

なんだ！！僕の総資産からいくら盗むつもりだ！！

「…駄目だ。話にならないや」

すりすりと僕に顔（らしき部分）をすりよせてきた
まるで猫みたいだ

さっきの恐怖感はどこへ行ったのか

そして、こいつが何なのかは未だに掴めない

…って！！もうこんな時間！！

明日、学校じゃん！！

規則正しい僕の生活は些細な事で乱されてしまった！！

長い髪の毛のお化け（仮）がいることを些細な事と言ってしまっ
ているのかどうか分からないけどね

以下、朝です

僕はそのままお化けらしきモノに構わずに眠った
さつきまでの恐怖や金縛りが嘘みたいに健やかに眠れた

…昨日の出来事はなんだったんだ

そしてここはマンガの定石のセリフを言ってみたいと思う

「きつと夢だったんだ！！それにしても変な夢だったなあ！！」

「……………じゃりん子チエ」

いた！！

そして懐かしいなソレ！！

幽霊なら朝には消えてるよ！！

普通は朝になつたらいなくなつてるパターンだろ！！

「つてことは…幽霊…じゃない？」

そう考えるのは早計かもしれないけど

暗闇でよく見えなかったが

今は朝の明るい時間になつたのでよく見える

きめ細やかな肌

白いワンピース

長い黒髪から分かりづらすぎるが微妙に顔を伺える
かなり小さな体軀をしてるな

ロリだロリ

それにしても、こんな残念なヤツに僕は怖がっていたのか
こうしてみると小動物的でなかなか可愛いもんじゃないか
思わずナデナデしてみた。

「デストロイ」

コワッ！！物騒な言葉使うなオイ！！

つていうかこれから学校なんですけど…
まさか付いてくる気じゃないだろうな…

「これから学校なんだけど…分かる？学校？」

「で…でらべっぴん…？」

言っていない！！そんなこと言っていないよ！！
一分も伝わっていない！！
分かる人にしか分からないよそれ！！

「言葉が分かんないか」。僕、行く、学校、君、ここで待つ、分
かる？」

身振り手振りでコミュニケーションを取ろうとする

なぜコイツを家にとどめておかなければならないのかはよく分から
ないが

僕が安全に学校に行く為にもその事実をなんとしても伝えなければ
ならない

「…？」

…伝わってなかった！！

翻訳こんにやくが欲しい！！

「…翻訳…コニヤック？」

惜しい！！ってというか、成人御用達のひみつ道具かそれ！！
ってというか言葉に出してないのに伝わった！！

まあコニヤックで言葉が伝わるのもあれだし…コニヤックでも悪くない…

「…って違う！！そんなことを考えてる場合じゃない！！とにかく行くからな！！ついてくるなよ！！」

僕はジェスチャーで強く示し、コイツを拒絶した

部屋から出てパンをくわえて外に駆け出した

朝からとんでもなく異文化コミュニケーションしたな

以下、学校にて

「おはようさん。なんや疲れとるなあジブン」

「おはよう。イナリ。」

「……パラガス」

…伝わってなかった!!

かなりの勢いで走ってきたのに憑いてきやがった!!

パラガスってなんだ!!

潰されるのか!?

「ぬおおお!!なんで憑いてきた!!」

「なんや。ジブンいきなり大きな声だして。何かあったんか?」

「だって、コイツがずっと家から憑いてきたんだぞ!!大声出さずにいられるか!!」

「コイツ?家から?何言つとんねん。ちゅーか、なんの話や。」

「だからコイツが…」
「指を指して言いかけた瞬間」

だからコイツって誰や。ジブン、気味悪いなあ。

うゝむ

冷静になれ

いま流行りの自分にしか見えない女の子とでも言っのだからか

そつえばこんな黒髪のロリを連れてきたのにクラスはいたって平常運転のような気がしないでもない…

いや、それ以前に僕の存在を気にする人間なんて一人もいな…あれ、

なんか凄く悲しい事言ってない？

「イナリには、コイツが見えないの？ここにいるのに…」

必死でイナリに説明する。

コイツはうさん臭いやツだけど分かってくれさー！

「…いやいや…そうかそうか。よ～～～～く分かったで

「分かってくれるのかー！昨日からずっと…」

「ついにキャラを確立したんやな！霊能力キャラとか一瞬、地獄先生を彷彿とさせたでー！！なんやー！！どっちの手が鬼の手になったん！？」

…伝わってなかったー！！

そんなキャラを確立させて僕になんのメリットがあるというんだー！！僕はそんなにキャラクター性に欠けたヤツだったとでも言うのかー！！

「…アウグストウス？」

「そうか…お前は慰めてくれるんだな…ありがと…」

コイツの言葉は意味不明だが慰めてくれるという事は分かった
なんだ、最初から言葉なんかいらなかったんやー！！

「どうしたん…ジブン…意味不明な事ばっか呟いて…」

「いや、もういい…もういいんだ…俺の事は気にしないでくれ…」

ここで哲学的な話をするなら

僕一人がその存在を認識したからといって
他の大多数が認識しなければそれは存在しているといえるのだろうか？
とても難しいな…

この子は本当にいるのだろうか？

確かに僕にははっきり見えるけど、これは幻覚で僕はただの痛いヤツなんだろうか

「かつかつか！！そりゃないぜえ！！！！」

「H A H A H A！！ワタシはリッコ先生大好きダツタヨー！！」

…話がややこしくなりそうな人がきた
ってというか地獄先生の話はもう終わってる！！

「俺はよおサル。百人が見えなくても、俺が見えればそいつは確かに存在する。そう考えてんだよ」

「…信じてくれるんですか…？ボス…」

僕はボスの器量の大きさに胸を打たれた…なんて出来た人なんだ…

「カツカツカ！！地獄先生じゃなくて、みえるひとのキャラ設定だよなサル？」

…伝わってなかった！！

どうしてそういうネタ方向に持っていきたがるんだ…

ん？元凶であるコイツ
なにやら袖を引つ張られた
何か言いたい事があるらしい

マトリョーシカ…

もう駄目だと思った

夢か幻か… 一人の観測者しかない真実

「というわけで 第32回放課後定例会議を始めるぜえ」

…

「OH!まさに放課後にティータイムネ!」

…

「なんや、この会議もだいぶ板についてきた感じがするなあ」

…

「マゾツホ…」

……………!!

「ちょ、ちょっと待ってください!」

色々とツッコみたい!!

「第32回ってなんですか!いつ、そんなに、僕抜きで怪しげなメンツで集まって何をしてたんですか!」

「…というわけで今回の議題は『サルのキャラ立ちの仕方』についてだぜ!」

スルーかよ!!

僕の事について議題をだしておきながらの華麗なスルー！！

「だから僕のキャラはそんなに立ってないのか！というか勝手に僕を議題にするな！！」

「…というわけで、ついに人には見えないモノが見える設定でキャラ立ちを目論むサルだが…」

スルーかよ！！

設定とか言っくな！！それじゃ滅茶苦茶イヤツみたいじゃないか！！

いや…

確かにコイツは他の人には見えないんだよなあ…

なんとかしてコイツの存在をみんなに認識してもらおう方法はないものだろうか

人の気も知らないでポッキー食べてるし…

つうか、モノ食べれんのかよ

知れば知るほど謎の生命体だ

人間とは違う

感覚というか直感でそれは分かる

しかし、見た目は髪がボサボサだが人間と大差はないようには感じる

そんな生き物になつかれる僕はいったいなんなんだろう

僕の目にしか写らない…認識出来ない事に何か意味があるのだろうか

「…じゃあ、荒木先生は吸血鬼の末裔ということで異論はないな？」

「…なんでそんな話になった!？」

僕のキャラ立ちの話からなんで吸血鬼説になつてんの!？

確かに若いけれども!！

「OH!！ジヨジヨ先生ハ!！ヴァンパイアダッタノカヨ!！」

ジヨジヨ先生とか言うな!！

出来る限り直接的な表現は避けているというのに!！(それでも)

「いや、今日も有意義な会議だったぜえ!！」

ちよ、ちよ待ってくれ!

ここで終わっちゃ駄目だよ!

な…なんとかしてコイツを認識してもらう必要がある

というか僕の膝の上にお菓子をこぼすな!！

「ちよつと待って!！」

僕は精一杯の引き止めをしてみた

「おつ!サルうゝやつと発言したか。お前がクラスに一人はいる
休み時間に突っ伏しちゃうヤツになるんじゃないかと心配してた
こだぜ!！言ってみるサル!！」

余計なお世話だよ!！

なんでそこまで心配されなきゃいけないんだ!!
イカンイカン…

ここは抗議ではなく、せつかくの説明の場じゃないか
存分に説明をしようじゃないか

「実はかくかくしかじか…」

うん、文章の妙技を使い説明した
昨晚の出来事

そして今に至るまでを

この説明をするまでにどれだけ回り道をしたんだよ…

さすがにみんな耳を傾けてくれている

そしてしばしの

「なるほどな。ジブン、そんなことがあったんか。」

さすがイナリ！理解力がある!!

「SHIT!! モンキーハニユーヨークの幻ネ!!」

その表現だとまるで僕が幽霊みたいじゃないか!!

「おおよその事情は分かったぜえ。サルよお…」

ようやく話は本題に入ろうとしていた

「そうなんです！それで…」

「それで？…カッカッカ！仮にその話が本当だとしてよお。」

ボスは続けて次のように言う

「俺らに見えないヤツがいたとしてどうすりゃいいんだ？サル、お前はどつしてほしいっていうんだ？掃除機でそいつを退治すりゃいいのか？それとも仲良しこよしをしろっていうのか？」

…

ふくむ、確かに正論だ

というかどうしてそこまで考えが及ばなかったんだらう。

昨日の恐怖におののいていた僕はいち早くコイツを退治したいと考えていただらう

しかし僕の膝の上で黙々とお菓子をほおばり続けているコイツはともじゃないが退治したいとは思わない

どんな理由で僕にしか見えないで

どんな理由で僕の元にいるのだらうか

そして僕はボス達に何を求めてたんだらう

理解してほしかった

ボス達なら何か今の現状を打破してくれそうな気がした

多分、だから…話したかったんだらうな。

「カッカッカ！！サルよお！！お前はカワイイヤツだなあ！！！」

いやいや、可愛い顔したボスに言われたくはありませんよ

「その顔だと、何も考えてないで頼ったんだよなあ？」

…見抜かれてるなあ。

「困った時に頼られるのも悪い気分じゃないぜえ？学校生活はこのくらい刺激がねえとなあ！」

こんな刺激は学校生活という場所ではなかなかないと思うけど…

「やっぱ、ジブンといると何やらオモロイ話が転がってくるなあ」

僕もそう思うよ…

自分の事ながら、こんな面白人間たちに囲まれるなんてそうそうないよ…

「んで、そいつはどんなヤツだ？どんな見た目とか分かる範囲でいから説明してみるよ」

「身長は僕のお腹くらいで、見た目は黒髪が腰の辺りまで伸びてて、でパツと見人間と変わらない…」

僕はコイツの容姿を説明した

そんな情報で何が分かるというのか

「それよりなにより…言葉が伝わらなくてコミュニケーションがとれません…」

そうなんだよな。

何よりも原因の大本であるコイツが何も情報を発さないのが問題である。

「んで、そいつはいまどこにいるんだあ？」

「僕のここらへんです」

僕は自分の膝を指差す（正確には僕の膝に座っているコイツを指差しているのだが、周りから見たらそう見えるだろう）

「カッカッカ！そうか！！」

この人は本当に動じない人だ
おもむろに僕に近づいてきた

「よお！チビ！名前はなんて言うんだチビ？」

「……………洞爺湖まりも」

「洞爺湖まりも…と言ってます。」

僕は間髪入れずにコイツが言ったセリフをボスに伝えた

……………

絶対にそんな名前じゃないよ！！

洞爺湖まりもってなんだよ！！

お前は北海道のキャラクターか？

ポスト銀さんでも狙ってるっても言うのか!?

脊髓反射的に通訳したけど、おかしいだろ!

「そんな青々しい名前かあ!! 良い名前じゃネエか!! カツカツカ
!! よろしくなチビ!!」

名前で呼んでやれよ!!

結局はチビって呼んじゃってんじゃないか!!

僕も名前とか認めちゃってるし!!

「イエス!! マリモツコリ!! マリモンロー!! ヨロシクナ! スモ
ール!!」

まりもつこりは百歩譲っていいけどマリモンローは知名度低いよ!!

「くつくつく、名前決定やな…よろしくなまりもちゃん」

「…いや、イナリ…そっちにはいない。こっちにいるから…」

あらぬ方向に手を振ってるイナリを指摘する僕
ベタな間違いつて本当にあるんだな…

「…じるばちよふ」

当の本人はあまり分かってないようだった。

何? 出てくる単語は寒い地方限定なの?

ゴルバチョフが寒い人って言うてる訳じゃないよ

「カツカツカ！名前も聞いたし、俺らの当面のチビに対しての対応なんだが…正直、手が付けられねえ。俺らに見えないモノだし、判断材料が少なすぎるぜ」

「えええ…確かに唐突に言った僕も悪いし、頼ってる身でこんな事を言うのもあれなんですが…対応策とか…ないんですか？」

「そんなものはねえ！！」

「言われた！！」

「きっぱりと否定された！！」

「それによおサルう。今のところお前に危害はねえじゃねえか！そのまま飼っててやれよ！」

「飼うって…」

「ペットじゃないんだから」

「それに幼女を飼うって凄く背徳感に溢れていて犯罪的なんですけど…ああ…！！僕はロリ属性はないぞ！！」

「そんなこと言われたら少し意識しちゃう気がしないでもないじゃないか！！」

「OH！！モンキー！！モンキーハイワユル『マスコットの存在』ヲテニイレタネ！！」

「あれか！？」

「モンスターをボールで捕獲するような冒険活劇に出てくる電気ネズ」

ミとか

契約して無垢な女の子を魔法少女にさせるような憎たらしいヤツか
!?

「ちょうどキャラ立ちの議題やったし、ええんちゃう？新しい属性
手に入れて良かったなあジブン」

その僕のオプシヨンみたいな感じはどうなんだ!?

っていうか、その議題が今になってまだ続いてたことにも驚きだよ
!!

「カツカツカ!少しずつ少しずつチビを理解して行ってやれ!なん
であれチビはサルにしか見えない。サルが俺たちを頼ったみたいに、
チビだってサルを頼るしかねえんだ!俺たちはああだこうだは言っ
てるが、親愛なるサルに精一杯協力するつもりだぜえ?」

「ボス...」

たまに恥ずかしくなるような事言ってくれるよな...
本当に心強いよボス...

僕はコイツ...もとい『まりも』に話をしてみることにした

「あゝ、まりも...ちゃん?」

まりもは自分に話をかけているのが分かったのか僕の方に顔を向けた

「昨日と今日と悪い事しちゃったね...それは謝るよ。ごめん。」

「...かざぶすたん」

その言葉からは何も読み取れないが
なんとなくながら気持ちには伝わってくるような気がした
大事なのは言葉じゃないんだな…

「それで…よければ、君が抱えてる問題を僕たちが解決しようと思
うんだ。今は何も分からないけど、これから少しずつ分かり合えれ
ば…と思う…。」

…なに、このセリフ…!

恥ずかしい…!

何かプロポーズするときと言つみたいなセリフになってる…!

「…きんぴらごぼつ」

僕の首元に腕を絡めて、抱きしめるような形でまりもはそうつぶや
いた。

これは…感謝…なのか？

きんぴらごぼつは僕の好物ではだけれども…って違う…!

「かっかっか！万事解決つぽそうだな…!大事なマスコットだ…!
可愛がつてやれよおサルう…!」

…

ここにきて僕はマスコットという言葉にほだされて大事な事を失念
していた

他の人に見えないマスコットって意味がないんじゃない…

日常と非日常の違いが主観でしかなかった場合

今日は休日

学生生活というのは長い暇との戦いでもある

大人になってから、その怠惰な時間を愛おしく感じる…って近所のおじさんが言ってたのを思い出す

そんなわけで

僕について話をしようかなと思う

この物語は基本的にそういうプロフィールみたいな情報が圧倒的に少ないよね

細かい設定はいっぱいあるんだよ？

作者がドヤ顔で情報を少しづつしか提示しないんだ

多分、僕の苦勞や心情の3分の1も伝わってないんだろうな…

そんなメタな発言は置いておくでしょう

僕が住んでいる街は『苗美』と書いて『なえび』と読む

そこそこ大きいけど、あくまでそこそこだ

田舎の人から見れば、それなりに都会ともとれるし

都会の人から見れば田舎に見える

中途半端！！

数年前に駅前ショッピングモールが出来て

そこから徐々に便利な町から街になった感じかな

少し歩けば綺麗な田園風景が広がるし
駅前はそれなりに栄えてるし

健やかな街で僕は育ったなあ

そして県立苗美高校が物語の舞台だ
春には桜が咲き乱れるとてもキレイな場所だ

駅から歩いて数分の場所にある

緩やかな坂を上っていくと脇に見えてくるのが僕の高校

なんでこの高校に入学したか、って？

そりゃ

女の子といちご100%するために決まっているだろ

う

こんな綺麗で青春の甘酸っぱいかほりのする舞台が近所にあるのだ
そりゃ入学当初にいちごパンツを履いた女の子に出くわしたり
赤い麦わら帽子かぶった女の子と階段が100段か99段でモメたり

しかし現実とは違っていて

僕は世紀末的な人に囲まれて

それを屈強な黒人男性に助けられた

それはそれで違う意味であり得ない話ではあるんだけど
誰しもがそっちの展開は望まないだろう

そつからどう間違つたのか

おにゃのこに生まれ変わった元マフィアのボス
よく分からないうさん臭い悪友

そして僕にまとわりつくようになった

洞爺湖まりも（仮名）

…僕の周りは仮名だらけじゃない!?

コードネームばっかのエージェント漫画でもあるまいし…

まりもは他人には見えない無意味なマスコットキャラクターだ
今も僕の部屋の隅で漫画を読んでいる（ように見える…というか読
めるのか？）

ここまでは今まで分かっている高校入学までのおさらいだ

ここから家族構成の話しよう

幸せな事に僕には妹がいる

僕がドキドキのラブコメを望んでいる事は周知の事実だと思う

妹がいる

この事実だけでご飯が3杯イける紳士もいるだろう

しかし

現実には甘くないのである

妹は可愛い

そこに恋愛感情は存在しないのである

君は素っ裸のかーちゃんに欲情するであろうか？

つまりはそういうことだ

自分の家族を褒めたりするのは少し恥ずかしいが
よく出来た妹である

僕の妹がこんなに優秀なわけがない！！

ちなみに妹は今家にはいない

ちょっと出かけているとかそういうレベルじゃない

今はヨーロッパに留学している

これは後々、フラグになってくるに違いない話だと思っ

これが血のつながってない幼馴染みならそれは胸がときめく話だと思っ

しかし血の繋がった妹だと…ねえ？

小学生の時からよく出来た妹だったけど

まさか中学で海外留学とは…

僕の妹がこんなに優秀なわけがない！！（2回目）

というわけで、ここ最近手紙や電話でしか知らない妹な訳だけど
どうやら何かと順調なようだ

専用列車で学校まで向かったり
メガネをかけた冴えない同級生とか
イヤミな別のクラスの男子とか
優しいヒゲの校長先生とか
森に住んでるヒゲの巨躯な中年男性の話とか

そんな話をよく聞いていた
あつちの学校でうまくいつてるようで何よりだ

…妹の話はこれくらいにしよう

父の話だ

父は…行方不明

らしい

実際のところよく知らない

母いわく

世界を旅する二ツ星ハンター
だとか

魔物使いで今は石にされているとか
宇宙を支配しようとする帝国軍人
魔界三大妖怪だとか

元巨人の名三壘手だとか
史上最強の生物 e t c …

聞くたびにその内容が変わっている

僕はもう慣れっこなので聞き流している
とにかく僕は顔も知らないし
どんな人だったかもよく覚えていない

別に嫌いとかそういうわけじゃないんだ
いなくて当たり前だった
どうもピンとこない存在とだけ言っておこう

最後に母親か…

いま僕は母親と二人暮らしになっている
生活は不自由してないし

実は父から毎月生活費等が振り込まれているんじゃないかと思う

母親に関して謎が多い

なにを話しても濁されるといつか丸め込まれるというか…

でも良い母親であることに間違いは無い

やっぱり僕に取って母は偉大な存在だと思う

でも…あまり褒めすぎると調子に…

ふと後ろから気配がした

「…アラアラ。あらあらあらあら！！」

母親だ…

「ごめんなさいね！！男の子のティッシュタイムにお母さんが邪魔
しちゃ悪いわよね。発情期の猿みたいなお年頃ですもの…お母さ
んは何も気にしてないのよ。ただ…息子の成長が嬉しいというか。
あっ、もちろん息子の成長っていやらしい意味じゃないわよ！！も
ちろんそっちの方も元気だな。とか少しは思っちゃったりしなくも

ないけど、お母さんは健全な気持ちで言ったのよ！まさかあんなに小さかったのに、今は馬並とか思ったりもしたけど…やだ！お母さんったら馬並だなんてはしたない！ごめんなさいね。まだまだ触れられたくないお年頃よね。思春期の息子に向かって何を言ってるのかしら私。ああ…お父さんが若い頃は七つの海を駆け抜ける大海賊で、ひとつなぎの財宝とか見つけちゃったりしてね…呪いの財宝を解放してあげたりもしたわ。お母さんもあの頃は女海賊として名を馳せてたのよ…。お父さんったら、この世のすべてをそこにおいできたけど、お前だけは手放せなかった…なんて言ってくれちゃって…も…！あなたもお父さんによく似てきたわね…。あの人は本当に素敵だったわ。…ごめんなさいね！お母さんったらいきなり感傷に浸っちゃった！もう年かしらね…。やだやだ！年だなんて言っちゃったわ！…まだまだお母さんだつてイケル年齢なのよ？この前、商店街の八百屋さんの斉藤さんに『奥さんはまだまだ若いです。旦那さんのことはもう忘れて僕と一緒になりませんか』なんて言われちゃって…！でもねお母さんしつかりと断ったわよ…！偉いでしょ？やっぱり離れていてもあの人が一番だもの…。あらやだ！お母さんったら息子になんて話をしてるのかしら！そういえばね…」

「長いよ！！この作品が始まって以来の長セリフだよ！！ドラマだつたら役者さんが大変すぎるよ！！」

息子の性事情から

母親の女の顔まで

どれも聞きたくないし関わりたくない部分だよ！！

この通りの母親だ。

「この通りの母親です みなさんよろしくね」

「駄目！読者に語りかけちゃ駄目！世界観もへったくれもないから！！！」

本当に何を言い出すか分からない。
少し抜けていて、とてもデンジャラスだ

「お母さんね、暗黒の力が働いちゃって力が暴走しそうなのお母さんほどの能力者だと魔王アルデゴラスにまで影響を及ぼすほどのよね。こんな日に出かけたら、この人間界にどんな悪影響があるか分からないわ。私の代わりに今宵の晩餐の調達の任をお願い出来ないかしら？」

「今晚のご飯の買い出しね。…分かったよ」

…たまに少しだけ厨二が入る

小さい頃はお母さんの発言を真に受けてきた。

段々と社会的な活動範囲が広がるにつれて
僕にも分別がつくようになってくると段々と母親の対処の仕方も分かってくる。

「これがミッシヨンのリストよ。私は波動の疼きを抑えるので
いっぱいいっぱいだからヨロシク頼むわね」

そういつて、材料のリストを渡される

「…これは、何の料理？」

「あらあゝ？分からないの？」

「いや、そんなに料理とか詳しい訳じゃないけど…カレーとか？」

「今日はチュニジア風のクスクスよ」

わかんねえよ！！

どこの日本の家庭でいきなりそんなエスニック料理が出てくると思うんだよ！！

もう少し分かりやすい料理をこつこつ出したいものだね！！

「…分かった。とにかく買ってくるよ」

「つぶぶ。よろしくね。それと…」

おもむろに母がまりもに目を向ける

「ちよっ、母さん！まさか、まりもが見え…」

「あらあら…まあ」

まりもに近づくと母親

やっぱり母さんは侮れな…

「駄目よう。こんなところにこんなもの置いてちゃ…あらやだ、こんなにハードなのが趣味だなんて！」

違う！

違うけど違う！！

そこは青少年の一番触れちゃいけない部分だ!!

まりものすぐ側に落ちていた口に出すのすらはばかれるような
かがわしい雑誌だ

おそらく

まりもが僕の秘密の隠し場所から見つけ出して読んだ後に放置した
に違いない

「前はベッドの下と押し入れの天井裏に隠してたのに、いつの間に
こんな大胆になっちゃったのかしら。こういうのは恥ずかしいか
ら隠すものだって思ってたけど、最近の若い子は違うのかしら……」

バレてらっしゃる!!

たまに整理してあると思ってたけど、そういうことだったの!!
何だろう、全国のお母さんに共通するよねコレ
なんなのコレ。

「分かった!!もういいから!!もう行くよ母さん!!」

これ以上いたら僕の傷口がさらに開きかねない

僕は自分の部屋から足早に出た

「あらあら…反抗期かしら…お土産ヨロシクね」

アンタのお使いだよ!!

なんで、張本人がお土産頼んでるんだよ!!

以下、外出後

これで落ち着いた…

「…はたはた」

「うおっ！！いつ間に付いてきた！！いや、憑いてきたか…」

まりもが僕の服の裾をつかんで横にいた

まりもと共生してから、少しずつ分かってきたことがある

コイツは俺らの喋っている言葉が分からないし、俺らにも伝わらないでも喜怒哀楽といった感情はある程度は持ち合わせているようだ
何というか感情同士での会話というか

会話とは言えないけど、ほんのわずかだけれどコミュニケーションの糸口はあるようなのだ

そして片時も僕から離れようとはしない

もしかしたら離れられないのかもしれない

あと、お菓子とか甘いモノが好きなのは分かった

コイツは幼女キャラの基本を分かっている

幼女とお菓子の親和性についての講釈はまた今度にしよう

「おう！！いらっしやい！！今日はお母さんじゃないのか？残念だわ〜」

「お母さんじゃなくてスイマセンね…」

八百屋の斉藤さんだ…

人の母親を口説いておいてよくもまあこんな風に接することができるもんだ

「それより食材を買ってこいといわれたんですが…ここにありますか？」

僕は母さんに頼まれたリストを見せた

「そんなことより、お母さんは元気か！？いつも会うたびにシャンプーの匂いがするんだけど、どこのシャンプー使ってるのかな！？オジサンあの残り香にクタクラなんだわ！！自分も同じ香りになってみたいな…なんてな！！ガハガハガハ！！」

…いつも通りゲスいなあ

そんな話を息子の前でするスピリットは尊敬に値するよ

自分の母親がこんな風に見られてるなんて青少年にしたらもの凄いトラウマだぞ！

「はあ…」

「ガハガハガハ！！ちゃんと頼まれてたものは用意しておいた！きにするこたあねえ！！その代わりお母さんのシャンプーのメーカー…」

「どうもありがとうございました！母親が待っているのです！！それじゃ…」

これ以上は僕が不快な思いをするだけなので、品物を受け取りつまく逃げる事にした

「…獣神さんだーらいがー…」

まりもは僕に憑いてきながらつぶやく

「そうだね…リヴァプールの風になったんだね…」

我ながら適当な返しだ

この時の適当は

ベストな返しという意味合いと

いい加減な返しという二つの意味合いがある

買い物、中略

途中でまりもにアイスを買ってやった

こんなに疲れるなんて…

買い物に行く先で必ず出る母親の話題

どんだけ有名人なんだよ母さん…

まあ、これに必要なモノは全部買ったし…

あとは帰るだけだよな

「だ…だれか…だれかおらぬでござるか…」

ふむ、どこからか声が聞こえるぞ

「おい、そのの猿…そう、お主だ。ちょっとこっちへ来てはくれぬか…」

どうやら僕のご指名のようだ

というかまた僕は猿なのか。

自分でも認識してしまうのが悲しい

声の主は、細い路地裏から聞こえるらしい

夕方のちよい前くらいだけどなかなか暗い…

「たぶん…僕が呼ばれたんですよ…?」

「おお…やっと呼びかけに応じてくれる人がいたでいじわる…」

「どこにいるんですか?」

「じじいおるでいじわるよ…」

ゴミ捨て場…?」

…?」

…!」

ゴミ捨て場に人が捨てられていた

「大丈夫ですか!?!どうしたんですか!?!…つてええ!?!」

僕は捨てられている人を抱き上げて気がついた

この人…

女性だ

しかも生ゴミくさい…

「うう…すまぬが…某に食糧を…空腹にやられた…でいじめる」

「わ、分かりました！！とりあえず僕の家まで…！！」

僕は女性を抱えたまま家に向かおうとした

「それとすまぬが…」

「ん？」

女性は続けざまにこう言った

「ご飯はチュニア風のクスクスで頼む

ああ…なんか厄介な者を拾ってしまった

このとき僕は直感でそんなことを確かに感じ取ってしまったのだ

ほんの少しの勇気が世界を変える　なんか規模がでかそう

私は…たくさんの旅をした…

いくつもの、いくつもの

一人の旅はとても孤独…

そういうのが当たり前だと思ってた

以下、食卓

「いやあ、母上殿の食事は大変に美味でござるなあ」

「あらあら〜。」

「ハツハツハ！これなら毎日作っていただきたいでござるよ！…！」

「…ワクワクさん」

…ここで前回のおさらいをしよう

僕は夕飯の買い出しに行った訳だが

途中で生ゴミに紛れた女の子を拾った

「それにしても母上殿はクスクスを知っているなんて…何故かこの国はクスクスがあまり普及してないでござる」

それから僕は夕飯の材料と、『ここで』『じゅる』『じゅる』と言ってる時代錯誤な彼女を抱えて家までたどり着いた

「あらあら、私はなんでもは知らないわ。知ってることだけよ」

母さん！

「ハツハツハ！」「知るを知るとなし、知らざるを知らずとなす、これ知るなり」うむ、母上殿はとても聡明な方でござるな！」「

多分、そこまで考えてないよ母さんは…そのセリフを言いたかっただけなんだよ…

母さんは、僕が女の子を連れて帰る事を予知していたかのように家に帰ると何故かお風呂を準備していた

そのときも『なんでもは知らないわ。知ってる事だけよ』とか言っていたなあ

パクリが露骨すぎるよ母さん…

とても危険な母親だ

かくして、自分の家のお風呂に

知らない女の子が入浴するというドキドキのイベントであったのだがいかんせん第一印象が生ゴミにまみれた謎の女の子ということでもドキキする余裕なんてなかったのだった

しかし、お風呂からあがった彼女を見てちょっとびっくりいや、かなりびっくり

長い髪は頭の後ろで結ばれて

母さんが用意していた部屋着からは

…なんと説明したらいいだろうか

Tシャツから身体のラインがすっかりと浮き出ていてとてもエロく感じた

ナイスバディと言ったら陳腐な表現になるだろうか

しかし、出るところは出ていて引っ込んでいるところは引っ込んでいる
僕が怪盗の3世だったら、今すぐ服を脱ぎ捨ててベッドにダイブする
ような体つきをしていた

そしてその表情

とても凜としていて、整った顔立ちをしていた。

美人だ。それは顔だけじゃなくて心の強さからきている雰囲気
がそう感じさせているものなのかもしれない
言葉遣いの…そう…サムライ！よく漫画に出てくる武士娘！それを
想像してくれば分かりやすいと思う

「さて…紹介が遅れたでござるな。」

ご飯を食べ終わり、僕の部屋に来た

僕の気持ちを汲み取ってくれたのか紹介が入る
読者のにも謎の少女のままだと気持ち悪いよね！

「この度の恩義、たいへんに感謝しております。拙者…」

…

… 21世紀からやってきた、人間型ロボットでござる

！！

「おいしいいい！！それ今！！！！未来ですらねえよ！！！！そこは2

2世紀から来いよ!!」

思わずツツコンでしまった

「ハツハツハ!!猿氏は的確なツツコミが出来る素晴らしい御仁でござるな」

中年のおっさんが宴会の時に使いそうなネタを仕込んでくるな!!
何なんだ…まったく…

「冗談はさておき…拙者は世界を旅する流浪人…さながら剣心といったところでござるな」

その引用はダメだ!

脳内設定でお前のCVは涼風真世になっちゃうよ!!

「なんと!拙者は緒方恵美氏のほうでござるよ!!」

脳内ツツコミを読むな…!

それにドラマCD版の声優のほうかよ!!

「まずは名前だよ名前!お前はいつたい何者なんだ!？」

「ハツ!これは失礼いたしました!名も名乗らぬうえでこのようなジョークに付き合っていただけとは…猿氏は本当に懐深き御仁…」

本当だよ…自分で自分が恐ろしいよ

「…ディープリンパクト」

まりもおお！いきなり何か関連性のある言葉を喋ったと思ったら、映画か！？馬なのか！？

それとも、それだけ深い衝撃だったのか！？

一言だけ言つて、僕の膝の上で食後のお菓子を食べている…
これ以上は何も望めんな…よく分からなすぎる

「…コホン。名乗るのが遅れ、大変失礼いたしました！改めて自己紹介させていただく。拙者、狭間 あさひ（はざま あさひ）と言つ者でござる」

…変な名前だな

「偽名でござる」

「偽名かよ…！」

「いやはや、拙者は特定の名を持たぬ故…」

いま、この場に置いてはそう名乗るのにふさわしい名
だと思つているのでござる…

…なんだなんだ

その言葉は何を意味しているのか僕はよく分からないぞ…

「拙者、世界を旅している身でござる…」

「いや、それはさつき聞いたよ」

「そうであつたか！それは失礼した！」

大事なことだから二度言ったとでも言いたいのか

「実はとある目的が…いや…これ以上は…うぐむ」

あさひは言いかけてやめる

「そこまで言われてやめられたら気持ち悪いし、凄く気になるよ!」

「いや…しかし、これ以上言うと…猿氏にも迷惑が…」

迷惑?

そんなに危ないことなのか?

生ゴミで行き倒れてるような人間だぞ?

しかし、物語はこういう所から発展するとも言っし…

ここらへんで主人公ぽいことを言っておけば、ラブコメ展開も望めるんじゃないか…?

生ゴミ女とラブコメは疑問点だが

イベントを解決していくうちに可愛いヒロインが登場してきて、そこからのキャキャウフフの湯けむり恋愛マル秘作戦が…

ああ…!!…もう…!!

… G O K O M E …

…いきなり膝の上のまりもが目の前の壁を指差すような仕草でつぶやいた

「まりも…それは行けって事なのか…？このフラグに向かって突き進めというのか…？」

コイツが意見を言うのは始めてだ
というか、これがGOサインを意味しているのかは謎だが

「…先ほどから何を言っているのでござるか？」

そうだった、あさひには見えないんだっとな

…まりも

お前の意見を少しは聞いておく事にするよ…

ほんの少しの期間だけとお前とはずっと一緒に過ごしてきた訳だし
コミュニケーションはとれないけど…ちょっとは信頼関係築きあげ
てきてるよな…？

…これ以上の考えは無意味！！

ええい！ままよ！！

「あさひ！！僕はこれまでもいくつもの大きな悩みを抱えて生きて
いる！！」

僕は嘘は言っていない

ボスや田中の話も聞いた

入学早々、恐ろしい先生にも目をつけられたし

様々な青春のバッドエンドフラグをたててきたけど

今日で終わりにしようじゃないか

「これは理屈じゃないけど、あさひはとても大きな悩みを抱えてる

んだろ？なんとというかさ…僕を心配してくれる気持ちは分かるけど、僕も一度乗りかかった船というか…いちど関わった以上は放っておけないしさ…？」

「猿氏…」

本心だ

もういまさら一つ二つ悩みが増えたって構わないよ

「いやしかし…それでも…」

あさひはまだ言いよんどる…

「大丈夫！僕は平凡な高校生だけど、最近は色んなイベントに巻き込まれてちよつとやさつとじゃ動じなくなってきたよ！頼りないかもしれないけどさ！僕で良ければ力になるよ！」

「…うゝむ」

「まかせてよ！」

僕が力強く声をかけてから

あさひは少しの間、何かを考えてから声を挙げた

「…猿氏よっ！！感謝するっ！！」

…！！

僕は静かに力強く抱きつかれた

「あっ…いや…あ…」

思春期の高校生には強い刺激だ
なんと男らしい抱擁だろうか
少女漫画のヒロインがこんな風に抱きしめられたら一発で惚れてしまつてあるつくらの抱擁だ

彼女は女なので男らしい抱擁という表現が適切かどうかは疑問だけれども

それにしてもなかなかのおっぱい…

これが巨乳とよばれる柔らかさなのだろうか

ボスの時とは違った感触にまたもや未知の扉が開けた気がする…

「…ボイジャー1号」

僕が女子のおっぱいに想いを馳せていると
あさひの背中を突き抜けてまりもが顔を出してきた

…これはなかなか気持ちの悪い体験だ
人体をすり抜けて顔を出すなんて…それ、なんてホラー？

ふと、まりもと目が合ったような気がした

一瞬にやりとしたように見えた

そう思つた次の瞬間

まりもの目が光つた！！

「…ウワツ！！まぶしっ！！目からビーム!?」

バカな

目からビームなんて単語を日常で表現方法と使用するとは思わんか

ったわー！！

つか、眩しっ！！

なに！？その攻撃方法！？

っていうか、なんで攻撃した！？

思わず、あさひを身体から引き離してしまった

「…おっと！これは失礼した猿氏よ。思わず興奮して抱きついてしまったでござる」

「いや、気にしないで…」

僕はまりもにやられた目を押さえながらそう言った

僕が空中城の王様なら閃光に目をやられて絶叫していただろう

実際に相当にやられてるわけだけど…

「それより、良かったら話の続きを…」

「そうであったー！！」

…色々話の腰は折れたが、ようやく話の本題に入るみたいだ

「…猿氏は召還ってというのは知ってるでござるか？」

「コイツはいきなり何を言い出すんだ？」

「召還？」

「えっと…召還っていうと、神話の神様の名前とかが使われちゃう最後のファンタジーとかそういうやつ…？」

「うむ、いかにも。実は拙者、召還術が使えるでござるよ」

「はあ…」

あっさりとした告白だった

意味が分からないし

淡々と言われてしまったので驚きに欠ける

「さすが猿氏！私の発言に微塵も驚きもしないとは！相当な修羅場をくぐり抜けているのでござるな！」

いや、普通の高校生ですけど…

「それで召還術っていうのは具体的に…？」

理解に感情が追いついていないが話をつなげようとする

「うむ、それを今から説明したいと思う。これを見てくれ」

そうすると、僕と一緒に運んできた彼女の手荷物の中からモノを取り出した

「これは…弁当箱？…え？弁当箱？」

説明するまでもなく弁当箱だった。

ドでかい弁当箱

白米と梅干しが一つしか入ってなさそうなイメージの弁当箱だ
金属製の大きめの弁当箱だ

「やくまだあゝ！」

「え！？どうしたのいきなり！？」

いきなりあさひが奇声をあげた

「これは失礼した。この弁当箱を見るとつい『山田』と叫びたくなるのだ。」

よく分からないが、コイツは残念な美人なんじゃないか…そんな風に思えて仕方がなくなってきた

確かにドデカイ弁当 略して『ドカベ…』

「おっと、猿氏！話がそれってしまったな！この弁当箱は私にとっては大事な召還機なのだ」

「意味が分からん！！もっと魔法陣とか杖とかそういうの使うイメージがあるんだけど…」

「ハツハツハ！猿氏よ！ゲームや漫画の見過ぎではないでござるか？」

いや、ゲームとか漫画くらいしか召還って単語を結びつける材料が僕にはないんだよ！

「うむ、しかしまだまだ若輩者ゆえあまりに巨大な生物は召還するにはいささか不安なのでな！大体は異次元から物質を取り出す能力を多用する」

「異次元から物質…」

「そう！！分かりやすく言うなら『異次元ぱけつとおく』！」

それこそ猫型ロボットのようなニュアンスで僕に伝えてきた。こんなところで前半のポケのフラグ回収をするな！しかも、そのガラガラ声は旧のほうだよねそれ…

「よし、では例を実演してみるでござるか！！」

そう言うと真剣な顔つきになり、ゆっくりと弁当箱のふたを開けたそれと同時に弁当箱からまばゆい光と煙が飛び出した

あまりの煙と光に僕はたまらず目をつぶった
今日はよく目をやられる日だな…

というより、これは本当に召還術なのか！？
これが手品だとしたら、とんでもないイリユージョニストだ

数秒間、目をつぶった
そしてようやくおさまったと思いつつゆっくりと瞳を開けた
そこには…

「うむ…実に見事な輝きでござるな」

「うお！危ない！なんていうもの持ってるんだ」

その手には大きな剣が握られていた
シヤレにならんぞ！

「ハツハツハ！召還は凄いでござろう！！のび太氏！！」

「いや、のび太くんはそんな物騒なモノ欲しがらないから！！」

まさか、昨今の日本という国で

円卓の騎士の王様が使ってるようなソードを見る機会があるとは思わなかった

「おっ！猿氏よ！勘がいいな！！いかにも！これは円卓の騎士の王が使っていた剣らしいぞ！！」

「え、え、ええええ！？それってエクスカリ！！」

そう言い終わらないうちに

あさひは僕の方を向いて
大きく剣を振り上げて

え？

僕に…

僕に…

斬り掛かってきた…！！！！！！！！！！

「うわあああああ！！！！」

ひたすらに絶叫した

僕は何もする事が出来ずに成す術もなく…
斬られて…死をむか…

…

…えなかった

「あれ？…あれ！？あれええ！？」

僕は斬られた箇所を確認するがまったく傷跡がなかった
わずかばかりの痛みが僕の肩に残るだけであった

あさひは不敵な笑みを浮かべながらこちらに向いていた

「ハツハツハ！安心してほしいでござるよ猿氏！！」

「いきなりなんてことをするんだ！！これじゃ、殺されるまでもなくシヨツク死するところだったじゃないか！！！」

「大変に無礼な事をしたことを許して欲しい！しかし、身をもって召還術を体験していただくのが一番良いと思ったのでござるが…」

「謝つてすむ問題でもないよ！！なんでそれを最善策として考えちゃったかなあ！？」

普通の人間なら、こんな事されたら激怒とかそついう話じゃない
なんだかんだ言って許してしまっている自分が憎いぜ…

「うむ！実は召還とはこちらの世界に呼び寄せるだけじゃなくて、
あちらの世界に逆に自分自身を召還する事も出来るのだが…」

その話と今の流れは何か関係があるのだろうか

「それを利用して異次元を旅するのが拙者の真の目的なのだが、一
度だけ次元と次元の間に迷い込んだ事があったのでござるよ…。」

異次元旅行…名前だけ聞くと凄いことに聞こえるな…

「さすがの拙者も抜け出すのに苦労したでござる。その次元の狭間
とある御仁にお会いしてな…そこで奪っ…もとい、いただいたも
のだ」

「いま奪ったって言いかけたよね!？」

とんでもない人だった!

しかも奪ったのはあの伝説の聖剣エクスカリ…

「違っ…」

「…え?」

えくすかりぱーだ!!

通りで無傷で済んだわけですよ…

なに?世の中には本当に存在すんのアレ?

ビッグブリッジの人は理不尽に幻の聖剣を奪われたわけだ…

「うむ、つまり拙者はこうやって召還術を使って世界を旅したり、色んなモノを召還できたりするわけでごさるよ。」

いつの間にか手に持っていた剣：エクスカリパーは消えていて
弁当箱だけを抱えていた

「何か…凄いモノを目の当たりにしちゃって言葉も出ないよ…」

当然だ

ラブコメを望む一般高校生がファンタジーに巻き込まれてしまった
わけだから

むしろここまで普通に対応出来ているのはゆとり教育の弊害なので
あるうか

あさひの存在だけで、ファンタジー小説が一本かけそうな勢いだ
そのくらいのファンタジーが目の前で繰り広げられている

「うむ、猿氏が知らないだけで世の中にはまだまだ知らないモノが
いっぱいあるということでごさるよ」

まったくをもってその通りだ

一般高校生は世の中を全然知らない

そんなことは当たり前だろう

それにしても…

こんな事実は大人も知らないだろう

『異世界の召還師』

そんな肩書きはロールプレイングゲームでお腹がいっぱいだ

履歴書の職業欄にすら書けないよ

「ちなみに、異次元への自分自身の召還はともお腹が空くのでござる。たまたまこの世界にやってきた時にゴミ捨て場に着陸して、そのまま空腹で動けなくなっていたでござるよ！ハッハッハ！」

来たばかりで生ゴミに突っ込んだなんて、とても不憫な話だなあ

…ふむ

ここまでの話の中でずっと思ってた疑問が再燃してきた

「そんな召還師様がどうしてこの街…いやこの世界にやってきたんだ？」

「うむ、根本の疑問を聞いてきたでござるな！そして、これから話すことは召還とかそれよりもヤバい話なんでござるよ」

召還よりヤバい話ってなんだよ！

黒マテリアでメテオでも降ってくるのか！？

「実は拙者はとある人物を追いかけて世界を旅して回っているのをござるが…その人物がこの世界にいますというのを感知してやってきたのでござるよ」

「待つて！あさひ以外にも時空だか次元だかを飛び越えられるヤツがいるってこと？」

「いかにも！私の家系は代々召還師の家系で、何百年ものあいだソイツを追っているらしいのでござる」

「らしいって…よく分からないな…」

「まあ、実際は拙者の母上と父上からそう聞いて育てられたというだけで、イマイチ実感も湧かない話でござる」

そういつて何ともいえない顔で苦笑いをされた

「どうやら、そのとある人物は様々な世界にまたがって観測されていて、いつどこに現れるかがギリギリにならないと分からないらしいのでござる」

「難しい話だな…」

「うむ、数百年の間にランダムに出現してその世界に災いをもたらすという話でござるよ」

ますますファンタジー色をおびてきた話だ
世界に災いって…まるで想像がつかない

「そして、どうやらこの苗美という地にその存在の残り香を確認したでござる…」

「え？こわっ！！世界規模で災いをもたらす存在がここにいるって
いうの！？」

とんでもない話だ。

そんな世界規模の災いの話が僕の部屋でされているのも不思議な話だ

「でも残り香があるだけで詳しい事は調べてみないとなんとも分からないのでござるよ…」

大体の話は飲み込めてきた気がする

…
ここまで聞いてきた感想

極々、一般市民で未成年の平凡な高校生男子にどうい
う出来る問題じゃねえ！！

それはそうだろうさ

あれだけ

協力するよ！！

と格好よく言っておいたくせに

これは非常に格好わるいぞ！！

なんか、ファンタジーに少しだけワクワクしてて忘れてたけど
僕はメラもホイミも唱えられないわけで…

「うむ！拙者からの話はこういうことでござる！猿氏！」

「は、はひっ！？」

まずい…これはなにをお願いされるんだろうか…

「…一宿一飯の恩義！！そして、拙者を救ってくださった！その寛
大な心に報いる為に猿氏に力を貸す事を約束しよう！」

…？

「そうだな…さしずめ…拙者は未来から来たネコ型ロボットのポジ
ションだと思ってほしいでござる」

なんだ…と…？

「という訳だ、拙者は今日からここにお世話になる！！君の為だ！」

「オイ！！体よくここを宿代わりにしようってことじゃないだろうな！？」

「まで！！この家主は母さんだ！！それに男女が一つ屋根の下で暮らすなんて不健全…」

「あらあら…いいじゃないの。私もドラえもんか21エモンみたいな子が欲しかったのよ」

「言っちゃった！！さんざん遠回しに表現してきたのに言っちゃったよ！！」

「それに21エモンはちょっと違うよ！！」

「母さん！！いつからいたとかそういうツッコミはあえてしないよ！！それよりも本当にいいの！？」

「お母さん、来る者は拒まず 去る者は追うってスタンスなのよ」

「タチ悪いな！！ヤミ金みたいだよ！！」

「おお！！母上殿！！このような得体のしれない私に対する慈悲…アナタが神か！？」

「あらあら、狭間さん、私は死神と契約なんてしてないわよ」

「しっかりと息子どのお守り致す故！安心してくだされ！..」

「あらあら〜頼もしいわね〜。」

「いや…もう何も言うまい…僕は疲れた…」

「あっ、そうそうこっちへいらっしやい」

僕は母さんに手招きされる

何の用だっけと言っただ？

母さんは僕にこっそり何かを手渡される

…！！

ここでは言えない…

何を考えているんだこの人は…

ちゃんとゴムつけないとダメよ〜？無計画は人生を棒に振る事になるわ〜

女の子の目の前で息子に避妊具を渡すヤツがあるか！！

しねえよ！！

最悪だ！

実の母親に性事情を心配されるなんて…

「母さん！！ふざけるのも大概にしてくれ！わかった！分かったから！！もう出て行ってくれ！あさひも！！あとは俺一人にしてくれ」

僕は二人を部屋の外に追い出そうとする

「ちょ…いきなりどうしたんでござるか…！」

「あらあら〜」

「とにかく！詳しい話は向こうで二人で話し合ってくれ…！」

「難しいお年頃なのね〜」

「悩める青少年ということでごござるな！青き春とは見事な表現と言
える…！」

僕は扉を閉めた

「ふう…」

しばらく一人にしてほしかった

「…ぴすけす」

そうだった、まりもがいた…

離れようにも離れられないしな

「今日はもう寝るぞ…明日も学校だし…」

「…もんでいぱいそん」

僕は電気を消してベッドに入った

まりもがあとを追ってベッドに潜り込む

やれやれだ…

こうして、僕の激動の休日は終わりを迎えたのであった
悩み事が増えても大丈夫とは言ったけど

これはなかなか頭の痛い事情だ…

そんなことを色々と考えているうちに睡魔が襲ってくる…

お…やすみ…な…さ…い…

自分が蝶々なのか人間なのかよく分からない

僕は深いまどろみの中にいた

そこは見た事もない景色が広がっていた

「どこだよ…ここ…」

現代では考えられないような建造物の数々

近未来的なようで、とても古いようにも感じる

とても栄えた…いや、まさに繁栄の絶頂にあるかのような都市が見える

その中でも一際に僕の視界を捉えて離さない建造物がそこにあつたとともに…とても…大きい…

言葉では表現出来ない

今までにこんな大きな建物は見た事が無い

それどころか地球上にこんなに天高くそびえ立つ存在があつただろうか

雲すらも突き抜けんばかりの

塔…と表現するのが的確だろうか

とにかく僕の短い人生の中で想像出来る大きさの範囲を遥かに超えた、それはそれは大きな塔が目の前に存在した

…そびえ立つ巨大な塔にはたくさんの明かりが灯っていた
そこに住むたくさんの人々の姿が目に入った

そこで暮らしている人たち

それは幾万年の時が経っても変わらない。人々の営みの景色

しかし、どこか寂しげで 儂げ

存在を遠くに感じてしまう

まるで僕とは大きな隔たりがあるようにも感じた

いま僕はこの街に存在している…

それにしても俯瞰的で、息一つで消し飛んでしまいそうなくらいだった

僕はその塔を駆け上がった

本来ならば、これほどの塔を駆け上がるなんてのは無理であろう

しかし僕はいくまでも俯瞰

俯瞰のまま塔の外壁に沿って流れるように昇って行く

この繁栄しきつた街の中

たくさんの人々

それなのに

とても静かだ

音がしないというのは

とても心地が良い

そして…

…とても不安だ

僕は塔の一番上までやってきた

見下ろす

今までいた場所がとてつもなく小さくなっていた

片手ですべてをつかみ取れそうなくらいに

そして僕は気がつく

どこまでも続く大きな星

地平線が遙か彼方に見える

地球の丸さを計るにはこれ以上ない絶好のロケーションだった

僕はひとしきりの感情を堪能した後に塔の中を覗き込む

塔の最上階は大きなホールのような広い部屋だった

そこには何百人の人が一人の女性にかしずいていた

女性は何百人の前で、大きな玉座……という表現が正しいと思う
玉座に鎮座していた

場所が場所だ

その女性の姿はとても荘厳で、同じヒトであることすら忘れてしま
いそうな位の輝きを放っていた

女性は何かを呟いている

すぐ側にいた男性が近づき耳を寄せた

男性は女性からある程度の言葉を受け取ると

全員に聞こえるような大きな声で女性からの伝言を伝えている…と
思う

なぜ『思う』なんて単語を使ったのかというと

僕には聞こえないからだ

あくまで俯瞰

僕はこの場にはならない存在なのだろうか？

そうしていると、玉座に座っている女性と目が合ったような気がした

けて…

その美しい顔を僕の方に向けながら何かを呟いた

「え？何…？聞こえないよ…」

「…けて」

僕は必死に聞き取ろうとする

彼女に近づけない…

遠い…

あまりにも遠すぎる…

ああ…

…とたけけ

僕は目を覚ました

あゝ、ぼーっとする

「…とたけけ」

「うわっ！！まりも！！」

僕ははつきりと目を覚ますとまりもに馬乗りされていた

「…とたけけ」

「任天堂！？」

あとすこしで聞き取れそうだったのに！！

なぜ夢とシンクロするような単語を言うのかなあ！！

「おお、起きたのでござるかのび太くん」

声の方を振り向くとあさひが押し入れ…もといクローゼットから出てきた

「ネコ型ロボットか！！」

なんだのび太くんって！！

ご丁寧に布団まで敷いてある

僕はまりもを抱え上げ床におろしてから、深呼吸をしてからあさひに向き直った

「なんであさひがここにいるんだ！なんでクローゼットの中にいる！！」

「目覚めからいきなりツツコミが冴え渡っているでござるな猿氏！」

朝からツツコミたくなる状況下を作る方がすげえよ！！

「しかし…いきなりシリアスな文章から入るから違う小説が間違っ
て投稿されたんじゃないかと心配したでござるよ」

「いきなりメタ発言で心配しないでくれ！！」

「おおっと！質問に対する返答がまだでござったな！拙者…猿氏を
守る為の警護の任があるでござる…そこで猿氏が就寝したあとに忍
び込んでクローゼットに睡眠道具一式を運びこんだでござるよ」

僕のセリフに被る勢いで、僕の部屋への領海侵犯が告白されていた

「勝手に人の部屋に入るなよ！！しかもなんでクローゼットチョイスだ！」

「いや、人の家に居候する時の基本は押し入れだと読んだマンガに
書いてあったのだが…」

「ネコ型ロボットか!!」

コイツ、絶対にそれしか読んでないだろ!!

「いや…しかし、よく考えて欲しいでござるよ猿氏。これはとても繊細な問題を解決しているでござる…お互いのプライベートの侵害を、部屋と押し入れを挟む扉…この一枚の隔たりで見事に解決しているでござるよ。これは熟年夫婦のマンネリな関係にも有効な手段になると私は気がついたでござる。この一枚の隔たりは夫婦仲を取り持つ大きな一歩になるのではないか…機会が来たら学会にプレゼンしようと思うのだが…」

「俺が旦那なら押し入れを寝室にされた時点で別れるわ!!」

あさひはいきなり何を言うんだ!!

学会にプレゼンするほどの発見ではないぞそれ!!

「ハツハツハ!! まあ良いではないか!! 私は受けた恩は全力で返す。そう心がけているのだ! 私は、猿氏のプライバシーを尊重して最大限の譲歩としてココを寝室にしたのでござるよ!!」

あさひは、就寝中に勝手に部屋に入ってきた時点でプライバシーの侵害をしていることに気がついていないのだろうか?

しかし……

あさひは黙っていればそれなりに見える顔だ

確かにそんな子と同じ部屋になると考えたら

僕の精神衛生上よろしくない

この壁の隔たりは確かに大きいかもしれない

……ってそれじゃ僕が、そこを寝室にしていいますよ。って認めて

るみたいじゃないか!!

「というわけで、ふつつかものですがこれからよろしくお願いする
でござる」

「なっ…」

あさひは姿勢を正し、深々と頭を下げた
僕は不覚にもそのセリフに照れてしまい言葉が出なかった
それって嫁入り前のセリフみたいじゃないか…

「では早速…朝食のどら焼きでも食べるでござるか？」

「……ネコ型ロボットか!!」

さすがに朝食どら焼きはねえよ!!
どら焼きとか言えば何でもネコ型ロボットになると思ってたのか!!
たけしのモノマネでとりあえず『バカヤロウ』とか『コノヤロウ』
とか言つとけばいいみたいになってるわ!!

「ああ…もう!それより母さんは?」

「母さん?おお!猿氏の母上なら朝早くに出かけられたでござるよ。
なんでも、『機関に気がつかれた。こちらから機関のアジトを叩き
に行かなければならない』だそうでござる」

「いつものヤツか…」

母さんは謎の『機関』に狙われている…

っていう設定だ

とても巨大な組織で、国家間にまたがって裏で活動している
っていう設定だ

「それと、伝言を預かっているでござるよ」

「なに？」

ゆうべはおたのしみでしたね

「ふむ…なにかの暗号でござるうか」

あさひは首をかしげて考え込む

しかし、僕はそのメッセージが何を指すか分かっている

「そのセリフが言いたかっただけじゃねえかあああ！！！」

まったく…自分の母親がなぜ宿屋の主人のようなセリフを言うのだ
それにしても冷静に思い返すと

中々、ゲスの勘ぐりな発言だよな。

今のご時世ならセクハラになりかねん発言だ
良かったなRPGで！！

まあ僕が言われたのは母親なわけだけど

そんな元ネタを思い返していると、まりもが服の袖を引っ張った

「……わらっていいとも」

「ん？」

僕はまりもの声に耳を傾ける

「……めざましてれび」

ん〜……ちょっと意味が分からないかな〜

ちよつとどころかかなり意味が分からない
なに？

テレビが観たいの？

「おお、そういえば猿氏よ。今日はこの世界では……ヘイジツという
ものではないか？」

「……ヘイジツ？………平日！！！」

僕は急いで時計を確認する

「ラウツ！！チエエンツ！！！」

何故か、ヴァーチャなファイターの中国人キャラクターの名前を叫
んでしまうぐらいに驚いてしまった

みなさまお気づきだと思っけど

今日は平日

そして僕は高校生

今日は学生の義務として
教育を受ける為に学校に行かなければならないのだ!!
正確には義務教育ではないので、義務ってほどでもないんだけど…
僕は真面目なのだ

時間はギリギリ…いや、今から走ったとしても間に合うまい…

昨日は早めに寝たはずだ
しかし、ドタバタなイベントのせいで予想以上に疲れていたのもあるだろう

そして夢の…せい？
寝てんのに疲れるって言うのも変な話だけどさ

「猿氏よ!!状況は分からないが切羽詰まっているのだな!？」
僕の慌てふためいた姿に何かを感じ取ってくれたのだろう。
そんな言葉をかけてくれた

「ああ!!急いで学校に行かなきゃいけない!!ここから走ったら…1時限目を少し遅れるくらいか…?」

「なにいい!?猿氏は線に萌えるというのか!?!」

「1次元じゃねえよ!!萌えとか言ってるな!?!どんな聞き間違いだよ!?!」

1次元萌えとか上級者すぎるだろ!?!

「うむ！さすがの拙者も1次元萌えと言われたら引いているところ
でござった…」

そりゃそうだろうよ！

なかなか高度な次元の属性だよ

いや、低次元だけど

…ってうまいこと言ってる場合じゃない！

「とにかく！！時間がないんだ！！僕はもう行かなきゃいけない！
話は帰ってきてからにしてくれ！！」

そう告げて、僕は部屋からあさひを追い出そうとした

「待たれよ！！この私に良い考えがある！！」

僕の行動を静止するかのように声をあげた

「なに！？悪いけど冗談ならまた今度にしてくれ！本当に急がなき
や」

「うむ、つまりここからその場所まで遅れずに行きたいのだな！？」

「それが出来たら苦労しないよ！！」

「あい、分かった！！拙者にまかせるでござる！！」

そういうとクローゼットの中から例の召還機を取り出した

「ま…まさか！？」

僕は一筋の光明を抱いた

こいつは召還師…そして、召還機で召還と呼ばれるもので異次元を旅してきた

僕の目の前で見せてくれたモノは確かであった
イケル！！いけるぞ！！

「そうか！！その召還機を使って

」

「いや、無理でござる」

「そうか！さつそくたのm

ええええええ！？」

そつくるか！

あげて落とす作戦か！！

コイツがそんな小悪魔なヤツだとは思わなかった！！
とんでもないアゲハだ！！

「ハッハッハ！これは異次元と繋ぐ為の装置で、この世界の中をワ
ープ出来る代物ではない…決してどこでも行けてしまうようなドアで
はござらん」

それならお前になにをまかせればいいんだよ！！

その余裕はどこからくるというのか！！

「さつきから、女の子がフレンドリーに接してきて、コイツ俺に気
があるんじゃないかね？と思ってたら次第にこつちから意識し始めちゃっ
て、告白したら ゴメン私そついうのじゃないから…これからも良
い友達でいよう？って言われた時の顔をしているでござるよっ。」

「してないよ!!そんな思春期の揺れ動く気持ちをこの短時間で感じたとは思えないよ!!」

結構、的を射てる…のか?

「しかし、安心するでござるよ。この召還機では無理
と言
うだけでござる」

そう言つと弁当箱…もとい召還機のふたを開ける

「
っ!」

僕は昨日のまばゆい閃光がでてくるのではないかと、とっさに身構えた

「
あれ?なんで?昨日みたいにピカーッ!とかモワッ!とか出ない訳?」

「ああ、あれでござるか。やはり魔法で重要なのは雰囲気と演出だ
ろうと思つて
過剰な演出を試してみたでござる!!
てへっ!」

「てへっ!じゃないよ!!なんでわざわざそんな演出したの!?!」

拍子抜けだった

光りもしないし、煙がモクモクとでるわけでもなく普通に弁当箱が開いた

弁当箱の中に手をつ込みガサゴソと何かを漁っている
しかし…不思議なモノで、弁当箱の中に腕がすっぽり入っているあ

たりホンモノなんだな。と感じる

「フフフフ…見て驚いちゃダメでござるよ…拙者がこの世界のどこへでも行ける道具を持っているとは想像もしてなかったでござるう？」

「いや…だから最初からそれを期待してたんですけど…」

「見よ！！猿氏よ！！これぞ、世界中どこへでもワープ出来る画期的な道具！！その名も『どこでも』」

「ネコ型ロボツ」

取り出した手を高く上げようとしてるあさひ
発言を先読みしてツッコんでやるうと思った

ウオシュレット式トイレ〜！！』

「トか…って…何か携帯式のトイレみたいな名前になっちゃったよ！！」

僕は耳を疑った

どこでもウオシュレット式トイレ…？

いつでもどこでもお尻は清潔に保ちたい人に最適そんなネーミングだよ！

「ハッハッハ！！驚いて言葉も出ないでござるう…？」

…

手には白鳥の形のおまるが握られていた
いまだき珍しいぐらいにベタなおまるだ。THE・オマルだ！！

「よし！！猿氏よ！！参るぞ！！！」

「どこにだよ！！おまるでどこに向かえって言っただよ！！なに？
下水道にでも行こうっていつのか！？」

「ハツハツハ！亀忍者のミュータントとピザタイムでもするので！！」
「ざるか？」

「こんなのデタラメだ！オマルで世界中にワープ出来るなんて…エ
イプリルフルは過ぎたぞ！？」

「おっと、世界中どこへでも…というのはいささか語弊があったで
「じやるよ…」

僕のツツコミを無視して話を進める…

世界中のありとあらゆるトイレにワープ出来るでござ
るッ…！！

「凄いのか凄くないのか分からないよ！！！」

いや、凄いけどさ！！

それさえあれば、トイレに間に合わなかった悲しき迷える子羊たち
がどれだけ救われた事かっ…！！

「それで…その使用方法は…？」

僕は寝起きながら、すでに疲れてしまっていた

「うむ…実にシンプルでござるよ。拙者がこのおまるに魔力を込める」

おまるに魔力を込めるといふシュールな言葉が想像以上に面白くて笑ってしまいそうになったがこれ以上は無駄な時間を過ごしたくなかったので必死にこらえた

「そうしたら、このはしっこに付いている『ヒデ』というボタンを押せばワープが始まるでござるよ」

「『ヒデ』じゃなくて『ヒデ』なの！？誰！？」

とんでもないオマルだ！！

ヒデってどんな機能だよ！！

ヒデくんがお尻を拭ってくれる機能でもついでなの！？

誰が得すんだよ！！

「得するのはヒデくんだ。ヒデくんは人のお尻を拭うのが好きなんでござる」

「変態じゃないかヒデくん！！」

とんでもないよヒデくん！！

変態という名の紳士とかじゃなくてただの変態だよ！！

「いや…でも…オマルでワープするのは抵抗があるというか…」

そりゃそうだろう

そもそもワープ自体が初体験な訳だし

それをオマルでするなんてとんでもない勇気がいるよ

「虎穴に入らなければ虎子は得られんのだぞ猿氏よ！！普通に考えて虎の子供が欲しいとはあまり思わないでござるが」

「ことわざに茶々をいれるなよ…」

「よし！次こそ行こうではないか猿氏よ！！」

「待つて！待つてつて！！」

僕の言葉を無視してあさひは何やら集中しはじめた

「む…」

すると、手から青白い光が出てくる

コイツやっぱ本当に魔法とか使えるんだな…

青白い光がおまるに移っていく

これがおまるでなければ本当に格好がついたと思う。

「青白く光るオマル…」

非常に可愛らしい白鳥がとても不思議な光を放っている

「ふう。これであとはボタンを押すだけでござるよ」

僕は目の前にオマル…便器とも呼ばれるものを差し出された

「これで…学校まで一瞬で行けるんだな…？」

「いかにも！このボタンを押せば学校の…トイレまでひとつ飛びでござるよ」

そうだったトイレにたどり着くんだよね…

どんな感じでたどりつくんだらうか

「よし…押すぞ…」

僕は息を呑んだ

そっと…指をボタンに近づける

「あ、そついえば言い忘れていたでござる…」

「え？」

いま何を言おうとした？

僕は既にボタンに手をかけていた

「『ヒデ』のボタン以外を押すと…」

え？ヒデ以外のボタンを押すと何かあるの！？

僕は自分が押したボタンを確認する為に視界を指先に落とした

ああああ…

僕は期待を裏切らない男だ

もちろん悪い意味でだ

見事に僕は

『ヒデ』の下のボタンを押していた

「猿氏！！そんなお約束まで守るとは！！拙者…ますます感服いた

s

「

あさひの声が遠く遠くに聞こえている

どういうことだ？

さっきまで目の前にいたのに

あれ…？

何か目の前が暗く

僕が最後に記憶にあるのは『ヒデ』の下にあるボタンに書かれた文字だった

『ヨシキ』

も

はや

ただのエックスな日本

じゃ

ないか

この世界はたった今生まれたと言っても私はそれを認識出来ない

夏の匂いがかすかに香り始める

少しずつその日差しが眩しく感じられる太陽

あ…もうすぐ期末テストじゃん

ちよつとした都会と田舎が行き交う

そんな町並みを駆ける

新しい場所にやってきた

まだちよつとだけ見慣れない景色が続く学校

舞台は高校…

夏の描写以下略

私は他の人と同じでありたい

そんな事を思つてるとかいないとか

人間関係に臆病になりがちで…思春期なら少しは考えちゃうそんな
願望を胸に秘めていたりする

思春期ならちよつとくらい…恋愛とかに興味を持つちゃうと思う

もれなく私もそんな一人だ

『BLが嫌いな女子なんていません!!』

あ、違った

なんか名言っぽく聞こえるけど、とんでもない話だよ

訂正するね

『恋愛小説みたいな恋がしたい!!』

女の子なら分かってくれるよね？

素敵な出逢い ドキドキのイベント 甘い誘惑 そんな想いが出来る高校生になりたい

…って言っても何もしてこなかったんだけどね

私の人生の指標は…あんま考えた事ないや

人間関係だけは大事だと思って色々とあくせくしてきたけど
人生の指標って呼べるほどじゃないもんね

小学生のときはひたすら本を読んだ

中学生のときはひたすら本を読んだ

以下略

まとめると

本を読んだ

あれ…？

…？

本しか読んでないみたいに思われちゃう

そんなことないんだよ？

それにさ、こつ本ばつか読んでるって言つと凄く根暗な図書委員的な女の子を想像するじゃない？
それ間違いだから

本を読む以外にもたくさんしたよ？

でもね、自分の為だけにしてること…って考えたら本を読むくらいしか思い浮かばなかった

学校に行くのも 勉強するのも

ぜんぶ他人のため？っていったら変だけど

他の人に迷惑がかからないようにしてるって感じがする

結局は目立ちすぎないくらいにやってるだけのことで

結局は自分の為っていうことになるのかな？

…まあ、どつちでもいいかあ

そういえば、今日は夜遅くまで本を読みすぎて寝坊 遅刻ギリギリになつてしまった

少女マンガ的に言えば

『キヤ〜 今日も遅刻遅刻う〜！！』

と言いながら舌をだしてエヘツとかやつちゃうかんじ

こんなに悠長に考えてはいるけど

実際は心底焦っている

むしろ、そこに少女のかけらも見受けられないほどに焦ってる
女性の朝は戦場って言葉があるくらい

それこそトーストをくわえて走るなんて、自分のことながらベタすぎる…

私は予定調和って言葉が好き
お約束って呼ばれるヤツかな？

『好きな言葉はテンプレート！』
絶対に戻ってくる…って言葉は最近の流行りだと死につながりそう
だけど

愛する彼女が帰りを待っていると、扉が開いて笑顔で生還して抱き
しめ合う

そういうハッピーエンドが好きなの

そうやっていけば必ず平凡な日常が戻ってくるでしょ？

終着点は必ずココ

そういうものに淒く安心感を覚える
人生もそうやっていけば必ず幸せになれるよね？

そうこうしている内にすでに曲がり角を何回か通り過ぎている

今日は珍しく遅刻しそうな日なので

普段の寄り道をやめて、最短ルートを選んでいるんだ

それももうすぐ終わり

次の曲がり角を曲がれば学校まで一直線！！
良かった…なんとか間に合いそう！！

今日も一日何もなく終わり…

ウワッブス！！！！！！

「イツテエエエ！！アニキイイ！！骨が！！骨が折れちまいヤしたア！！！！」

…え？

「オイ！！大丈夫か！？…こりや、ヒデエ骨折だあ…」

…え？…え？

「おいしい！！ネーチャン！！このオトシマエどうやってツケテクレンダアアン！？」

…少し待つて欲しいかな

この現代社会において、こんなにベタなことがあっていいんでしょ
うか

遅刻の間に

走って

曲がり角でぶつかる

この場合はヒヤッハーとバギーに乗り回すような輩ではなくて

「…えしてよ」

「あ？お前

ナに言つて

サクセション！！」

ああ…もう！！！！

一瞬

ほんの一瞬だった

「兄貴イ!!! ああ、兄貴のアニキがアニキになっちまいやしたあア!!!」

私に絡んできた不良はその場でうずくまり悶絶していた…

「テメエ!!! なにしゃがんだ!!! アウフタクト!!!」

掴みかかろうとした瞬間に空中に投げ出される世紀末的不良

「ああ…またやっちゃった…」

勢い良く地面に叩き付けられる不良

強く憤る私

「…えして」

私は弱く呟いた

不良は自分に何が起こったのか

そしてあまりの衝撃に目を白黒させていた

「ア…が…」

不良たちは言葉にならない声をあげ空を見上げていた

その不良たちに更なる追い打ちをかけてしまう…

「返してよ!!! 私の出逢いフラグ!!!」

大声あげちゃった…

「おかしいでしょ？ねえ？おかしいでしょ？ここは『イツタタタ…どこに目をつけてるのよ！このオタンコナス！』って私が謎のイケメンにぶつかるシーンのはずでしょ！？お互いに罵声をあびせあう。今朝からヒドい目にあつたわ！って言いながら授業が始まったら、転校生を紹介されて『あ〜！あのときの！』って言いながら渋谷隣の席になっちゃう展開になるべきじゃない！？」

自分で言いながら、実に論理的じゃないと心では思ってしまったオタンコナスなんて久しぶりに聞いたよ…

倒れている不良を踏みつけ更に続ける

「それがなに！？どういうこと！？あんた達！！出る話間違えてんじゃないの！？アタシが一子相伝の暗殺拳の使い手じゃなくて本当に良かったわね！！本来なら『ひでぶ』とか『あべし』とか言いながら炸裂してる所よ！？」

そんな『本来』はいつさい存在しないけど

「アンタたちいくつよ！？もういい大人になる年齢でしょ！？いつまでもバギーにまたがってヒヤッハーするようなことしてんじやないわよ！！あまつさえ、こんな可憐な女子高生にイチャモンつけるなんて！！マンガのやられ役もいいとこじゃない！！」

お前はこいつらのかーちゃんか！！ってね…

「分かったら早く行きなさい！！次にこんなことしたら分かってるでしょっね？」

私はありったけの不満を全てぶつけた
しかし、時はすでにお寿司…じゃなくて遅し
うずくまった不良たちはモノの見事に気絶していた

「…つたく、せつかく冒頭で可愛い女子高生してたのに…散々じゃ
ない…」

少し動いたので乱れた制服を直しながら呟く

うん

実はね

私が全員倒したの

いや、全然そんな気はなかったんだよ？
でも小さいときからの条件反射と言いますか…

ここで少しだけ自己紹介

私は本が大好きな普通の女子高生

だけど、父親に小さい頃からちよつとした格闘術を習わされて…
気がついた時には『史上最強空前絶後の女子高生（父命名）』って
いうありがたくない称号を頂いてしまった

周りが勝手に言ってるだけで私は微塵も思っていないよ？

だからこそ…普通でありたいかな…

こんなの絶対に人に見せられない

私は普通じゃないもの…

今まで一度だってボ口を出した事はないと思う

面倒ごとに絡まれたらバレないように

瞬殺してきたし

ちゃんとどこにでもいる可愛い女子高生を演じてきた…つもり

「…って、今ので時間がさらに大変なことに！？ヤバい！！急がなきゃ怖い怖い先生に怒られちゃう！！！」

私はビシッと切り替えて走り出そうと

した…けど…

「…OH。クレージージャパニーズガール…」

「カッカッカ！！日本の女子高生ってのはこんなにツエーのか！！オラ、ワクワクすっぞ！！！」

そんな戦闘民族みたいな発言を聞いた

聞いてしまった

「OH！！ボス！！カカロット！！オシッコすると強くなるって本当！？！」

それはターちゃんだよ！！
じゃなくって！！

「ええっ！！
イヤッ！？な…なんで？そんなところに！？」

私は気が動転していた

今まで

今の今まで

一度も気づかれた事はなかった

周りの気配は常に気を配ってたし

へマなんて一度もしなかった

「カッカッカ！お前はあいつらのかーちゃんか！！説教よかったぜえ？」

ハイイ！！全部聞かれてました！！見られてました！！

…

「そう 全部見ちゃったのね」

気が動転してた私は相手のペースに飲まれかけていた
こういう時に日頃の鍛錬（強制）が役に立つ

呼吸を整えて

自分の気を落ち着かせる

「ジャパニーズガール！！タンデンコキユーホー！！ファイティン
グガールネ！！」

…うるさい、周りの音をシャットアウト
徐々に冷静さを取り戻す

「よし！！ 一瞬で決める！！」

私はこいつらを全力で倒す
都合良く記憶を消す！！

私は構えと同時に相手に向かって行った

「カツカツカ！威勢が良い異性…なんてな！！カツカツカ！！」

「アナタ 同性じゃないっ！！」

くだらないオヤジギャグをいう女子高生ね！！（私も女子高生だけど

目の前の女子に向かってグングンと距離を詰める

それなのにその表情はヘラヘラと笑っていた

なんなわけ？アレを目の当たりにしてその表情とかふざけてるの？

自分の力を過信してるわけじゃないけど

余裕の表情に少しだけ苛立ちを覚えた

私は相手が痛がる間もなく一瞬で 一瞬で ？

「さっきの技…確かこうだったかあ？よっと」

私の視界がぐるんと回った

と、同時に背中に少しだけ痛みが走る

？

…？

わけがわからないよ

あ…ありのまま 今 起こった事を話すね

私は確かに彼女に向かっていき一撃で沈めようとした
…と思つたら いつのまにか私が地面に倒れていた

な…何を言つてるのか分からないと思うけど
私も何をされたのか分からなかった

頭がどうにかなつちやっただの？

魔法とか超スピードだとか

そんなちやちなもんじゃ
断じてないわ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わつた気がする…

「カツカツカ！！時を止められたフランス人みてえな顔してるぜえ
？大丈夫かよ？」

女子は私の顔を覗き込む

その顔はとても端正でいつまでも見ていたくなるような顔だった

ああ…なんて可愛い女の子だろう

「って！！違う！！よくも私を ツ！！！」

私は起き上がりに彼女に掴みかかろうとした
…無理だった

「威勢のいい異性だな！！カツカツカ！！！」

「そのギャグ二度目よっ!!」

その後何度か抵抗しようとしたが

その全てを華麗に返されてしまった

私は諦めて力を抜いた

そしてため息を一つついたところで会話を始める

「　　なんなのアンタたち　　？」

「おいおい！そりゃ、こっちのセリフだろうよお！いきなり襲いかかってくるなんてとんでもねえ嬢ちゃんだ!!」

「クレイジーガール!!マサニ映画で観たマンマダッタヨ!!次は鉄球を振り回シテホシイヨー!!」

…うん、端から見ておかしいのは明らかに私だ
いきなり襲いかかる私がおかしい。

鉄球てなんだ鉄球て

つていうか制服を着た黒人と、かなりゆるゆるな私服の女の子…つていうかウチの学校の制服じゃない？なんでアンタが着てんの？
外見的なおかしさで言ったら圧倒的にそっちのほうがおかしいけど。

「　　いや、その…なんかゴメンナサイ。どうしても見られたくない現場を見られちゃって…」

私は素直に謝罪をした
まさかここまで自分が成す術もなくやられるとは思わなかった
圧倒的な敗北

確かに私は父の無理矢理な格闘技の修行が嫌で嫌でしようがなかったけど

それでも積み重ねてきた経験とかにはそれなりに自信はもっていた

小さい頃は体格差で負けていた相手もそりゃいたけど

近頃はそれすらも覆せるくらいの実力はあったつもりだ

それなのに

それなのに

まさか、女子に負けるなんて…

「カツカツカ！！気にすんな！！言われなくても誰にもいわねえよ！！朝から良いもんを見せてもらったしな！！」

さつきからスカっとするなあ

悔しいけど

豪快な笑いが不思議と心地いいくらいだ

なんていうか、凄く可愛いのに

凄くかっこいい

「…って！！遅刻しちゃう！！」

ただでさえギリギリなのにまさかの2連戦をしてしまった！！

だけれど

時すでに遅し

「あゝあ、チャイムが鳴っちまったなあゝ」

女子はめんどくさそうに頭を掻きながら学校のほうへ足を向けた

「え…？アンタたち…もしかして…同じ学校なの？おかしいでしょ？」

「OH！廊下に立たサレテ！バケツモタサレルヨー！！」

「いないわよ！今時！！」

「カツカツカ！！そんなことより走るぞ〜！！遅刻を体験するのもわるかあねえなあ！！」

「えっ　　ちよ！引つ張らないでって　　！！」

私は女子に手を引つ張られて起き上がりそのまま駆け出した
もうなにがなんだか！

こうして、私は　私が初めて完敗した相手　謎
の少女と謎の黒人男性のことを知るのであった

今とは一体いつのことなのか？切り取れない風景画

学校に遅刻した

しかも悪目立ちしてしまった

私はそんな事望んでないのに

事の顛末

「カツカツカ！！すまねえ先生！！この子が悪い輩に絡まれてるのを目撃して、世紀末救世主である俺は見過ごす事が出来ずに助けに来たぜえ！！」

大きな音を立ててドアを開けた第一声がそれだ

すでに授業が始まっていた教室は呆然とした様子で私たちを見ていた

「…ちよ！！アンタ達！もう少し静かに…！！」

私は必死になるも更なる追撃をかける

「OH！！ボスの勇姿はグレイトフルダッタヨ！！今ナラ殺意の波動二目覚メタ格闘家にモ勝てるクライダヨ！！」

なおも呆然としているクラス

先生もこんな事態に巡り会う事はそうそう人生の中で経験していないのである

同じように停止したままだ

今まで私が体験していた常識とはなんだっただらう

「あ…ああ…流川と田中だな…事情は分かったから、自分のクラスに戻りなさい…」

「先生イ！！感謝するぜえ！！自分たちのクラスにも言い訳をしに行かなきゃならねえ！！詳しい話はまたあとでする！！」

そう言うと、勢いよくドアを閉め廊下を走り出す音が聞こえた
そこでやっと我に返ったのか後を追う形で廊下に飛び出し

「ろ、廊下は走るんじゃないぞー！！」

…そこ！？

この状況でいう精一杯の先生らしい言動だったのだろう

遠くでわりいわりいの声と共に笑い声が聞こえてきた

とんでもない人たちだ

「…それで、いつまでそこにいるんだね？」

先生は私に厳しい視線を投げかける

それに触発されてか

謎の少女A（私の中で勝手に決定）の存在感に目を奪われていた生徒の目が一斉に私に向けられていた

「さっきの事…本当なのかね？」

先生は視線が集中してしどろもどろになる私に立て続けに質問する

これは困った

普段からあまり目立たないようにしてきたのだけれど
こればかりは状況を回避出来ない

「あ…いや…なんといいですか…大体はそんな感じ…かなあ…
みたいなの？」

我ながら、とても言い繕うのがヘタだ。

「ふむ…理由が理由だ。仕方が無い。席に着きなさい。…それと地域の治安の問題もある…詳しい状況報告も兼ねて後で職員室まで来なさい」

くうう…まさかの呼び出しとは

私は誤摩化しの笑いをしながらコソコソと席に着く

でも

謎の少女Aのお陰(?)で怒られたりはしないようだ

流川…?田中…?

あの二人の名前だろうか

普通に学校に馴染んでいるのが恐ろしい
かたや、ムキムキマッチョのスキンヘッド黒人
かたや、ゆるゆる私服の少女

…おかしいですよ！！カテジナさん！！

…じゃなかった

でもおかしいのは本当だ

あんなに目立つ二人組に今の今まで気がつかなかった自分も自分だ
けどね

何かとんでもないことになっちゃったな

あとであの二人とまた話し合わないと…

授業終了

私はクラスの人にあつという間に囲まれた…

「ねえねえ！？あの二人と学校に来るなんて…どういうこと！？」

「流川さんって可愛いよね。田中くんもスポーツ出来るし優しい
しすっごく素敵！！」

「あの二人って本当に謎が多くて…ミステリアスっていうかさ！ど
んな会話したの？」

わんやわんや

次から次に質問やら、可愛いだかつこいいだのきわどいのだと、罵って欲しいとか抱き枕になってほしいだとか

…変態か！！

でも、おかげさまで二人の情報がだいぶ手に入った

どうやら二人は高校ではかなりの有名人らしい

私が知らないと言ったら、周りに驚かれた…そんなに？

しかも、凄く人気者らしい

上級生はもちろん、噂は他校にまで及んでいるとか

あんまり流行とかに敏感なほうじゃないとは思ってたけど…

他に情報と言えば

二人の過去とか同じ中学校だった人はいない

高校に入ってからしか知らない人ばかりだった

むしろ田中と呼ばれる黒人にいたっては年齢が明らかに…

中学生とかじゃなくて軍隊あがりなんじゃないかと思うくらいに屈強だ

調べれば調べるほどに謎な二人だ

人望は厚いらしいけど

みんな遠巻きに眺める感じになってしまっているらしい

どうも住む世界が違う感じで

羨望のほうが強いらしい

そんな二人と一緒に遅刻の大立ち回りは話題の餌食になってしまつのも無理ないだろう

何より

あの強さ

こればかりは身を以て痛いほどに理解している

同世代に敵はいないと思っていた

そんな私があっさり負けちゃったんだもん

二人にしっかりと口止めをしておかなければならない気持ちよりも
純粹に二人に対して興味が湧いてきた

基本的に自分が自立たなくなる為に他人と同調しようとはするけど
個人に対して強く関心を抱く事があまりないのだ

そんな私が珍しく興味をもった対象だ

放課後に会いに行こう…

まずは先生に説明しに行かないと…

以下、放課後

先生への説明はすんなりと通った

ここでは私が不良に絡まれて、偶然に通りかかった二人が助けてく
れた

…ってことになってる

ん〜、大体あつてる？

不良をボッコボコにしたのは私だし

さらに二人までもボッコボコにしようとしたこと以外はね…

先生が警察やら町の地域課やらに電話をしている

私としては早めの切り上げになってくれて嬉しい

本題はここから

穏やかで平凡な暮らしをこれからも過ごす為にあの二人にしっかりと口止めをしておかなければならない

まだ学校にいるかな？

私は二人のクラスに足を運ぶ

以下、放課後の教室

「サアルウ〜〜〜！！なんで今日は休みなんだああ！！！」

「OH！！ボス！！モンキーボーイがハイスクールに来ないナンテ異常ダヨ！！トラックに飛び出サナイタツロークライあり得ないヨ！！！」

叫んでいた

101回目のプロポーズなんて今の世代じゃ分かりづらいモノがあると思うんだ

窓を開けて校庭に向けて叫んでいる

校庭で部活動をしている人たちは何事かとこちらを見上げている

本当に対極的

私は人の注目を集めるのがとても苦手だ

しかし、この人たちはどうだろう

そもそも自分たちが注目を集めていることに気がついているんだろ
うか？

期待や畏怖、羨望、嫉妬

様々な感情が周りを取り巻く

それに耐えられるだけの強さ…

つと、こんなこと考えてる場合じゃなかった！！

「アンタたち！そんなとこにいないで私の話を聞きなさいよ！」

私が教室に入ってきてもおかまい無しな二人

「…サル！？サルなのか！？」

私の声に反応し、こちらを振り向き近づいてきた

さつきからサルってなんなのよ？

私を見てサルって失礼じゃない？

「…なんだ、今朝の格闘娘か…サルじゃねえのかよお」

彼女はがっくり肩を落としあまり見せない寂しそうな顔をしていた

「さつきから意味分からないよ…。サルってなに？いきなり失礼だと思わないの？」

「ファイティングガール…ボスはショックなコトがアッタヨ…タイムシヨックダヨ」

「タイムシヨックではないと思うけど…」

しかし、落ち込んでいる様子を見ると少し拍子抜けだ

この人たちでもこんな表情をするときがあるんだ…

私の中では常にあっけらかんとしていて人をおちよくるのが好きな人たちかと思っていた

「…それで、そのサルってのはなんなの？私に分かるように説明して欲しいんだけど」

「だが、断るう！」

「断るのかよっ！！」

いけないいけない、こんなツッコミを私にさせるなんて…

「カッカッカ！！言ってみたかったただけだ！！なんてこたあない！
！普段なら絶対に休む事がなさそうなランキングNO・1のサルが
学校を休んだ…これはちよっとした事件だぜえ？」

前言撤回！！そんなに落ちこんでない！？

「だから、そのサルって単語について説明しな」

ドゴン！！！！

私がいかけると同時に 教室の後方の掃除用具入れから音がした
結構な音だよ？

普通に考えて、放課後の教室の掃除用具入れからこんな音がするわ
けがない

「ふむ

」

私の驚きを前に、二人はいたって冷静なのか物怖じせずを考え込んでいた

「OH…ボス、コレはツマリ

」

「おう。これは…もしかしなくてもあれだな

」

「だから！私を抜きにして勝手に話を進めないでよ！」

納得するような顔で二人は確認し合ったあとに続けざまに言う

「 よおおおし！！イチい！！サルの家に行くぞ！！」

「イエッサー！！ボス！！」

…

…

…！？

「…そこ！？明らかなスルーだよね！？なにそのスルースキル！？いま掃除用具入れから音がしたよね！？」

「かつかつか！ぬかしおる」

「ぬかしてないよ！？なにその喋り方？」

「そうでござる！！せつかくの新展開の予感をスルーするなんて、とんでもないフラグブレイカーでござる！！」

「そうよ！！何かイベントが発生しそうじゃない！！さっきからめちやくちやよ！」

…あれ？

「カツカツカ！そんなことはどうでもいい！！格闘娘！！サルに会いに行くぞ！！」

「まかせるでござる！！誰かは存せぬが、拙者がサル氏のもとに案内するでござるよ！！」

「ソイツはいい！！道案内頼むぜ！！誰か知らねーけど！！」

「うむ！！それではこの転送機の説明を

「

…？？？？

ボスは私の肩に手を回してそう言う
何かがおかしい

「OH!!ボス!!急展開ネ!!コレはチヨー展開とも言ウネ!!
読者が取り残サレル展開ダヨ!!」

「おっと、そのムキムキ殿は重量制限に引っかかりそうでござる
よ」

「オーマイガツ!!」

「残念だったなあイチい!!今日はお留守番だ!!ちょっと格闘娘
と二人で行ってくる!!」

「え?ちよつ…私も行くの?っていつか…」

なんだか展開が目まぐるしい
ここらへんでツツコみたい

「なんでござるか!!何か問題点でもあったでござるか?急がねば
サル氏が」

そう、ここね

これは言わせてもらっしか無い
読者のにも

私の心情的にも

お前は誰だよ!!

「もう一度言っわ…お前は誰だよ!!」

「むむ…?」

頭にバケツを乗つけた女は腕を組み、考え込む

「意味分かんないんだけど?なに?あたかもずっといたかのように自然に会話に混じってるけど、誰よ!!」

至極、まっとうなことを言っている

おかしいのは私の目の前の現実だ

ややこしい2人に加わりさらにややこしい人物が紛れ込んでいる

「はっ!!!そうであつた!!」

バケツ女(仮)は一人で何かを納得して発言する

「…何者でござるか!?!」

「だから、それはお前だ!!明らかに不審者でしょ?自分の方が怪しいって事に気がつきなさいよ!」

「はっはっは!ぬかしおるでござる!!」

「ぬかしおるのはお前だ!」

いっこうに会話が進まないのはこの物語の仕様なのだろうか?

「とにかく、サル殿の大体の位置は特定出来ているでござる。あとはこれを使えばサル氏に会いに行けるでござる」

そういつて片手におまるを持つているバケツ女
うさん臭すぎるし

そもそもサルって何？

何一つ私に情報が回ってこないし

この不親切な仕様はなんだろう

読者が分かってるからそれでいいっていうわけ？

オールドタイプに訓練もなしにガンダムをいきなり操作しろってい
うくらいの無茶苦茶よ

アムロとはちがうのだよアムロとは！！

「その戸惑いは若さ故でござるか」

「私の心を読まないでっ！！」

それこそニュータイプかつ！！

「かつかつか！！いいんだよお格闘娘！！それより俺に用があんだ
るお？どうせだあ！付いてこい！」

「ちよっ、さつきから凄く自分勝手」

「おお…！！分かってくれるでござるか！！」

「おうよ！バケツ娘！詳しく話を教えろ！」

「うむ、実は今朝にかくかくしかじかで」

でたっ、かくかくしかじか！！

ちなみに漢字で書くと『斯々然々』なんだって

「なるほど、かくかくしかじかでサルはかくかくしかじかでどこかへかくかくしかじかだったのか…」

かくかくしかじか多いよ!!

もはや何なのか分からないよ!

ゲシユタルト崩壊を起こしそうだ

「oh: カクカクシカジカでネギダクニクナシ! ナノデスネー」

牛井の専門用語になっちゃったよ!!

それは牛井じゃなくてネギ井になっちゃうし!!

その場合は『ネギだけ』でOKだよ!!

つて、ツッコミにトリビアを入れてる場合じゃない…!!

「つまり: アンタ達は『サル』って人物と全員知り合いで、そのサルっていうのが今朝にそのバケツ女のせいで行方不明になった: バケツ女は助力を求めて探しまわってた所で、えっと: 流川さん: の大声を聞いて掃除用具入れに飛んできた: 今から捜索しに行くつてことですよ?」

かくかくしかじかなんて使わなくても短い文章で伝わるじゃない:

「おお! 見事な要約でござる!! 確かに、拙者が至らぬばかりにサル氏がこのような事態に: 一人ではとてもたどり着けない: 途方に暮れていた所での神の導きでござるよ」

「カツカツカ!! こつちもサルがいなくて退屈していた所だった! サル探しの冒険なんて胸が躍るじゃねえかあ!!」

なんとという余裕
というか私の本題はすでに忘れ去られていた

「それで、そのお子様用のおまるにしか見えないモノがワープ装置でサルって人はそれに吸い込まれたってわけね？」

「うむ、いかにも！」

「…ふう」

私はため息に続いてこの言葉を言わせてもらう

信じられるかっ！！

なにその得意満面のドヤ顔は！？

おまるを片手にそんな表情する人は見た事無いよ！？

こうさ、流れに負けて今まで聞いてきたけど

荒唐無稽もいとこだ

現実的に考えよう

魔法とか

超能力とか

ありえないでしょ？

確かに私も人の事言えるような人間ではないと思うけど…

レベルが違いすぎる

UFOにさらわれたので遅刻しましたと言いついて誰が信じてくれ

るだろうか

そのぐらいに突拍子の無い事だ

バケツ女はうなだれて発言する

「むう…この世界の常識はよく分からないでござるよ…拙者は…私はサル氏を守ると誓った…この世界ではいくぶん世間知らずなのだ…ただ、助けたいだけなのだ…」

シユンとしてしまうバケツ女

少しだけ泣きそうだ

いつまでバケツを頭に乗せているつもりだろう

「な、なによ！何か私が悪いみたいになっちゃうじゃない…！」

ああ、悪い事言ってる訳じゃないのに

凄く罪悪感を感じてしまった…！！

少し気まずい雰囲気流れる

ああ、こんな事が言いたい訳じゃないのに…！！

「カツカツカ！格闘娘え！！」

少しの間のあとにボスが雰囲気を打破する

「青いつ！青いねえ！！この言い争いが…オレの望んでた青春の1ページだぜえ！！」

続けて、田中くん（…と呼ぶにはまだ抵抗があるけど）が流れに乗って話しだす

「A H A H A H A ! ! ボス ! ! コレが日本ノ青春ネ ! ! コノ後に河原でボクシングのアトに夕陽に向カツテ走り出スマデが1セットダヨ ! ! 」

「おお ! ! それだイチ ! ! よし ! 殴り合うぞ ! 」

二人はファイティングポーズを構えて今にも飛びかからん勢いだ

「ちよ、ちよっと ! アンタたちなにやってんのよ ! いないわよ ! 今時そんなヤツ ! ! 」

いつの時代だ !
いや

いつの時代でもないよ ! そんな人 ! !
何の影響を受けたらそんな発想になるんだ ! !

…自然とその場から笑いがこぼれた

「…なんか、バカみたい」

そう

バカみたいだ

「カツカツカ ! こまけえこたあいいんだ。格闘娘え、ちつとジヨ―シキってのに囚われすぎだ」

「コノ幻想郷デハ、ジョーシキに囚ワレテハイケナイノデスネ！」

「否定すんのは簡単だけだよ…別に切らなくてイイモンまで否定しちまったら味気ない世界になっちまうぜ？魔法？超能力？いいじやねえか！歩いて、見て、聞いて、触れて。否定はそっからでも出来るってモンだけ？何もしらねえ赤ん坊のときから体験してきたることじゃねえか。ジョーシキは悪いもんじゃねえけど、そこにはっか縛られてたらいつまでも大事なモンに気がつけないまんまだ」

ボス…

「アンタたちに今日のことを口止めに来たつもりだったのに…。気がついたら、変な方向に話が進んでさ…」

違う…

「それで…助けに行くんでしょ？その…サルつてのを。私も行くわ…ってか、行かなきゃダメなんでしょ？」

まさか、こんな展開になるとは思わなかった

今日は想定外のことだらけだ

こうなることは、私が物語を語っている時点で想像がつくことだ
運命は私を逃してはくれないらしい

「本上ていは…」

「…？」

おっと、何か物語の中で聞き慣れない名称が聞こえたぞ？

「本上ていは…1-C組出席番号18番。男子の間では人気が高く成績優秀、スポーツ万能。高嶺の花的ポジションに収まっている。それが本人が目立っていないという勘違いに繋がる…身長161cm 体重は おぷっ！」

私はとつさにバケツ女の口を塞いだ

「わ、私の個人情報をも、漏らすなっ！！」

いきなり何を口走っているんだ！！

脈絡がなさすぎて口を封じるのが遅れてしまったくらいだ
その前になんて知ってるんだ！？

バケツ女は辞書のような分厚い本を片手に何かを調べていた

「アンタ…それ何持ってんの…？」

「うむ、この本は実に便利だな。拙者の秘密道具の一つでござるよ。」

「はい？」

「フフフ…驚いておられるな…これにはありとあらゆる情報が網羅
されているでござる…！」

な、なんだってー！！
…って思っつわけないじゃない
いや、凄いんだけどさ

「フフフ…驚いておられるな…」

え！？二度言うの！？

どうやら反応をあまりしなかったのがいけないらしい
かまってちゃん！？

「これにはありとあらゆる情報が網羅されているぞ」

「それはもう分かったから！！」

「…こうじ君の」

「はい？なにいつてんのアンタ？」

なんなの…この人たちの会話…

カオスって呼ばれるヤツだよカオス

「うむ、説明しよう！！世界中のありとあらゆるこうじ君の情報が
ここに載っている！！」

そして続けざまにポケットを探るような仕草をしてから
聞いた事あるようなガラガラ声で喋りだす

「ちやらちやつちやつちやちやくん！！ KOJI苑（コージイ
ズディクシヨナリー）」

「ただの語呂あわせかよ！！し・か・も！！そのルビおか
しいよね！？それだとあたかもこうじ君が辞書みたいになっちゃ
うじゃない！！」

無茶苦茶だ！
というより適当だ！

「ハツハツハ！まあ、こうじ君が見聞きした情報なんか含まれているからそれなりに便利なのでござるよ！こうじ君は、本上殿について随分とお詳しいようござるな」

知らんがな！！

こうじ君ってどのこうじ君なのかさっぱり見当もつかないむしろ、あんまり人の名前とか覚えないうつていつか…

しかも、顔もあまり覚えていない。

「OH！MR・コージカワイソウネ…」

「あゝ！もう！話がいつこうに進まないじゃない！！仕切り直しよ！！仕切り直し！！」

仕切り直し

私は目の前でバケツ女

もとい、狭間さんが呪文を唱えているのを目の当たりにしていた

いやいや

呪文って言葉を日常会話で使うとは思わなかったよ

しかし

私がイメージする呪文とは少し違う

よく分からない魔法陣とか

煙とか光が出てくるとか

私はそんな演出があるのが呪文だと思っていた

現実では

目の前のおまるに向かってブツブツと喋っている女子がそこにはいた

…アハハ

嘘みたいだろ？

これ

呪文唱えてるんだぜ…？

無理矢理に納得しそうな雰囲気だったけど
完全なる変質者だ

目の前の非現実的光景を
現実的に見ている私にとってこれ以上ない変質者だ

隣で、田中さんとボスがニヤニヤと笑いながら教室の椅子に腰掛け
ている

あの二人はなんであんなに余裕でいられるのか

不思議でしようがない

そうこうしてるうちにバケツ女もとい狭間さんの準備が終わったよ
うだ

準備が終わったっていうのも不思議な感じだけど
だって、おまるに向かってぶつぶつ言うのを辞めただけだからね？
凄く絵的には変な構図だけど

「ふう…これで準備は完了でござるよ!!」

一仕事を終えた顔をして、満面の笑みでこちらに向かう

私にはとてもじゃないが一仕事とかそういう事をし終えたようには
見えなかった

現実はとても厳しい

やはりファンタジーはファンタジーなのだと思いき知らされる
現実

おまる語りかけることが魔法と呼ばれる事実…

やっぱりファンタジーはファンタジーのままの方がいいかな…？

そんな事を考えていたらボスが立ち上がりおもむろに発言する

「カツカツカ!!クアア!!それじゃあ行くとするかあ!!」

背伸びをしながら気合いを入れ直すように言う

「おいしい!!格闘娘え!!オレと一緒に来い!!」

「…分かってる。本当に無関係だけど…私は…少し…ほんの少しだけ…」

変わるような気がする

なんていうか

なんていうか

…よく分かんないや。

「行こう。サルってよく分かんないけど、探しに行こう?」

私は覚悟を決めた

ボスは笑顔で応える

「ああ、サルは俺の大事なモンだからな…アイツがいねえとおもしろくねえよ」

好きな人なのかな?

分かるのは

サルって人が凄く大事だったことだ

「あとはここに『ヒデ』というボタンを押せば近くまでたどり着けるでござるよ」

ヒデ!?

なにヒデ!?

聞き間違いじゃなくって?

「了承したぜえ？」

ボスは言い終わるか言い終わらないかのうちに『ヒデ』のボタンを
押した

「ちよつ

！！ちよつとはためらえよ

！！」

今までの長いフリはなんだったのかという勢いでボタンを押す

「ボス〜！！ワタシをツレテイッテ〜ホシイヨ〜！！ワタシをスキ
ーにツレテッテ〜！！」

「つむじ風でも追っかけてなさいよ

よ？」

そんな古いネタにツッコミを入れる女子高生も女子高生だけど…

と

私の身体から重力が消えて行く

それと同時に何か強い力に引っ張られるような感覚

体験した事がない未知の体験

目の前が反転する

こんなに気持ち悪いのかぁ。

遊園地のジェットコースターでもこんなにはならないよ

ぐるぐるぐるぐる

私は途中で意識を失った

こんにちは

僕です

いや

誰だよってツッコミはよくよく分かっているんだけどさ

そこは話の流れから察してもらいたいね

僕は今

知らない外国人に囲まれて64をしています

64？

64って言ったら

あの有名なヒゲ配管工のロクヨン以外に何があるんですか？

いやはや、国際社会でもゲームってのはコミュニケーションとして
成立するんだね

というわけで

スマッシュなブラザーズをやってるんだけど…

「オイ！！テメーのドンキウゼエゾ！ゴルアアア！！」

「ンダト！？イヤラシイカービー使ってるテメエに言ワレル筋合イねえぞコラア！！？」

問題はこの外国人たちが異様に怖いということですよ

良い大人たちが数十人でロクヨンで熱くなってます

…

さすがの僕でもこんな状況は想定外ですよ

さてはて

僕の出番はいつになるのか

この状況はなんなのか

どうなるんだよ！！

ってかどうすりゃいいんだよ！！

学校に遅刻した

しかも悪目立ちしてしまった

私はそんな事望んでないのに

事の顛末

「カッカカッカ！！すまねえ先生！！この子が悪い輩に絡まれてるのを目撃して、世紀末救世主である俺は見過ごす事が出来ずに助けてきたぜえ！！」

大きな音を立ててドアを開けた第一声がそれだ

すでに授業が始まっていた教室は呆然とした様子で私たちを見ていた

「…ちょー！！アンタ達！もう少し静かに…！！」

私は必死になるも更なる追撃をかける

「OH！！ボスの勇姿はグレイトフルダッタヨ！！今ナラ殺意の波動二目覚メタ格闘家に毛勝てるクライダヨ！！」

なおも呆然としているクラス

先生もこんな事態に巡り会う事はそうそう人生の中で経験していないのであろう

同じように停止したままだ

今まで私が体験していた常識とはなんだったんだろう

「あ…ああ…流川と田中だな…事情は分かったから、自分のクラスに戻りなさい…」

「先生イ！！感謝するぜえ！！自分たちのクラスにも言い訳をしに行かなきゃならねえ！！詳しい話はまたあとでする！！」

そう言うと、勢いよくドアを閉め廊下を走り出す音が聞こえた
そこでやっと我に返ったのか後を追う形で廊下に飛び出し

「ろ、廊下は走るんじゃないぞ〜！！」

…そこ！？

この状況でいう精一杯の先生らしい言動だったのだろう

遠くでわりいわりいの声と共に笑い声が聞こえてきた

とんでもない人たちだ

「…それで、いつまでそこにいるんだね？」

先生は私に厳しい視線を投げかける

それに触発されてか

謎の少女A（私の中で勝手に決定）の存在感に目を奪われていた生徒の目が一斉に私に向けられていた

「さっきの事…本当なのかね？」

先生は視線が集中してしどろもどろになる私に立て続けに質問する

これは困った

普段からあまり目立たないようにしてきたのだけれど
こればかりは状況を回避出来ない

「あゝ…いや…なんといいですか…大体はそんな感じ…かなあゝ…
みたいなの？」

我ながら、とても言い繕うのがヘタだ。

「ふむ…理由が理由だ。仕方が無い。席に着きなさい。…それと地域の治安の問題もある…詳しい状況報告も兼ねて後で職員室まで来なさい」

くうう…まさかの呼び出しとは

私は誤摩化しの笑いをしながらコソコソと席に着く

でも

謎の少女Aのお陰(?)で怒られたりはしないようだ

流川…?田中…?

あの二人の名前だろうか

普通に学校に馴染んでるのが恐ろしい
かたや、ムキムキマッチョのスキンヘッド黒人
かたや、ゆるゆる私服の少女

…おかしいですよ！！カテジナさん！！

…じゃなかった

でもおかしいのは本当だ

あんなに目立つ二人組に今の今まで気がつかなかった自分も自分だけだね

何かとんでもないことになっちゃったな

あとであるの二人とまた話し合わない…

授業終了

私はクラスの人にあつという間に囲まれた…

「ねえねえ！？あの二人と学校に来るなんて…どういうこと！？」

「流川さんって可愛いよね。田中くんもスポーツ出来るし優しいしすっごく素敵！！」

「あの二人って本当に謎が多くて…ミステリアスっていうかさ！どんな会話したの？」

わんやわんや

次から次に質問やら、可愛いだかつこいいだの

きわどいのだと、罵って欲しいとか抱き枕になってほしいだとか

…変態か！！

でも、おかげさまで二人の情報がだいぶ手に入った
どうやら二人は高校ではかなりの有名人らしい
私が見えないと言ったら、周りに驚かれた…そんなに？
しかも、凄く人気者らしい
上級生はもちろん、噂は他校にまで及んでいるとか
あんまり流行とかに敏感なほうじゃないとは思ってたけど…

他に情報と言えば

二人の過去とか同じ中学校だった人はいない
高校に入ってからしか知らない人ばかりだった
むしろ田中と呼ばれる黒人にいたっては年齢が明らかに…
中学生とかじゃなくて軍隊あがりなんじゃないかと思うくらいに屈
強だ

調べれば調べるほどに謎な二人だ

人望は厚いらしいけど
みんな遠巻きに眺める感じになってしまっているらしい
どうも住む世界が違う感じで
羨望のほうが強いらしい

そんな二人と一緒に遅刻の大立ち回りは話題の餌食になってしまう
のも無理ないだろう

何より

あの強さ

こればかりは身を以て痛いほどに理解している

同世代に敵はいないと思っていた

そんな私があっさり負けちゃったんだもん

二人にすっかりと口止めをしておかなければならない気持ちよりも
純粹に二人に対して興味が湧いてきた

基本的に自分が自立たなくなる為に他人と同調しようとはするけど
個人に対して強く関心を抱く事があまりないのだ

そんな私が珍しく興味をもった対象だ

放課後に会いに行こう…

まずは先生に説明しに行かないと…

以下、放課後

先生への説明はすんなりと通った

ここでは私が不良に絡まれて、偶然に通りかかった二人が助けられて

…ってことになってる

ん〜、大体あってる？

不良をボッコボコにしたのは私だし

さらに二人までもボッコボコにしようとしたこと以外はね…

先生が警察やら町の地域課やらに電話をしている

私としては早めの切り上げになってくれて嬉しい

本題はここから

穏やかで平凡な暮らしをこれからも過ごす為にあの二人にしっかりと口止めをしておかなければならない

まだ学校にいるかな？

私は二人のクラスに足を運ぶ

以下、放課後の教室

「サアルウ~~~~!!なんで今日は休みなんだああ!!」

「OH!!ボス!!モンキーボーイがハイスクールに来ないナンテ異常ダヨ!!トラックに飛び出サナイタツロークライあり得ないヨ!!!」

叫んでいた

101回目のプロポーズなんて今の世代じゃ分かりづらいモノがあると思うんだ

窓を開けて校庭に向けて叫んでいる

校庭で部活動をしている人たちは何事かとこちらを見上げている

本当に対極的

私は人の注目を集めるのがとても苦手だ

しかし、この人たちはどうだろう

そもそも自分たちが注目を集めていることに気がついているんだら
うか？

期待や畏怖、羨望、嫉妬

様々な感情が周りを取り巻く
それに耐えられるだけの強さ…

っと、こんなことを考えてる場合じゃなかった！！

「アンタたち！そんなとこにいないで私の話を聞きなさいよ！」

私が教室に入ってきてもおかまい無しな二人

「…サル！？サルなのか！？」

私の声に反応し、こちらを振り向き近づいてきた
さつきからサルってなんなのよ？
私を見てサルって失礼じゃない？

「…なんだ、今朝の格闘娘か…サルじゃねえのかよお」

彼女はがっくり肩を落としあまり見せない寂しそうな顔をしていた

「さつきから意味分からないよ…。サルってなに？いきなり失礼だ
と思わないの？」

「ファイティングガール…ボスはショックなコトがアッタヨ…タイ

ムシヨックダヨ」

「タイムシヨックではないと思うけど…」

しかし、落ち込んでいる様子を見ると少し拍子抜けだ

この人たちでもこんな表情をするときがあるんだ…

私の中では常にあっけらかんとしていて人をおちよくるのが好きな人たちかと思っていた

「…それで、そのサルってのはなんなの？私に分かるように説明して欲しいんだけど」

「だが、断るう！」

「断るのかよっ！！」

いけないいけない、こんなツッコミを私にさせるなんて…

「カツカツカ！！言ってみただけだ！！なんてこたあない！
！普段なら絶対に休む事がなさそうなランキングNO・1のサルが
学校を休んだ…これはちよっとした事件だぜえ？」

前言撤回！！そんなに落ちこんでない！？

「だから、そのサルって単語について説明しな」

ドゴン！！！！！！

私が言いかけると同時に 教室の後方の掃除用具入れから音がした

結構な音だよ？

普通に考えて、放課後の教室の掃除用具入れからこんな音がするわけがない

「ふむ

」

私の驚きを前に、二人はいたって冷静なのか物怖じせずに考え込んでいた

「OH…ボス、コレはツマリ

」

「おう。これは…もしかしくなくてもあれだな

」

「だから！私を抜きにして勝手に話を進めないでよ！」

納得するような顔で二人は確認し合ったあとに続けざまに言う

「よおおおし！！イチい！！サルの家に行くぞ！！」

「イエッサー！！ボス！！」

…

…

…！？

「…そこ！？明らかなスルーだよね！？なにそのスルースキル！？

いま掃除用具入れから音がしたよね!？」

「かつつか!ぬかしおる」

「ぬかしてないよ!?なにその喋り方?」

「そうでござる!!せつかくの新展開の予感をスルーするなんて、
とんでもないフラグブレイカーでござる!!」

「そうよ!!何かイベントが発生しそうじゃない!!さつきからめ
ちやくちやよ!」

…あれ?

「カツカッカ!そんなことはどうでもいい!!格闘娘!!サルに会
いに行くぞ!!」

「まかせるでござる!!誰かは存ぜぬが、拙者がサル氏のもとに案
内するでござるよ!!」

「ソイツはいい!!道案内頼むぜ!!誰か知らねーけど!!」

「うむ!!それではこの転送機の説明を

…?????

ボスは私の肩に手を回してそう言う
何かがおかしい

「OH!!ボス!!急展開ネ!!コレはチヨ―展開とも言ウネ!!
読者が取り残サレル展開ダヨ!!」

「おっと、そのムキムキ殿は重量制限に引っかかりそうじゃないよ」

「オーマイガツ!!」

「残念だったなあイチイ!! 今日はお留守番だ!! ちょっと格闘娘と二人で行ってくる!!」

「え? ちよつ…私も行くの? っていつか…」

なんだか展開が目まぐるしい
ここらへんでツッコみたい

「なんでござるか!! 何か問題点でもあったでござるか? 急がねばサル氏が」

そう、ここね

これは言わせてもらっしか無い
読者のにも
私の心情的にも

お前は誰だよ!!

「もう一度言っわ…お前は誰だよ!!」

「むむ…?」

頭にバケツを乗つけた女は腕を組み、考え込む

「意味分かんないんだけど？なに？あたかもずっといたかのように自然に会話に混じってるけど、誰よ！」

至極、まっとうなことを言っている

おかしいのは私の目の前の現実だ

ややこしい2人に加わりさらにややこしい人物が紛れ込んでいる

「はっ！！そうであった！！」

バケツ女（仮）は一人で何かを納得して発言する

「…何者でござるか！？」

「だから、それはお前だ！！明らかに不審者でしょ？自分の方が怪しいって事に気がつきなさいよ！」

「はっはっは！ぬかしおるでござる…！」

「ぬかしおるのはお前だ！」

いっこうに会話が進まないのはこの物語の仕様なのだろうか？

「とにかく、サル殿の大体の位置は特定出来ているでござる。あとはこれを使えばサル氏に会いに行けるでござる」

そういつて片手におまるを持っているバケツ女

うさん臭すぎるし

そもそもサルって何？

何一つ私に情報が回ってこないし

この不親切な仕様はなんだろう

読者が分かっているからそれでいいっていうわけ？

オールドタイプに訓練もなしにガンダムをいきなり操作しろっていうくらいは無茶苦茶よ

アムロとはちがうのだよアムロとは！！

「その戸惑いは若さ故でござるか」

「私の心を読まないでっ！！」

それこそニュータイプかつ！！

「かつかつか！！いいんだよお格闘娘！！それより俺に用があんだろお？どうせだあ！付いてこい！」

「ちよっ、さつきから凄く自分勝手」

「おお…！！分かってくれるでござるか！！」

「おうよ！バケツ娘！詳しく話を教える！」

「うむ、実は今朝にかくかくしかじかで」

でたっ、かくかくしかじか！！

ちなみに漢字で書くと『斯々然々』なんだって

「なるほど、かくかくしかじかでサルはかくかくしかじかでどこかへかくかくしかじかだったのか…」

かくかくしかじか多いよ！！

もはや何なのか分からないよ！
ゲシユタルト崩壊を起こしそうだ

「oh…カクカクシカジカでネギダクニクナシ！ナノデスネー」

牛丼の専門用語になっちゃったよー！！

それは牛丼じゃなくてネギ丼になっちゃうし！！

その場合は『ネギだけ』でOKだよー！！

つて、ツツコミにトリビアを入れてる場合じゃない…！！

「つまり…アンタ達は『サル』って人物と全員知り合いで、そのサルっていうのが今朝にそのバケツ女のせいで行方不明になった…バケツ女は助力を求めて探しまわってた所で、えっと…流川さん…の大声を聞いて掃除用具入れに飛んできた…今から搜索しに行くってことでしょ？」

かくかくしかじかなんて使わなくても短い文章で伝わるじゃない…

「おお！見事な要約でござる！！確かに、拙者が至らぬばかりにサル氏がこのような事態に…一人ではとてまたどり着けない…途方に暮れていた所での神の導きでござるよ」

「カツカツカ！！こつちもサルがいなくて退屈していた所だった！サル探しの冒険なんて胸が躍るじゃねえかあ！！」

なんとという余裕

というか私の本題はすでに忘れ去られていた

「それで、そのお子様用のおまるにしか見えないモノがワープ装置

でサルって人はそれに吸い込まれたってわけね？」

「うむ、いかにも！」

「…ふう」

私はため息に続いてこの言葉を言わせてもらう

信じられるかっ！！

なにその得意満面のドヤ顔は！？

おまるを片手にそんな表情する人は見た事無いよ！？

こっさ、流れに負けて今まで聞いてきたけど

荒唐無稽もいいとこだ

現実的に考えよう

魔法とか

超能力とか

ありえないでしょ？

確かに私も人の事言えるような人間ではないと思うけど…

レベルが違いすぎる

UFOにさらわれたので遅刻しましたと言いついて誰が信じてくれるだろうか

そのぐらいに突拍子の無い事だ

バケツ女はうなだれて発言する

「むう…この世界の常識はよく分からないでござるよ…拙者は…私はサル氏を守ると誓った…この世界ではいくぶん世間知らずなのだ…ただ、助けたいだけなのだ…」

シユンとしてしまうバケツ女

少しだけ泣きそうだ

いつまでバケツを頭に乘せているつもりだろう

「な、なによ！何か私が悪いみたいになっちゃっじゃない…！」

ああ、悪い事言ってる訳じゃないのに

凄く罪悪感を感じてしまった…！！

少し気まずい雰囲気の流れる

ああ、こんな事が言いたい訳じゃないのに…！！

「カッカッカ！！格闘娘え！！！」

少しの間のおとにボスが雰囲気を打破する

「青いつ！青いねえ！！この言い争いが…オレの望んでた青春の1ページだぜえ！！！」

続けて、田中くん（…と呼ぶにはまだ抵抗があるけど）が流れに乗って話しだす

「A H A H A H A！！ボス！！コレが日本ノ青春ネ！！コノ後に河原でボクシングのアトに夕陽に向カッテ走り出スマデが1セットダ

「ヨ！！」

「おお！！それだイチ！！よし！殴り合うぞ！」

二人はファイティングポーズを構えて今にも飛びかからん勢いだ

「ちょ、ちょっと！アンタたちなにやってんのよ！いないわよ！今時そんなヤツ！！」

いつの時代だ！

いや

いつの時代でもないよ！そんな人！！

何の影響を受けたらそんな発想になるんだ！！

…自然とその場から笑いがこぼれた

「…なんか、バカみたい」

そう

バカみたいだ

「カツカツカ！こまけえこたあいいんだ。格闘娘え、ちつとジョーシキってのに囚われすぎだ」

「コノ幻想郷デハ、ジョーシキに囚ワレテハイケナイノデスネ！！」

「否定すんのは簡単だけだよ…別に切らなくてイイモンまで否定しちまったら味気ない世界になっちまうぜ？魔法？超能力？いいじ

やねえか！歩いて、見て、聞いて、触れて。否定はそこからでも出来るってモンだぜ？何もしらねえ赤ん坊のときから体験してきていることじゃねえか。ジョーシキは悪いもんじゃねえけど、そこにはつか縛られてたらいつまでも大事なモンに気がつけないまんまだ」

ボス…

「アンタたちに今日のことを口止めに来たつもりだったのに…。気がついたら、変な方向に話が進んでさ…」

違う…

「それで…助けに行くんでしょ？その…サルつてのを。私も行くわ…ってか、行かなきゃダメなんでしょ？」

まさか、こんな展開になるとは思わなかった

今日は想定外のことだらけだ

こうなることは、私が物語を語っている時点で想像がつくことだ
運命は私を逃してはくれないらしい

「本上ていは…」

「…？」

おっと、何か物語の中で聞き慣れない名称が聞こえたぞ？

「本上ていは…1-C組出席番号18番。男子の間では人気が高く
成績優秀、スポーツ万能 高嶺の花的ポジションに収まっている。
それが本人が目立っていないという勘違いに繋がる… 身長161

cm 体重は おぶっ！」

私はとつさにバケツ女の口を塞いだ

「わ、私の個人情報をも、漏らすなっ!!」

いきなり何を口走っているんだ!!

脈絡がなさすぎて口を封じるのが遅れてしまったくらいだ
その前になんて知ってるんだ!?

バケツ女は辞書のような分厚い本を片手に何かを調べていた

「アンタ…それ何持ってるの…?」

「うむ、この本は実に便利だな。拙者の秘密道具の一つでござるよ。」

「はい?」

「フフフ…驚いておられるな…これにはありとあらゆる情報が網羅
されているでござる…!」

な、なんだってー!!

…って思うわけないじゃない
いや、凄いんだけどさ

「フフフ…驚いておられるな…」

え!?二度言うの!?

どうやら反応をあまりしなかったのがいけないらしい
かまってちゃん!?

「これにはありとあらゆる情報が網羅されているでござる…」

「それはもう分かったから!!」

「…こうじ君の」

「はい？なにいつてんのアンタ？」

なんなの…この人たちの会話…

カオスって呼ばれるヤツだよカオス

「うむ、説明しよう!!世界中のありとあらゆるこうじ君の情報がここに載っている!!」

そして続けざまにポケットを探るような仕草をしてから聞いた事あるようなガラガラ声で喋りだす

「ちゃらちゃつちゃつちゃちゃ〜ん!! KOJI苑（コージイズディクシヨナリー）」

「ただの語呂あわせかよ!!し・か・も!!そのルビおかしいよね!?それだとあたかもこうじ君が辞書みたいになっちゃうじゃない!!」

無茶苦茶だ!

というより適当だ!

「ハツハツハ!!まあ、こうじ君が見聞きした情報なんか含まれているからそれなりに便利なのでござるよ!こうじ君は、本上殿に

ついで随分とお詳しいようでごぞるな」

知らんがな!!

こうじ君ってどのこうじ君なのかさっぱり見当もつかない
むしろ、あんまり人の名前とか覚えないうつていうか…

しかも、顔もあまり覚えていない。

「OH!MR・コージカワイソウネ…」

「あゝ!もう!話がいっこうに進まないじゃない!!仕切り直しよ
!!仕切り直し!!」

仕切り直し

私は目の前でバケツ女

もとい、狭間さんが呪文を唱えているのを目の当たりにしていた

いやいや

呪文って言葉を日常会話で使うとは思わなかったよ

しかし

私がイメージする呪文とは少し違う

よく分からない魔法陣とか

煙とか光が出てくるとか

私はそんな演出があるのが呪文だと思っていた

現実では

目の前のおまるに向かってブツブツと喋っている女子がそこにはいた

…アハハ

嘘みたいだろ？

これ

呪文唱えてるんだぜ…？

無理矢理に納得しそうな雰囲気だったけど

完全なる変質者だ

目の前の非現実的光景を

現実的に見ている私にとってこれ以上ない変質者だ

隣で、田中さんとボスがニヤニヤと笑いながら教室の椅子に腰掛け
ている

あの二人はなんであんなに余裕でいられるのか

不思議でしようがない

そうこうしてるうちにバケツ女もとい狭間さんの準備が終わったよ
うだ

準備が終わったっていうのも不思議な感じだけど
だって、おまるに向かってぶつぶつ言うのを辞めただけだからね？
凄く絵的には変な構図だけど

「ふう…これで準備は完了でござるよ！！」

一仕事を終えた顔をして、満面の笑みでこちらに向かう

私にはとてもじゃないが一仕事とかそういう事をし終えたようには
見えなかった

現実はとても厳しい

やはりファンタジーはファンタジーなのだと思い知らされる

現実

おまる語りかけることが魔法と呼ばれる事実…

やっぱりファンタジーはファンタジーのままの方がいいかな…？

そんな事を考えていたらボスが立ち上がりおもむろに発言する

「カッカッカ！クアア〜！！それじゃあ行くとするかあ！！！」

背伸びをしながら気合いを入れ直すように言う

「おい！！格闘娘え！！オレと一緒に来い！！！」

「…分かってる。本当に無関係だけど…私は…少し…ほんの少しだ
け…」

変わるような気がする

なんていうか
なんていうか

…よく分かんないや。

「行こう。サルってよく分かんないけど、探しに行こう?」

私は覚悟を決めた

ボスは笑顔で応える

「ああ、サルは俺の大事なモンだからな…アイツがいねえとおもしろくねえよ」

好きな人なのかな?

分かるのは

サルって人が凄く大事だったことだ

「あとはここにある」『ヒデ』というボタンを押せば近くまでたどり着けるでござるよ」

ヒデ!?

なにヒデ!?

聞き間違いじゃなくって?

「了承したぜえ?」

ボスは言い終わるか言い終わらないかのうちに『ヒデ』のボタンを
押した

「ちよつ

！！ちよつとはためらえよ

！！」

今までの長いフリはなんだったのかという勢いでボタンを押す

「ボス〜！！ワタシをツレテイッテ〜ホシイヨ〜！！ワタシをスキ
ーにツレテッテ〜！！」

「つむじ風でも追っかけてなさいよ

よ？」

そんな古いネタにツッコミを入れる女子高生も女子高生だけど…

と

私の身体から重力が消えて行く

それと同時に何か強い力に引っ張られるような感覚

体験した事がない未知の体験

目の前が反転する

こんなに気持ち悪いのかぁ。

遊園地のジェットコースターでもこんなにはならないよ

ぐるぐるぐるぐる

私は途中で意識を失った

こんにちは

僕です

いや

誰だよってツッコミはよくよく分かっているんだけどさ

そこは話の流れから察してもらいたいね

僕は今

知らない外国人に囲まれて64をしています

64？

64って言ったら

あの有名なヒゲ配管工のロクヨン以外に何があるんですか？

いやはや、国際社会でもゲームってのはコミュニケーションとして
成立するんだね

というわけで

スマッシュなブラザーズをやってるんだけど…

「オイ！！テメーのドンキウゼエゾ！ゴルアアア！！」

「ンダト！？イヤラしいカービー使ってるテメエに言ワレル筋合イねえぞコラア！！？」

問題はこの外国人たちが異様に怖いということですよ

良い大人たちが数十人でロクヨンで熱くなってます

：

さすがの僕でもこんな状況は想定外ですよ

さてはて

僕の出番はいつになるのか

この状況はなんなのか

どうなるんだよ！！

ってかどうすりゃいいんだよ！！

運命とは必然の連続から成るもの

本上ていは

彼女は見知らぬ空間にいた
それも当たり前の事だろう。

彼女はほんの数分前まで学校の教室にいたはずであった

しかし、眼前に広がるのは古びたランプ

否

建物自体が古びている

アンティークやクラシック

響きがいいが

長い年月を経た建物である

一畳もないであろうそのスペース

その中心には便器があった

「ん…まさか…」

彼女は戦慄した

いや、一定の文化水準にある人間ならば誰でも嫌がるであろう

「1111トイレじゃない！！ちよっ…！！」

非常に不潔である。

お世辞にも綺麗とはいいがたいその場所に横たわっていたのである

すぐに身体を起こす

まだ少し足もとがおぼつかない

少し景色がぐらついているように感じる

少し落ち着かなきゃ

彼女は便座に腰をかける

何も便意を催してのことではない

この小説を放尿プレイのエロエロサービスカット小説にするわけにはいかないのだ

「ボス？つていつかここどこよ？」

なにぶん、どこでもドアを現実に体験するとは

まったくの初体験だ

アインシュタインでもこんな経験はしたことがないだろう

こういうときつて案外に冷静でいられるものなんだと思う。

即座に状況分析につとめる

「…ふう。なんかもう少し…かつこよく登場！！とかないのかな？
なんでトイレとかバケツとかおまるとか。そういうのになっちゃう

わけ？」

それは作者自身にも分からない部分である。

すると、ふと目の前の扉ががちゃりと音を立てた
ドアを開ける音である

それはそうだ

彼女は目を覚ましてから、このトイレの中にいて
それからあまり確認をする間もなく便座に腰をかけている
鍵をしていなかったのだ

「あ……」「あ……」

お互いに向かい合う
声が重なる

『あああああ！！』

そこから早かった
彼女

もとい
本上ていは
すくつと立ち

おもむろに入ってこようとした人に

全力で蹴りを入れた

その行動は何故か

まず

相手が男であると認識したことだ

本上ていは

花も恥じらうピチピチの高校生である

トイレという場で男に出くわすなんてことはあってはならないことである

もちろん、実際にトイレをしているわけではないので恥ずかしい気持ちがあるわけではないのだが…

いや

例え、トイレで催していなくても

個人的空間・領域に他人が入ってくるのは
恥ずかしいものである

とっさに出してしまった行動が

彼女が慣れ親しんだ

蹴り

という動作につながってしまったのだろう

男は彼女の見事な蹴りにトイレから弾き出され

外の壁まで吹っ飛んでしまった

本上はそこで初めてトイレの外の世界を目撃することになる

なんてことはない

映画に出てきそうな古びた洒落たバーのような場所だった

なぜバーのような場所？

バーじゃないの？
と思うかもしれないが

いかんせん

本上は未成年である

未成年の飲酒は法律によって禁じられています

バーという場所には縁がないので

映画で観たことがある

そんなイメージしかないのである

カウンターには店員らしき人物とお客さんが数人

テーブル席にも3人ほど座っていた

みんな目を丸くしている

無理も無い

そこにいるはずのない

制服姿の女子高生がいきなり

男を蹴飛ばして出てきたのである

「あ…あ…そつだ！…すいません！…すいませんでした！…！」

謝った

何に対して？

蹴飛ばした男にだろうか

それともいきなり驚かせちゃってすいません

そんな意味合いだろうか？

どちらもであろう

あたかもオートディフェンス自動防御のような鮮やかな蹴り技は相手を失神させるには充分であった

カウンター席にいる客らしき人が、吹っ飛ばされた相手と本上を交互に見渡しコソコソ話を始めた

マスターに見える男性も我関せずとグラスを磨いている

本上は首をかしげる

え？

スルー？

自分でした事ながら予想外の反応に啞然とした

どうも何かに怯えているようにも見える

何に？

そんな事を考えているとテーブル席のほうで大きな音が鳴った

慌てて身を構える

「オメーは焼きそばパンマンのほうがいいってのかオラア！！アア
！？」

「アンパンマンの登場キャラの声優全部言えんのか！？やんのかコ
ラア！？」

：

なんつー話をしてるんだ

さすがの本上も対象外である

大の大人二人がアンパンマンについて真剣に議論し合っている

しかも明らかにカタギな感じではない二人だ

その会話内容とその風貌のギャップはとてつもない大きなものであ
った

「困ったときの山寺だぞ！？オメー分かってんのか！？誰もチーズ
とカバオが一緒だとは思わねえだろコラア！？」

「今は山寺の話してんじゃねーんだよソヤロー！！それに『カバ
オ』じゃなくて『カバお』だテメエ！！喧嘩売ってんのかオラア
！？」

もはやいちゃもんレベルの会話である

こいつらは喧嘩を売りながら真剣な議論をしているのである

以下、アンパンマン議論中略

「だから、ウルトラマンは80が新人のペーパーでウルトラ一族というエリート部隊の一員になれるかが問題なんじゃねえのかよ!？」

「アア!？ウルトラマングレートの話してんだろぅがよ!！オーストラリアってなんだよオラア!！」

…話がウルトラマンになっちゃったよ!！

さすがの本上も想定外である

しかもお互いにまったくかみ合っていない所がなんとも歯がゆい

そうこうしてるうちに私が吹っ飛ばした人が目を覚ました

小太りで目は髪の毛で隠れていて見えない

壁にもたれかかるように倒れていたが

ハッと目を覚ましてきよるきよると辺りを見渡している

どうやら自分に何が起こったのか理解していないようでもあった

本上はすっかり雰囲気にもまれていた

小太りの蹴りあげてしまった男性に声をかける

「あ、あの…先ほどは…」

男性はビクツツとしてそそくさと本上から距離をとって離れていった

ぼてぼて

そんな効果音がしそうな足取りで

そして言い争いしている二人の所に行く

あたふたしながら二人に向かい何かぶつぶつ呟いている

「ああ!?!」「うるせえぞ!ノブタ!邪魔すんじゃねえぞオラ!
!」

先ほどまであんなにいがみ合っていた二人の意見が一つになったとき
野ぶたと呼ばれた男性は

またもや、宙を舞い地面に叩き付けられた

まさかまさか

ダブルパンチを喰らう事になると

顔面にめり込んだ二つの拳は野ぶたを再度失神させるには十分な威
力であった

「うわあ…!」

さすがの本上もこれには引いた

…自分も加害者の一人であることを彼女は忘れていた

それにしても、この状況下でいまだに誰もはた迷惑な客を止めにく
ない

どういふことなのだろうか

彼女は小声で隣にいる人物に話をかける

「ちょっと…！…ちょっときから何ですつと黙ってるのよ…！…」

さてはて

本上はこの場にいるはずのない誰かに向かって話をかけている
いったい誰に向かって話しているのやら…

「こづいう時は、いの一番にでしゃばるのがアンタの役割でしょう
…！？」

ボス！！

「んああ？」

「ずっと黙ってナレーション気取りでもしてたっつての？脳内の解説
がだだ漏れみたいになってたよ！？なにが『この場にいるはずのな
い』…なのよ！一緒にここまで来て、今もずっと一緒にいたじゃな
い！珍しく黙ってると思ってたら何やってんのよ！？？」

…カッカッカ

まったく

この小娘は…せつかくの新舞台だっつていうから脳内ナレーションで

読者様に新しい気持ちを味わってもらおうと思ってたのによあ…
らしくない喋り方でずっと喋ってたのが台無しじゃネエかあ…!
このシリーズはあわよくばずっとナレーションで通してやるうと思
ってたのによあ…

「…だがそのイレギュラーな感じもたまんねえなあ…!」

「むしろ、イレギュラーなのはボスの行動の方だと思っただけど…」

…まっただった…!

たはー!!

こんなイイ女がいるもんだなあ…!!

俺が男だったら惚れちまってるぜ!!

男だけどな…!

…うむ

ここで、読者諸君にもう一度説明をしておく必要があるなあ

俺は男だ

だが玉はない

もちろん棒もないっ!!

…いきなり下ネタかよ…!! って思ったろ?

カッカッカ!!

こまけえこたあいいんだよ!

別に去勢手術で取ったわけじゃねえし
好きで男を捨てたわけじゃねえんだな

かくかくしかじか

死んだら男 女

になってたってことよお！

笑っちゃうだろ？

カッカッカ

つまり今の俺は

身体は女 頭脳は男 その名も

「名探偵みとる様じゃ~~~~~!!」ドーーーーーン

…やべえ

勢い余って

訳わかんねえ男を二人吹っ飛ばしちまった…

「ちよつ！！ボス！！探偵にあるまじき暴力行為だよ！？何も推理
してないし！！その某海賊王みたいな演出はなに？」

「ん？ああ、つい勢いづいてやった。反省はしていない」

「いやいや…そんな、事件の供述みたいな感じに言われても困るからね。…ってか、反省しろよ」

「カツカツカ！大丈夫だぜえ？この二人なら…」

ああ、あと一個訂正があったわ

見知らぬ空間なんて冒頭にナレーションしたけどよ…

「イテエ…。イテーえええエ！！！！！ごるあ！！！！？テメエ、どこの平成ライダーだごるあ！？？？？」

「カツカツカ。威勢がいいじゃねえか！さすがにあのクソババアのトコのモンだなあ？」

「ああ？テメエ…なにいつせ…」バコ

「あー、ワリーワリー。も一発いつちまったなあ？あと、クソババアに伝えておけ。」

「あ…ああア…」

「… ってな」

そうだな。

神様ってヤツは運命をつまく回してるってもんだ

こうやって新しい人生を与えられた

だけ

そう思ってたけどよお

まさか、こんな風に巡ってくるなんてよお

ここは俺の故郷だ

強引さの裏側に潜む臆病

まったく！！ボスはめっちゃくちゃだよ！！

私は強く憤った

まるで、どっかの海賊王みたいな横暴さだ
私気が付いてからずっと黙り込んでると思ったたら

いきなり男二人を殴り倒した

ここに海賊王のモブキャラがいたら
ええ〜！？とか言っつて目を飛び出させていることだろうと思う

そのくらいめっちゃくちゃだ

残念だけど、これは小説でそんな漫画的な描写は一切ないけどね！！

「カッカッカ！マスターいつもの！！…じゃなかった、ホットミルクをくれ！！」

「常連かよっ！！」

何年も通い詰めた人が使うようなセリフ言っちゃうの！？

しかもホットミルクに落ち着いちゃうの！？

そりゃ、未成年はお酒飲めないけどさあ…

経過のまとめ

私たちは良いか悪いかは別として男三人を殴り倒した

もちろん本来ならば完璧にアウトな行為なんだけど

どうやら、最近になってからこころへんを取り仕切るようになったマフィアの下っ端だったらしい

どうにもこころにもこころへん界隈は新しいマフィアとの折り合いが悪いらしく幾度となくトラブルがあったらしい

そんなこんなで、なかなか鬱憤がたまっていたらしいが相手が相手だけに泣き寝入りすることが多かったとのこと

「イヤッハッハッハ！いきなり便所から出てきたときはおつたまげだが、あいつらをぶん殴ってくれて感謝するよ！」

「なあゝに！昔からのなじみだ！気にすんじゃねえよ！！」

「オウオウ！今日は一杯おごってやるよ！！それにしても面白いことという嬢ちゃんだなあ。こんなに強いねーちゃんだったら、将来の旦那は孫悟空か！？はっはっはっは！！！」

さすがにサイヤ人と結婚は難しいかなあ…

いまいち笑いのツボがわからない

そしてさっきまでは寡黙そうな印象を受けたマスターだったが思った以上に喋る

ついでに声がデカイ

「カツカツカ！それよりもこの街の今の状況はどうなってんだあ？前まではあいつらのシマじゃなかったじゃねえか」

まったく話の様子が呑み込めない私を置いてボスが話を進める

「…おう。そんな話どこで聞いたんだ？」

「ちょっとした事情でなあ…マスター…ホットミルクお替り」

ええ？ここで言うタイミング？

あまり牛乳飲んでるとおなか壊しちゃうよ？

「はいよ、ホットミルク　ん〜、どこまで言っていていいもんやら…まあどこで聞いたか分からんが、この件はあまり知らないほうがいい」

デカイ声を急に潜めるマスター

「俺も仕事柄いろんな情報が入ってくるし、俺自身も噂は嫌いじゃない。だけど、この件は本当にやばい　」

「構わねえよ。それにまんま他人事ってわけでもねえしよ。」

「お前らには救われた恩もあるしな　こっから先は独り言だ
と思っただけ聞いてくれ…」

よく分からないけど

この物語で一回あるかないかの珍しくシリアスな展開になりそうなので私は黙って話を聞いた

「いやな、この街はお世辞にも治安のいい街とは言えねえ。悪ガキよりもつとタチの悪い奴らが牛耳ってやがる。だけどな、前まではそこまでじゃなかつたんだよ。クソにはクソなりの秩序つてもんがあつたんだ。」

…なんか、読む小説を間違えたような話みたい
実は違う小説でした〜！！パンパカパーン
みたいな話はないよね？

そんな私の戸惑いを無視して、マスターは話を続ける

「前にここらを仕切ってた先代のボスが引退する、さあ次のボスを幹部から決めようって矢先にとんでもねえことが起こつたんだ」

なんか本当に聞いてちゃいけない町事情を聞いてるような気がして、
後ろめたさと怖さを感じる

私は不安になってボスのほうに顔を向ける

「ぐおお…ZZZZ」

寝ていらつしやつた

…！？

この状況下で！？

あんたが聞いた話なんじゃないの！？

言いだしっぺが放棄するってどんな状況よ？

しかし、寝顔だけ見るとやっぱり女の私から見ても可愛い…
いかんせん豪快な寝方ではあるけれども

「イヤツハツハ！こんな時に寝るなんて肝の据わった嬢ちゃんだ
！！」

ええ…まったくその通りだと思います

「んで、話の続きをしようか…」

続けるんだ…

いや、確かにここまで聞いてしまったからには最後まで聞くのも義務みたいなもんだと思う

「ん〜、どこまで話したっけか…そうそう、先代の引退だな。ボスの後継者候補は三人いた。いや、その中の一人は候補のもう一人にべつたりだから実質上は二人だろうな。

だけど、本来なら一番の有力候補にはぼ決まるもんだと思ってたさ。人望も実力も誰しもが認める存在だったからな。残りの候補二人も信頼してたしな。だけどよ…」

ここらへんでマスターの喋りが濁りだす
やっぱ、あまり言いたくないのだろうか

「いやな…そのまますんなり決まってくれば良かったんだけどよ。その候補の幹部が旅先で行方不明になっちまったんだよ…。一体、何があったのか誰もわからねえ。残されたのは取引先の組の死体だけだった。

それから組はめちやくちやだ。そりやそうだろうよ。明らかなき裏切りに取引ももちろんご破綻。それから組はガタガタだ。昔からの同盟相手や部下の連中も今回の不義に反旗を翻しシマすら奪われちゃった。残った先代はそのまま身体を壊しちまって入院中だ。残りの候補幹部二人も突然の行方不明に対応しきれなかったんだろ。それから、ここらを取り仕切るようになった組の横暴に限界を超える寸前だったつーわけだ」

：明らかに一般的な女子高生の範囲を超えた話だった
仁義なき戦いの何かであろうか？

私にはどうもこうもスケールが違いすぎてピンとくるような話ではなかった

もう少しギャグよりであってほしかった

サル君を探しに来て（連れてこられた）飛ばされた先はとんでもない世界であった

「グオオ…ZZZ もう食べられないよパトラッシュ…」

ボス…明らかにそんな空気じゃないよ。

「まあ、観光客のねーちゃんにはあんまり関係のない話をしちゃったな。すまねえ。なにぶん普通に観光するぶんにはそこまで表面化した問題じゃねえからよ！！今の話は独り言だ！！存分に楽しんでくれやー！！」

いつもの調子に戻って話し出すマスター

そうだね…世の中にはこんなこともあるし…

いちいち問題に首をつつこんで解決なんて痛快な冒険でもないんだ…
さっさとサル君とかを探して帰ろう

それが一番いいはずだよね。

私は少し大人になったつもりでことなかれを貫き通そうとしていたら、隣から声が聞こえた

「話は聞かせてもらったぜえ！！よし、行くか！！！」

いやいや、アンタ寝てたじゃん

思いつきりフランダースしてたじゃん

「いきなり何を言い出すのよ！行くってどこへ？あてなんかないじゃない」

まさに何も無い

こここの街の事情を聞いただけで、何一つ手がかりがなかった

「いやなあ、大体のことは分かった。今からある人に会いに行くぜえ！！！」

「今の話から何一つ情報なんてないじゃない。無謀にもほどがあるよボス！！！」

「なんでえ！嬢ちゃん！ボスなんて言われてんのか！イヤッハツハ！そういえばアイツにどことなく雰囲気似てるような気がしねえでもねえなあ！！！」

あの話のあとにここまで切り替えられるマスターはさすがだろう。
すると酒場の入り口から声がする

「いやあ〜。話は全部聞かせてもらったよお。あんまりそういつこ
とは部外者に口にしちゃダメだぜマスター？ ビシッ」

…誰？

いまどきないだろってレベルの眩しい白いスーツに
いまどきないだろっていうレベルの入念に整えられたであろうリー
ゼントヘアをした
いまどきないだろっていうレベルのきらきらした男が立っていた

「あ…ああ、お前来たのか…。」

「いやあね ここで誰かが暴れまわってるって情報を仕入れたから
ぶっ飛んできたわけ！いやあ、最近はいつらデカイ顔しすぎだよ
ねえ」

「おめえ、いつつもめごとが終わった後にくんじゃねえかよ…」

マスターはものすごく嫌な顔をしていた

「いやだな〜！そんなことないよお〜 たまたま、情報が入る時間
がこうなって。たまたま、ここまで駆けつける時間がこの時間にな
っちゃっただけだよお〜」

…う〜ん

「おい…アイツはウザいから関わらないほうがいいぞ。あいつの存

在自体がウザいからな。」

「ハハハ」 聞こえてる聞こえてるう〜！マスターひどいなああ〜」

そんな会話のやりとりのあと
こちらに目を向けるウザい男

「あつれえ〜？こんなとこに可愛い子が！しかも二人！！こんなしよぼくれたバーにいるなんてえ〜！今日は超ラッキーじゃね〜？」

…本当にウザかった！

この態度といい、この接し方といい…

しかも気が付いたら私の横に座ってるし…

「ねえねえ〜どっから来たの？その顔、アジアンビューティーだねえ！それにすごく綺麗な目をしてるね〜。うわあ〜、この白い手もすごく素敵だあ」

なにかにつけて私に触ろうとしてきた

イカン、なんかこのまま拳を振り上げてしまいそうな位にうざかった

「あ！そっちの子もすごく綺麗だねえ〜！すごく髪の毛サラサラでシルクみたいだ！ちよっと触っていい？」

ボスにターゲットが向いた

ボスがどんな反応をするのか少しだけ好奇心が湧いた

「かっかっか！本上う〜！！良かったな！探す手間が省けたぞお！」

？

そんな事を言うといきなり男の股の…ソレを乱暴に握った

いやいや、ダメだつて！どんな反応をするのか期待してたけどそれはダメだつて！！

ここを成人向け小説にする気！？

「おおおうふ！！い…いきなり、そんなところを…だ、大胆じゃないかあキミい…」

さすがの男もうるたえていた

「久しぶりだなあ…？お前、ちいせえ頃からずっとチビでどうしようもない卑屈な男だったのに成長したじゃねえかあ…？」

「ええつと、どこかでお会いしたかなあ…？ハハハ…こんなに大胆に女性に迫られたことないけど、君ほどの美しい人に声をかけられたら忘れるわけないんだけどなあ…」

いまだに軽口を言い続ける男

それを聞いてんのかどうか分からないがボスの手はさらに男の…

イヤイヤイヤ！！これ以上は言えない！！とにかく力を強めた

「アアアア！！それ以上はダメだよお！！男のソレは真綿のように

繊細なんだあ！」

女の私にもなんとなく分かる
痛いのは想像に容易かった

マスターも突然の出来事に呆然としていた

「カッカッカ！立派にはなったが、潰された玉はもどってこねえよ
なあ？もいつこの玉も潰してやろうかあ？スラムで一番のチビだっ
た片玉の　　マルコよお？」

その話を聞いたら、男の顔はみるみると血の気がひいて青ざめてい
った

「ど、どうひて！？その話を知ってる人なんひええ　　！？」

男は最初のキザでナンパな姿からは想像もつかないほどにみつとも
ない姿を晒していた

「お前に会いに行こうとしたとこだ！ちよつと色々と…清算をし
にな…」

ボスはいつになく真剣な顔つきをしていた

「やっぱよ。人間ってのは完全に生まれ変わりはできねえんだよ。
ケジメはしっかりつけにいかねえとな…」

「ちよつと！！嬢ちゃん！！やりすぎだ！！マルコが泡吹いちまっ
てるー！！」

マスターはなんとか正気を取り戻しボスを止めていた

きつく握りしめすぎていたらしい

これが

スラム街のチビマルコとの最初の出会いであった

以下、サル

前略、おふくろ様

春も過ぎ去り

夏の影がちらりちらりと顔を見せる季節になりました

私もとい僕、なぜか知らない場所で64な大乱闘をガタイの良い屈強な男たちとプレイしておりましたが
気が付いたら、なにやらピンク色の少し大人の香りがする部屋のベツドの上にあります

聞こえてくるのはシャワーの音

大人の階段を上ろうとしてる僕はまだシンデレラなんでしょうか？
このまま甘酸っぱいさくらんぼからクラスチェンジをするのでしょ
うか？

まさか、高校に入学した当初は予想もしておりませんでした

しかし、これは甘酸っぱいラブコメや様々な出会いの過程をすっ飛
ばして

いきなり濃厚な成人向け小説になりさがろうとしております

そんなことが許されていいのでしょうか？

…僕は構いません

確かに純潔をこのような過程で失うことになる怖さはありませんが
青春時代の中高生の性欲を侮ってはいけないと思います

むしろ

そんなの関係ねえ

そんなの関係ねえ！！！！

ムラムラは時として物語を破たんさせるものであります

現実はそのようなものです

うっひょおお

僕はアルサー又な三世のようにベッドに飛び込む自信があります

そうこうしていると
シャワーの音が止まりました

『次、入っていいよ？』

うっひょおお!!

僕はどうなってしまったのでしょうか？

どうにもならないんでしょうか？

どうにでもなってしまえばいいと思います

過ちと修正と未来への歩み方

そんなわけでマルコのおうちにやってきましたとさ

どういうわけだろう

ちゃんちゃん

「いや〜美少女二人を部屋に招く機会があるなんて、僕もついでるなあ〜 ハハッ」

このとてもウザい男はマルコ

この街の住人で、情報屋という側面も持っている

…らしい

こんな軽薄そうな大学生ノリの男である

すっかり調子を取り戻し、相変わらず軽口を叩いている

「これでも、わりかし女の子にはモテるほうなんだけどNE〜でも、君たちみたいになかなかないかなびかない女の子のほうに燃えるってどうか？バーニングってどうか？」

「カッカッカ！こんなおんぼろの割には豪華じゃねえか！！」

地元の人間しか通らないような薄暗い路地を抜けて

今にも崩れそうな雑居ビルの中にマルコの住居は存在していた

ボスの言うとおり中はビルの外見と違って、非常に真新しい印象を

受けた

この男が口だけではなくて、本当におしゃれさんなんだと思わせる説得力はあった

見た目とか雰囲気は苦手だけど…

というか、ボスクつろぎすぎ

お前の家か！とツッコミたくなるほどに他人の住居でくつろいでいる

「そんでよお、チビマルコよ。さっそく話があるんだけどよお」

ボスのそんな発言に少しビビる姿勢を見せるマルコ
やっぱり初っ端の出来事が非常にトラウマらしい

いや、当たり前だよな

片玉どころか

両玉失いかけたんだから

「違う！…！僕は片玉じゃない！…ちゃんと両玉あるよ！…！」

「え？いや、だって…」

私の思考を読み取ったのか

はたまた、ボスに話をかけられて昔の思い出がフラッシュバックしたのか

いきなり拒絶するような声を張り上げた

「あれは…近所のロメオが…俺をバイクで追いかけてまわして…ブツ
ブツ…」

どうやら触れてはいけないことらしい
私も初対面の人をそこまで追い詰める趣味はないし、放っておくことにした

「カツカツカ！バイクで追いかけてまわされたあげくに、近所の野良犬のしつぽを踏んづけて玉を食いちぎられかけて医者に駆け込んだんだっけなあ！！」

容赦ないなボス！！

人のトラウマにデンプシーロールで追い打ちをかける所業だよ！！

「だからあ！君はどうしてそのことを知ってるんだよあ！？ははーん、さては僕のストーカーだな！？僕のことを好きすぎて、僕の情報を盗もうとするイケナイキューピッドさんだな！？」

この男はこんな時でもボケを忘れないらしい

「カツカツカ！こまけえこたあいいんだよ！！なんなら、今度は本当に玉をくいちぎってやろうかあ？」

「ヒイイ！ストップ！本当に勘弁してくれよ」

ボスがもう一度、股に手を伸ばそうとすると必死に抵抗しているマルコ

まるで昔っからのイジメっことイジメられっこのようだった

「もう！せつかく、この街からロメオがいなくなっただっていつの日に…とんでもない災難だよ！」

「ん？ロメオさんって人がいなくなっちゃったの？」

今の会話に出てきたロメオ
マルコさんが玉を失いかけた原因の人

「そう！ロメオは昔からの仲でね…。本当に最悪なんだよアイツう
！！昔から僕のことをバカにしやがって…。しかも、突然にいなくな
りやがったんだ！」

なんとなくさっきの酒場で話してた内容と結びつきそうな気がする

「そのロメオさんって…もしかして結構危ない人？」

「そう！ロメオは危ない人！この街のファミリーの幹部だったんだ
よお！！どうしようもない悪ガキで…本当にどうしようもない悪ガ
キだったんだ！アイツがファミリーになるのは決まっていたようなも
んだよ！！！」

どんだけどうしようもない人だったんだろう…。ロメオさん…

「おい！！このベッドの下にポルノが隠してあるぞ！ちよつとは隠
し場所考えろよなあマルコお！！！」

どうしようもないな！！ボス！！

…ここにもどうしようもない人が一人いた

やめて、そんな本を私に見せないでよ…

「うわああ！やめろよお！健全な男性のいたいけな心をそんなお
っぴらにうら若きレディが乱しちゃダメじゃないかああ！」

なんなんだろう

中学生の会話みたい…

いちいち話の腰が折れてしまう

「それで…この街がめっちゃくちゃになる原因になったロメオさんってどうなってるの？情報屋さんなんでしょ？」

私が仕切りなおさないとたぶんめっちゃくちゃになりそうな気がした

「あ…あゝ。それがね、さっきのバーでの会話の通り。海外での取引中に行方不明さあ。僕の情報網でも追いかけきれなかったよ大概の情報は入ってくる僕だけど、」

そうなんだ…見つかるといいね…ロメオさん…
で、私たちは何をしにきたんだっけ？

私はボスに向き直る

「そういえば、さっきボスがマルコさんに聞きたいことがあるって言ったじゃない？正直、今の話からサル君を探し出すことに結びつけるのは無理があると思うけど」

「そうだったなあ！ロメオ…の話はどうでもいい。それは二の次だ！いや、三の次くらいか？」

どっちでもいいよ！

「まあ、いいかあ！いやなあ。とある人物の行方…いや…マルコもよく知ってると思うけどよあ…エリカは…いま何してるんだあ？どこにいるっ…」

エリカ？

誰？

私たちはサル君を探しにきたんじゃないの？
サル君ってエリカって名前なの？

「ちよっち！ちよっち！！なんで子猫ちゃんはそのなとこまで知ってるのお！？まさかまさかのまさかだよお！」

マルコはありえない単語が出てきた事に驚いているようだった
私には何が何だか分からない

「ん〜、どこまで話していいものか…元々は隣のシマのファミリーの子だったからねえ〜。なんで、ロメオはあんな女をガールフレンドにしたのか分からないよ。」

また出てきたロメオという名前

「確かに、目もくらむような美女だったけど、僕には毒が強すぎたよお。あれはね、メデューサだよお。あの美貌とは裏腹に…だね。やっぱ女性は純真無垢で天使のような…」

「んな話はどうでもいいんだよお！アイツが…エリカがどこにいるのか教えるよマルコお！」

いつも通りに聞こえるボスの口調だけど
どこか真剣にもとれる感じだった

「ちよつとちよつとお！落ち着きなよ子猫ちゃん？せつかくの綺麗なお顔なんだからサ」

この人もさんざん痛めつけられてるけど、自分のスタンスを崩さないようにしているのが分かる

まだこんな調子で喋れているのだからすごい

「エリカはねえ…ロメオがいなくなったあとに、この街で元のファミリーの手引きをして合流サ。今はこの街を牛耳ってるYO！最初からこれが狙いでロメオに近づいたとしたらとんでもない女だよ本当にさあ〜」

「よく分からないんだけど…今の話だけでまとめると、行方不明のロメオさんの彼女さんがエリカさん？そのエリカさんは今この街を仕切ってる組のボスなの？」

「ん〜そんなとこかなあ。この街の支部長さんみたいな感じかな？すごいよねえ。女なのに、ファミリー取り仕切ってるなんてさ！」

話の全体はよく掴めないけど
大体の流れは把握できた。

ますます、サル君から遠ざかってるような気がする

なんで私は会ったこともない人の心配をしてるんだろう？

「くああ！ややこしいことになってんなあ！おいマルコ！ルリオとマイジはどうしたあ！あの二人がいれば問題なかったはずだろお！？」

「どこまで事情通なんだよお子猫ちゃん…。ファミリーのあの二人はあっさり引いたらしいよ。あの二人もロメオにべったりだったからねえ。ファミリー全体をまとめきれなくてやられる一方だったらしいよ。今となつちゃ、むやみに血を流すような事がない英断だったと思っけどねえ」

そこまで聞くと、ボスは何かに気が付いたようにぐったりと椅子にもたれかかった

「カツカツカ…。俺は色々で見誤ってたなあ…。俺は昔からいつも通りに振舞っていただけだったが、いつの間にか多くのモノを背負ってたんだなあ。結局は、巡り巡ってなんの運命か。俺はこのために生かされてたんじゃないかと思っちまうぜ…」

ボスは笑いながらも、すごく辛そうであった
こんな表情をする人だったんだ

いつも明るくて

破天荒な振る舞いをする

そんなどうしようもない人だとばかりと思っていたけど

想像以上に何か重いものを背負っているのかもしれない

だからこそひきつけられるのかもしれない

「おお、子猫ちゃん。落ち込んでる姿もとてもキュートだね…！むしろ、僕的にはそっちのほうがそそられ　ブオッ」

私は空気を読んでマルコの口をふさいだ

正直なところ

ここまで落ち込んでる姿を見せられると私も可哀想に思えてくる
ボスには常に笑っていてほしいといふかなんというか

「ボス……その……今からでも大丈夫じゃないかな？サル君を探す
でしょ？今のボスが何を抱えているのか私にはよく分からないけど、
ここに来たのも何かの運命なんだろうね。」

もしかしたらボスの過ちとかやり直せるのかもしれない。自分が
気が付かなかった事とか。そういうのを全てやり直していこうよ。
これからさ。私も力になるよ？何の関係もないかもしれないけど、
この場所がスタートなのかもしれないよ？ボスには笑顔でいてほ
しいな」

私は知った風な口を聞いてしまった
偉そうなことを言っちゃったなとちよつと気恥ずかしくなってしまう
った

でもこれが正直なボスへの気持ち

ボスは少し考えた後に綺麗な顔をこちらに向け私を見つめてきた

「本上よお……」

「ん？」

「……お前はいい嫁になるぜえ！俺のお墨付きだ！世界中の男がほっ

ておかねえ！むしろ俺の嫁になれ！」

百合宣言！？

私にそんな趣味はありません！！

「僕は今、とんでもない美しい場面を見てしまったようだあ！！ど
うぞどうぞ続けて続けて！！出来れば手を取り合って顔を近づけて
…」

「ちよっ…なにしてんの！バカじゃないの！？」

カメラをこちらに向けようとするマルコを思わずはたいてしまった

「カッカッカ！おめえもこりねえ男だなあ！マルコ！」

笑顔でそう答えるボス

その顔にはもう曇りはなかった

良かった

さて　これからどうなるんでしょう

以下、サル

前略、おふくる様

僕はさくらんぼからパラディンにクラスチェンジできなかったよう
です

ですが

女性と一夜を明かす

これは半分クラスチェンジしたも同然だと思えます

半クラです。半クラ

あれって、加減が難しいよね。

エンストしちゃうよね

シャワーを浴びてる時も胸の高鳴りが収まりませんでした

鳴り止まない熱き鼓動の果てに です

シャワーからあがる僕

僕はいつでもいいぜえふじこちゅわ〜ん!!

…?

どうやら、相手はお酒を飲んでいらっしやるようです

「ちよつとお、話を聞いてくれるかしら」

どうやら酒の愚痴に付き合わされるようです

ふむ。

このやりばのない衝動をどうしようか

椅子に腰かける女性の前でパンツ一丁の僕が正座をすることになった
すごく恥ずかしいです

女性の前で裸な時点でだいぶアレですが
そのうえ正座って！！

そういう業界の人からしたらご褒美なんだろうけどさ

まだ高校生よ？

分かる？

アリアハンでうごく石像を相手にするようなもんよ？
すっかり萎縮してしまった

「私の酒が飲めないって言うのぼうやあ？」

「飲めるも何も僕…未成年ですし…」

この人は大人の雰囲気か漂っていらっしやる
フェロモンムムン

こんなに美しい人とどうして僕と一緒にいるんでしょうか？

回想

僕は64な大乱闘をマッチョな方々と一緒にやっている

いやね

その時点でだいぶ変なんだけどさ

さらにとんでもないイベントが

ポロポロになった人がいきなり扉から入ってきた

ロマンシングなサガの3なら、お姫様が入ってくるようなイベント
だけど

残念ながら、太っちょの男が男二人をかつぎながら入ってきた

それから一通りの挙動不審のあとにこう言った

ロ：ロメオが帰ってきた！！

僕からしたら

え？誰？ロメオ？欧米か！！

って感じなわけですよ

でも周りの反応は違った。

部屋の至るところで畏怖ともとれるようなざわめきが起きた

そうしたら一人の男の合図を機にみんな部屋を飛び出していったんだ

僕からしたらぽかーんだよね？

空気を読んで一緒に飛び出していくべきだったかな？

とにかく一人で取り残されちゃったの
あれ？僕は帰っていいのかな？って感じだよ

でも、正直なところどこだか分からないし
少しおろおろしちゃった。

とりあえず部屋から出てみた

そしたらさ、なんかすごい大きい廊下で

ここで100m走できるんじゃないかってね

扉もいっぱいあるしさ

ここでまた僕はおろおろしちゃった

しょうがないよね？

ごくごく普通の高校生だもん。

こんな廊下は漫画でしか見たことないもん

とりあえず歩いてみるの

でもさ

道に迷っちゃった

似たような作りで

似たような景色がずっと続いているみたい

さ感じです
途方に暮れちゃったよ

そうしたら声をかけられちゃったよ

「あら、アナタなにしてるのお？」

振り返るじゃない？

そこにはバインバインの美女が立ってるわけ

ああそうか、ここが天国かと勘違いしちゃったよ

「聞いてるう？」

「は、はい！！アナタが綺麗すぎてムラムラしました！！」

しまった！！

本音と性欲がストレートに声に出してしまった！！

おまわりさん！僕です　！！

「ちよつとお。正直すぎるわよお」

そういつて聖母のような微笑みを僕に投げかけてくれた

同じ人間とは思えないほどの綺麗さだった

「ん〜、アナタちよつと暇？よかつたら私の部屋に来ない？」

「ハイ！喜んで！！」

我ながら欲情にストレートすぎ、久々の長い喋りだからって自重を知らなすぎだな僕

居酒屋の店員さんのような気持ちの良い笑顔で応えてしまった

そこからはみんなも見ていてくれた通りだ。

ああ、そうだ…

僕のマスコットのなまりもの存在を忘れていた
そんなことを言うと怒られてしまいそうだけど
もちろん傍にいる

だけど、なぜかあまり姿を見せてくれなくなっていた
時たま姿を見せたと思っただらスツつとどこかにいなくなってしまう
あんなまりもでも、いなくなると寂しいもんだ。

ちなみに、僕がおねーさんと会話しているときは軽蔑のまなざしで
僕を睨み付けていた
フフフ…なんとも思うがいいな…

回想終了

「…というわけなのよお。聞いてるオサルさん？」

「はいい！もちろんでしゅー！」

赤ちゃん言葉で甘えたくなるくらいの女性なのだ

「ウフフ…可愛い子ねえ。それに…すごく…似てる」

「似てる？誰にですか？」

「若い時のロメオそっくり。雰囲気っていつか」

「ロメオが誰だかわかりませんが、おねーさんみたいな綺麗な人と一緒にいれて幸せです！！」

「さつきも言ったじゃないのお。ロメオは私のオ・ト・コ」

「彼氏さんいらっしやっただんですか…?」

僕、ショッケー！

いや、このおねーさんとどうのこうの出来るのか思っただけよ？本当に本当だからね？…本当だよ！？」

「うーん、今でもなのかなあ？おねーさんには難しいかなあ？」

いやん、そんな曖昧で小悪魔な微笑み！

天使のような悪魔の笑顔！！

そんな返事が出来るなんて素敵すぎます。

「ロメオねえ…今頃、どうしてるのかしら？死んでたりして」

ちょっと悲しげに微笑むおねーさん

「おねーさんにそんな顔させるなんて、ロメオって人は罪な男です！そんな男は忘れて僕と…！！！」

「ウフフ…ダーメ。坊やはちゃんと大事な人と…ね？」

こんな顔されたら何も言えなくなっちゃうぜ！！

ひゃっほーい！

むしろ、こんな女性と会話できるだけでもありがたいというものだ
「そろそろ、行かなくちゃ。楽しかったわ、ありがとうね坊や。この部屋は好きに使ってね。でも、危ないから当分はこの部屋からは出ないほうがいいわよ」

「ああ～おねーさん～」

僕はおねーさんの後姿を恨めしそうに眺めていた

すると振り返り僕に向かってこう言った

「そ・れ・と、私はおねーさんじゃなくて『エリカ』って呼んでくれなきゃだ～め」

愛ゆえに憎いカタストロフィ

私はボスと病院に向かうことになったらしい
なぜ？

情報屋のマルコから情報を得た私たち
そこらへんは省略

『本当だったら子猫ちゃんたちに莫大なお金を請求しちゃうとこだ
けど、この分は君たちがもう少しアダルトイックなレディに成長し
たら僕と一夜のアバンチュールで勘弁してあげるよお！ハハッ！』
だって

本当はボスにビビって請求出来ないと思ったんじゃないかな

「それで、なんで病院に？」

「カッカッカ！なぜかって？それはとある人に会いに行くからだよ
！」

相変わらずの説明不足。

こっちに来てからそういうの多くない？

というより、私のついてきた意味って…

天空の勇者でいうところの正義のそろばん使う商人だよな？
常に馬車…

「カッカッカ！トルネコは使えねえなあ！」

名前言っちゃったよ！
あえて伏せてたのに！！

トルネコだって不思議なダンジョンとかだと主役じゃない！！
ドラゴンとか一人で倒しちゃうよ？

「探索してるときに地雷とか踏みつけちゃって爆弾岩まで連動しまうと大変なことになっちゃうよなあ」

あるある

…じゃなくって！！

「私って来た意味あるのかなあって。思っちゃっただけだよ…今だってただボスの後ろをついて歩いてるだけだし…」

「良いにきまつてんじゃねえかあ！ここに来たときはどうなることかと思っただが…今は本上がいてくれたことに感謝してるぜえ？…ツッコミ役がないと物語が破たんしまうよ！」

「そついう要因！？」

メタがすぎるよ！！

私たちは病院までの道のりを歩いている
こんなアホなやりとりをしてるけど、ここまでの道のりはいたってシリアスであった。

こんな緩和剤でもなければ、とてつもない冒険活劇になることだろう

改めて、この街を見回してみる

とても古い

歴史を感じさせる街並みだ

まるで異国のような情緒をかんじさせる

そう、私が思い描くヨーロッパのような…

「ここヨーロッパだぜ？」

「え？」

「カッカッカ！お前、今まで自分がどこにいるかわかってなかったのか！？」

「だって、みんな日本語喋ってたよ！？明らかにノリが日本人だし、ネタだって日本人ノリじゃない！？」

「カッカッカ！そこはこの小説を海外向けの英文ノベルにしないための便宜つてもんじゃないかねえかあ？」

「そんな都合の良いことあるの！？」

『あー…あー…そんな都合のいいものがあるでござる』

「うわっ、気持ち悪い！」

脳内に直接響くような声が聞こえた

『うむ、無事に着いたようで何よりでござる』

「その声は…狭間さん？」

『いかにも。拙者は狭間あさひでござる。…今は』

「今は！？意味わかんないよ！」

そんなことは今はどうでもよかった。

「それよりこの声はどうなってるの？すごく気持ち悪いんだけど？」

『ふむ、これは転送者用の通信でござる。凄いでござるっ？これ、魔法なのだけ？』

「なのだけってなによ…」

改めて、自分がいま非現実的な状況にいると突きつけられる

『うむ、やはり異世界においてコミュニケーションというものは大事でござるからな。転送者には自動的に転送先の言語を自動翻訳する機能がついてるでござる』

「なにを言ってるのか分からないよ…」

『簡単に言えば、翻訳こんにやくみたいなもんでござるな』

どらえもん！

どこまでもネコ型ロボットの後追いみたいな人だな

『現地のジョークや意識は日本向けのジョークにアレンジされる機能もついでにござる』

「それって凄いけど、翻訳としてはどうなの？」

「カッカッカ、俺はこっちの言葉もペラペラだから意味ねーけどなあ。」

とにかく、物語上で非常に都合の良い産物だというのは分かった

「まあ、それはいいとして…いきなりどうしたの？こんな時に通信だなんて」

こういうことに慣れてしまってきている自分が嫌だ
ここは読者のためにも、説明パートは省略しておこう

『ええ、今部屋に一人でええ、寂しくなってええ、電話しちゃったあ』

「彼女か！！」

『私のことお〜どれくらい好きい〜？』

「彼女か！」

『私のほうがもっともっと好きだよあ〜？』

「…彼女か」

…」のやりとりいつまで続くの？

『私い〜鎌倉のほうで女性ばっかの大学行ってるんですう〜』

「…え？…あ！鎌女か！！！」

「すごくツッコミが難しいご当地ネタありがとうございます」

『うむ、本上氏はツッコミの鬼才でござるな。その溢れんばかりのボキヤブラリーにぐうの音もでないでござるよ』

「なんか…とても嬉しくないです」

『それより、今のところ何か情報はないでござるか？サル氏の情報は？』

「うーん、それがサル君を探しにきてるはずなのにすごく変な方向にね…今のところ手がかりなしでさらに厄介ごとが増えちゃいました。みたいな感じかな」

『ふむ、状況は好転せず…でござるか。』

「むしろ、変に回り道してるような気がしてならないだが、ボスはとても気楽な顔だった」

「カッカカ！大丈夫だぜえ！俺はすでにある程度は目星がついてるからなあ！」

「え…？そうなの？とても私にはそんな風には感じないんだけど」

『なんと！！流川氏はさすがでござるよ！！』

「だから、お前は何も心配するな！安心してサルのお出迎えの準備」

をしておけよお？」

『うむ…!! 会ったばかりの拙者のためにここまでしていただいた…本当に感謝しても足りないでござるよ…!! 二人の無事も祈っているでござる…!! また何かあったら連絡するでござる…!!』

そついうと声はぱったりと聞こえなくなった
唐突すぎる人だと思っ

この一日でだいぶ唐突なことが多いなあ
唐突すぎて本当に何年分くらいの経験をした気がする

「てれてれてってってー。おめでとう！ていははレベルアップした
！」

「いや、何言ってるの…」

こんなやり取りをしているとボスは足を止めた

「さて…ついたぜえ。ここだ」

なんかあつという間というかなんというか

顔をあげて全容を把握してみる

街の規模にしてはとても綺麗で
大きめの病院であった

「で、ここに誰がいるの？」

「ん？ああ…言ってなかったけかあ？ここには…先代のボスがいるんだぜえ？」

「ええ！？聞いてないんですけど…！」
なぜ？

病院には前にこちらへんを仕切ってたファミリーの先代がいるらしい
疑問ばかりが頭に浮かんでくる

「んじゃ、行くかあ…！」

「ちょ、ちょっと危くないの？やっぱ…そういうひとたちなんでしょ？」

「んん？…どういう人たちだってえ？よくわかんねえけど大丈夫じゃねえの？」

「すごくあやふやだよ！！そんなんでよく来れたな…！」

「まあ、顔パスだろお。顔パス…！」

「え？なに？アンタ、えらいひとなの？」

以下、病院内

「…で、どうして私たちは囲まれてるの？」

「あれえ？おっかしいなあ〜？」

私たちは病院に入って、ナースに病室の場所を聞いた

とても怪訝な顔をしていた

そりゃそうだろう

こんなところに女子高校生が二人。なんの用事でファミリーの先代ボスに会いに行くっていうんだってーの

病室に向かう途中でなぜだか知らないけどおっかない顔した黒服の人たちに囲まれてしまった

「おい、お前ら…その…病室に何の用事だ？」

そりゃそうなりますよねー！ー！ー！ー！

ましてや、限りなく追い詰められてる状況下

命の危険がある

そりゃ警護の一つや二つついてないとおかしいと思いますよー！ー！
ー八八八

「カッカッカ！おめえらも変わってねえようで何よりだ！…少し疲れ気味かあ…？」

ボスが大声で相手に話しかける

「ちよっ、ここ病院！ーもう少し静かに！」

…つて、私もそんな心配してる場合じゃない！！

「ああ…？」

ぎろりと睨まれる私たち

さらに疑惑が大きくなったようだ

「いえっ、その…私たちは…その…」

私はしどろもどろになってしまった

というか、ここに来た理由をしつかりと聞いていない

ここはボスに…

いやいやいや…こういう場面のボスは極めて危険だ

何をしでかすか分からない

重たい沈黙の中に私の乾いた笑いだけが響く

そんな中、この沈黙を打ち破る声が囲んでいる男たちの後ろから聞こえた

「貴方達、この騒ぎはなんですか。ここは病院ですよ？ボスのお身体にも触りません。静粛に」

とても紳士的で厳正な声はスラっとした高身長姿勢の綺麗な眼鏡をかけた男性から放たれたものだった

取り囲む男たちはハツとして、道を作るようにその男性の前に整列した

その様相は、統率のとれた一つの軍隊のような動きでもあった

厳格で威厳のある声

気品に満ち溢れていた

傍から見てもこここの場を取り仕切る偉い人だという人だというのがよく分かる人物だ

整列した男たちの中の一人が声を出す

「いえ、ルリオさん…何やら、ボスに用事とかいう怪しい二人がいたもので…」

「ふむ」

そう一言いうと私たちを品定めするかのような目つきで見回したそれから端正な顔立ちから言葉を発する

「失礼、お嬢様方。何分、今は物騒な事が多く起こっているもので部下も少々気が立っています。それで、今回はどの様なご用件でこちらにいらしたのでしょうか？」

こちらが萎縮してしまうくらいに紳士的な態度で私たちに接してくる

「え、えっと…それは…」

先ほどとは違う緊張感があった

ちらっとボスの方を横目で見…

あれ？ボスが横にいない？

意味が分からないけど、ボスは隣にいなかった

それじゃボスはどこに…

「よおおお！ルリオおゝ！！相変わらずかっつてえなあおめえはあ。そんなんじゃないつか窒息死しちまうんじゃないかねえのかあ？」

先ほどまで話していた男性の横で肩に手を回しながら小突いていた

「えええええ！？」

慣れなれしすぎる！！

なに！？君たちは数年来の同窓会で会った人達みたいになってるよ！？

周りの人も固まっている

周りの空気が凍り付いているのがこれほど分かるような場面もなかなかにお目にかかれない

「…失礼。貴方は？」

先ほどの柔らかい雰囲気ではなく、ギロリとした目つきでボスを睨み付けているようにも見える

やっぱファミリーの偉い人というだけの迫力があつた

「…ああ！！そうだった！！お前は昔っから女に弱かったよなあ」

！そのたびにそんな顔して女泣かせてたもんな〜！分かりやす
ぎんぞお前え〜！！ちょっとは直せよそういうところお〜。俺は嫌い
じゃねえけどなあ〜！！」

ボスはまるで物怖じしない雰囲気でもしろ身体を相手に押し付ける
ような形で相手に迫っている
もうやめて〜！もうやめて〜！

空気を読んで〜！！

そういう流れじゃないから〜！！

いや、初対面の人にその接し方はどうという流れでもありえないから
！！

さすがの紳士な男性も額の青筋がピクピク動いているのがここから
でも分かるようだった

どうしよう〜！！

少なくとも私にこの場を取り繕うような技量はなかった

というかそんなスキルを持ち合わせている人なんているのかどうか
誰か〜！どうにかして〜！！

「あれえ〜？兄さん、なんで女の人とそんなベタベタしてんの〜？
彼女？ねえ〜彼女なの？」

どこからともなく、少なくともこの場に似つかわしくない気の抜け
た声が聞こえてきた

「兄さんみたいな身も心も鋼で出来たような人にも彼女が出来るもんだねえ〜」

この声が病院の窓の方から聞こえてくることに気が付いた

「少し静かにしていなさい…今はその様な場ではないですよ。…マ
イジ」

ずり落ちそうな眼鏡をかけ直す仕草をしながら言い放つ兄と呼ばれる男性

私は窓の方に目を向けると、大木の枝に一人の男性が座っていた

「ちょっとそっちに行くから！…ちょっと待ってて！…」

え、ここ4階だよ？

というよりどうやって登ったの？

あぶな…

「よつと

」

そついうと木にいた男性はこちらの窓に向かって飛び込んだ

「あれえ？どうしてみんなこんなところに集まってるの？兄さんに彼女ができたことのお祝い？」

彼は軽々とこちらに飛び込んで見事に着地を決めていた

曲芸師さん…？

まだ、そこまで年齢もいつていないであろう顔つき

たぶん私たちと同じ年ぐらい…？
それにしても純粹で綺麗な瞳をしているなあという印象だ

「おお！ーマイジじゃねえかあ！ー元気にしてたかあ？お前は相変
わらず可愛いよなあ！ーウリウリ」

ボスは相変わらずというか
気持ちの悪いくらいにフレンドリーであった

「うわっ、ねーちゃん誰だよ！ーおっぱいあててくんなよ！離せっ
て！ー！」

突然の新キャラ二人の登場に私は戸惑っていた
それにしても、コイツ無邪気すぎるだろ…

しかし、二人目の来訪者のおかげでなのか先ほどよりは場の雰囲気
は和らいできた

言うなら今しかないと決意した私は意を決して発言した

「えっと…私たちは…先代のボスさんに…会いに来ました…」

あっけにとられていたみんなは私に視線を集める

「ふむ…」

「えゝ、ボスにあいにきたの？どうして？」

二人ともボスの腕の中から私に発言をした

「えっと…それは…」

ここでまた言いよどむ

理由がやっぱり分からない。

それでもみんなの注目はやむことがなかった

私はボスにヘルプサインを出した

「ん…、ああ忘れてたわ！！つつい、お前らに会えたのがうれしくってなあ！！わりわりい！！！」

本当にむちゃくちゃだよこの人…

それから、わずかの間を置いてから

少しだけ真剣にしゃべる

「俺はロメオ…」

そこから考えるようにもう少しだけ間を空けた

「…俺たちは…ロメオの使いで来た。ジジイに会わせろ」

せつかく和んだ空気がまた張りつめだした

みんながその名前を口にした瞬間に今までの緩んだ表情から本気の顔つきになった

ボスに抱えられたままだった二人は見合わせるようにして

「兄さん…」

「ああ…」

そう言葉だけ交わすと

私たちは

床に取り押さえられた

本当に瞬きもできないほどの速さで一瞬にして床に
私もボスも動く間もなくだ

それがどれほどのことなのかはこの物語を読んでいる人には察して
もらいたい

そして頭に固いものが当たる

「おい、テメエらその名前をここで口にすることがどんな事か分か
つてんだろうな…?」

先ほどの無邪気な表情からはまるで想像もつかないほどの

冷たい

冷たい

温度を感じさせない声を出す弟

「今すぐ死にてえか？女だろうとなんだだろうと容赦はねえぞ？一瞬
であの世に送ってやるよ」

ボスを押さえつける兄

彼も先ほどの紳士的な態度からは想像もつかない言葉遣いと雰囲気
をまとわせてボスを見下ろす

そしてボスの方を、なんとか見ると頭に当たってるモノがなんなの
かが分かった

拳銃

こんなモノを生で見るとなんて想像もしなかったよ

ましてや、そんなモノを頭に突きつけられて

自分の命を容易く散らすような状況になるなんて…

正直、ここに来るまでは

なんとかなる

とか

ちよっとした好奇心

なんかがあつたことも少しは否定しない

でも私たちが置かれている状況はそんなファンタジーじゃなくて
とても冷酷な現実なんだということを実感させられた

一気に恐怖心が湧いた

私みたいな高校生がどうして？

なんで？

怖い…

怖いよ！！

助けて！！

「カッカッカ！！」

私の耳にボスの笑い声が響いた

「なんで…」

どうして

「なんで笑っていられるのよっ！？これはギャグでもなんでもないのでよ！？こんな笑えない状況になって何がギャグよ！！！こんなの打ち切りよ！打ち切り！！！」

私はボスの笑い声がきつかけでどうしようもない感情が溢れでてきた

自分勝手

エゴな感情

分かってはいるけど、止められないものだ。

「おめえら、変わってねえなあ。」

ボスは笑い交じりに押さえつける連中に向けて発言した

そしていきなり大声を張り上げて言い放つ

「おい！！クソジジイ！！聞いてんだろ！！ロメオだよ！！てめえに小さいころから世話になってやったロメオだ！！黙って見てねえでなんとか言ったらどうだ！！」

「うるせえぞ。てめえ。自分が置かれてる状況が分かってんのか？」

なおも銃を突きつける兄
このまま死んじゃうの？

状況は絶望的だ

私にはどうすることも出来ない

とてもじゃないけど笑える状況ではない。

「…あと…教えといてやるよ。ボスはなあ…ロメオがいなくなったあとに倒れて寝たきりだ。あのクソヤローが突然行方をくらましやがって。ボスは後始末に追われる中で倒れちまって意識が回復してねえんだよ。」

「それをノコノコと…ロメオの使いだあ？いまさら伝言なんて送ってきやがって…アイツの顔を見た瞬間に鉛玉ぶちこんでやるよ。少なくともここにいる連中はみんなロメオを信頼してたんだ。最高の兄貴だったってな。」

少し声が上がらずに涙が出そうになるのを堪えているような感じだった

「あのクソヤローは俺の…俺たちの全てを台無しにした裏切りモノだ！…許されるはずがねえ！！」

先ほどより強く私に拳銃を当てる

「こいつらを殺してロメオにさらし首にして見せつけてやる。今更…何をやったって無駄だってな…！！」

…絶望的だ

こんなことなら来なければよかった
そう思いかけてしまいそうになるとき
目の前の病室の扉が開いた

中から慌てた男が出てきた

「ああ？邪魔してんじゃねえよ。」

兄弟は男を睨み付ける

「…が！」

男は慌てていてしつかりと喋れていなかった

「あ？」

聞き直す

「ボスが…！！ボスが目を覚ましました！！！！！！」

周囲がざわめく
そのまま続けざまに男がいう

「目を覚ましたボスから伝言です!!」

周りが私たちのことなんて忘れてたかのように聞き耳をたてる

「一字一句余さず伝えます!!」ガツガツカ。なにやら気にいらねえ名前が聞こえてきたと思ったら外が騒がしいじゃねえか。お前ら、ここは病院だぞお? 静かにしやがれ。あと、クソロメオがいたら伝える。俺はクソジジじゃねえ。お前の口の悪さは誰に似たんだ。」

「
なんとという豪気さ
なんとというボス

みんなが聞き逃すまいと集中している

「『あと一つ…ロメオ。そろそろあいつらの鼻を明かしてやれ。構わん。ファミリーの全実権をお前に貸してやる。この街を取り戻せ。お前に任す。ここらで育ててやった恩の一つや二つ返しやがれロメオ』…以上です」

「で、ボスは?」

「それだけ、言い残すとまた眠ってしまいました…」

周りは黙ったままでした

兄弟は今にも泣きださんばかりの顔でした

「ボス…貴方はロメオを…今でも…」

「ううっ…ボスウゝボスゝ」

自然と私たちに対しての力が緩まりその場から立ち上がる

「だ、そうです。貴方達。ロメオにそう伝えてくれますか？」

いつも通りの様子に戻り
毅然とした態度に戻る兄

いまだに、ひきづっている弟を抱き起す

ボスは

解放されたあとも地面に横になったままだった

「ボス…？」

私は心配になり声をかける

するとボスは少しだけ何かを堪えるようにしたあとに言った

「カッカッカ！あのクソジジイは相変わらずだ。オイシイとこだけ
もっていきやがる。かっこつけやがるぜえ…」

そして決意の表情をして真剣な面持ちで起き上がり周囲に向かって
訴える

「おい！お前ら！聞いたな！！ボスの意志はまだ諦めちゃいねえ！
！それなのにお前らが先に諦めてどうすんだ！！ロメオを許せとは
言わねえ！！だが、ロメオは確かに生きている。

ここにいる兄弟達のために生きているぜ！！お前らがどう思うか
！！お前らが…お前らがどれだけ『俺』を憎もつとも！！『俺』は
お前らを愛している！！まだだ！！これからだ！！『俺』はクソジ
ジイ…先代ボスの意志を受け継いで立ち上がる！！」

そして、ボスは笑顔でこう応えた

「…すまなかった。お前ら…待たせて悪かったな…」

少しの沈黙のあと

みんなの心が一つになったことを確信したあと

一斉に歓声があがった。

ボスの後姿…

あれ…？

ロ…ロメオさん…？

なぜだか、ボスの後姿に男性の影を見たような気がした

究極の決断とはいっても時間に追われている

諸君、

僕は予定調和が好きだ

僕はお約束が好きだ

曲がり角の転校生

空から降ってくる異星人

異世界への召喚

修学旅行でのドキドキイベント

夏休みのマル秘旅行

ここまで全部ラブコメ

この世のありとあらゆるラブコメが好きだ

だけれども

僕は今、自分が置かれている状況がラブコメにつながることをよく知っている

そんなこんなで

久々に自分が語り部となってメインになれることにとっても喜びを感じているのであります

どうも

サルです

もはや、自分で自分のことをサルと呼ぶことになんの抵抗もないの

であった

えっちいゲームならデフォルトネームというものが決まっっていて大概はその名前でプレイするものだ

最近はそのついでなのばっかだよな？

僕はそんな主人公の風潮に警告をうながすためにこうしてサルという名前に甘んじているのだよ

よくさ、物語の序盤で

『僕の名前は… 名前を入力してください』

みたいになるじゃん

僕はあれだよアレ

それにしてもさ

なんでこんなに出番が少ないの？

仮にも僕が主人公だよ？

あ、主人公なのに全然操作できないじゃん！！とかそういうRPGへのオマージュなの？

なんか、だいぶ時間が空いた気がするもん。

まあ、ちよくちよく語ってはいるけどさ

前々回くらいの回ですっかりエロチシズムに満ち溢れるキャラみた

いに思われてるかもしれないけど、誤解だよ？
僕は悪くない！！彼女がそうさせるんだ！！

そうね、ここでちゃんと説明しなきゃいけないけど

彼女っていうのはエリカさん

そりゃ大人のおねーさんという形容がなによりも正しい

あんな、官能小説から出てきたような艶美な女性がこの世に存在することに驚きです。

ああいうおねーさんだったら、騙されても本望！！みたいな？

ああ…そばにきたら、その香りだけでクラクラしちゃったよ…

そうこう考えてると、まりもが僕の膝の上に乗っかってきた…こいつといるのもだいぶ慣れてきたというかなんというか
時たまいなくなるけど、ほぼ四六時中一緒だ

最初は落ち着かなかったけど

なんだかんだ人間って慣れるもんだなあ…

こいつに監視されているから、僕はあやうく主人公の貞操を保っているようなもので

いなかったら、もっと鬼畜の所業に出ていたかもしれない
そういう意味では感謝しなければ

「…バーリトワード」

こいつの意味不明な単語にも少しずつ適応してきた
言葉ってのは意味を成さないもんだ
つまりはハートとハートさ！！

ちなみに今のまりもの発言は『細かいことは気にするな。道は自分で切り開け』という意味だ（多分）

まりもが俺のおなかをパンチした

ふははは

その細腕で殴られても僕はさして喰らわないぞ！！

さてさて、どうしてこのような長い脳内会話をしているかというと

「…暇だ」

そう、暇というやつだ

僕はベッドに腰掛けながらひたすらに過ぎ行く時間の無常さについて
ひしがれているのだ

お姉さん、もといエリカさんは

『私が戻ってくるまではガ・マ・ン　お楽しみは戻ってからねはあ
と』

…と言ってた！！…気がする！！…いや、言っていた！！そういう
ことにしておこう！！

しかし、何もない状況下で待つというのは存外に時間が平等に流れないことを教えてくれる

最初はドギマギしていたけど、こんなにアワアワしては自分がさくらんぼ戦士であることが丸わかりだということに気が付いたので百戦錬磨のパラディンであるかの如く振舞ってみたりもした

ウィンググラスを片手にバスローブを羽織って悪の親玉気取りごっこを試してみたりもした

しかしあまりにもむなしいのでやめてしまった

うゝむ

ベッドに寝そべってゴロゴロしてみる

何で僕はここにいるんだ？

そんなことを考えてみる

こんなどこかも分からないような場所がよく分からないイベントをこなして

まるで異世界に召喚された一般高校生だ…

は…！

これは凄じくないか…！

きつと召喚されたときに何か特殊な力が身についたのではないか…？

僕は起き上がり

両手を胸のあたりに集めパワーを溜めてみる

「…はあああああ！…我は…放つ！…光の

（自主規制）」

前方に向けて両手をかざす

…

…

…

「…枯葉」

「ですよね〜！！出るわけないですよね！！あんな都合の良いことがあるわけないですよね〜！！まりも君！リアクションありがとう
！！！！」

いつも眠たそうな目をしているまりものあまりにも寂しいリアクシ
ョンだけが残った　　はずだった

バ　　ン！！

「ええっ！時間差！？僕には発動までの時間差がある攻撃魔法の能
力が…」

なにやら壁の方で大きな音が響いた

…隣の部屋からみただ

僕はおふざけをやめて恐る恐る入り口の扉をあけて隣の様子を覗く

何やら数人の黒服の男が立っている
明らかに怖い人たちだ

なおも気が付かれないように聞き耳を立ててみる

「オイ！！エリカはどこだ！！さがせ！！」

そこでエリカさんの名前が出てくることに驚く

「クソっ！あのアマ…なめ腐りやがって…」

「徹底的に部屋の中を探せ！！いなければ…隣の部屋だ！！」

そついうと数人の男がこちらのほうを向き
すぐさまに隣の部屋に入っていく

僕はとっさにやばいと思いドアを閉める

…え？

…え？

これはどうしよう

まずい状況なんじゃないか

隣の部屋からがさ入れとも聞こえるような物音

相手はよく分からないけどエリカさんを探している
そもそもここはどこ？

私は誰？…それはないけれど

圧倒的に情報が足りないことに今更になって実感する

このまま素直に出ていけるほどの勇氣は僕にはない

…僕は部屋を見渡す

ここで、サウンドノベル小説やら選択肢のあるゲームならいろんな
状況が出ているだろう

僕もそれにならって箇条書きしてみようか

1・何か武器になりそうなものは

2・あそこにクローゼットが…よし隠れよう

3・素直に言えば相手も分かってくつるはず…おとなしく投降しよう

4・なにくわぬ顔で外に出て知らぬ顔で通り過ぎてみる

とりあえず今の状況で僕が思いつく選択肢だ

うゝむ

そしてこれがサウンドノベルとかならたとえバッドエンドになって
もやり直しがきくであろう

片っ端から選択肢を選べばよいのだからなあ！！

残念なことに現実にはセーブとロードなんて便利な機能はついていないのであった

本当に人生というのはやり直しがきかないものである
こんな機能があればよかったのになあ

そんな風に考える人間はぼくだけじゃないはずだと思う

そして、現実には待つて待っていてはくれない。選択肢で時間が停止してくれることもないのだ。そうこうしてゐるうちに時間は流れていくのだ

やばい！

やばい！！

やばい！！！！

僕は動揺で自分で考えた選択肢がごちゃごちゃになっていくのが分かる。

このまま僕はバッドエンド一直線なのであろうか…

思えば短い人生だった

まだラブコメの一つもしていない

高校生になったばかりだというのに…

ああ…着飾ったツンデレお嬢様、真面目なメガネ委員長、おとなしい図書委員の女の子 僕の中に未来の走馬灯が流れる…
僕が過ごすはずだった理想の学校生活^{イハトラブ}

…未来の走馬灯なんて流れるのか？そもそも未来の走馬灯っておかしくない？

どうでもいいか

ああ…

何かが僕を殴る

殴る

…？

…殴る？

ハッ和我に返ると

まりもが僕を殴っていることに気が付いた

だから、その細腕では僕には通用しないと…ん？

まりもが何かを引きずるように片手に持っていることに気が付く

僕がまりものほうに顔を向けるとそれをずいっと突き出してきた

そうして僕にこう言う

「…怪人二十面相」

またわけの分からないことを…

そう言おうとしたが

まりもの行動を読み解く

「…なるほど。でも、それってかなり無理がない？」

それでも強い意志だといわんばかりに僕に向けて、手に持つそれを突き出してくるのであった。

「…分かった分かった！！僕は大事な何かを失いそうだけど、それでいこう！！…って、本当に？」

了承しておきながら、かなり不安が高まる

さらに相手を逆上させるような気がしてならない

いや…でも…

僕はまりもの言わんとすること一抹の不安…一抹どころかかなりの不安を覚えているが…

ええい！ままよ！！一度は言ってみたかったセリフ

「よし！まりも準備をする！！手伝ってくれ！！」

まりもはまかせると言わんばかりに胸を突き出す
ぺったんこだけど

そんなことを思っているのを察したのかまた殴られた

幼女にべったんこというのも大概だね

ここでサル、一世一代の大勝負に出ることになるのであった。

以下、格闘娘

怒られた

そりゃ、ここは病院だもの
当たり前だよな

何が何だかよく分からないけど

私たちは自分の命の危機を脱したのだ

場所を改めて私たちは集まっていた

どうやら、この街の奪還作戦を行うらしい

ロメオさんの使いとしてボス、私、そしてファミリー代表のルリオ

さんにマイジ君
そして情報提供者のマルコさん
この5人で話し合いの機会を設けたのだ

「いやあ、こうしてまた会えるなんて運命の神様フォーチューン様のお導きだネ」

「…ハイハイ」

やっぱりうざかった

「それで、具体的にロメオはどんな作戦を立案されたのですか？」

「カツカツカ！俺は…じゃなくてロメオはこんな作戦を考え付いたらしいぜ」

「まったくロメオの兄ちゃんもこんな時でも顔出さないなんて空気読めって感じだよな」

「マイジ。ロメオはやむにやまれぬ事情があつて今は顔を出せない事情があるのです。それに、こうして代理の方を出席させているのです。確かに無礼とは思いますが…大目に見ましよう」

ギロリとこちらをにらむルリオさん

「ハハハ…」

私はその痛い視線をかわす為に笑うのが精いっぱいだった
何せ、銃を突き付けられた私

その相手とこうして顔を合わせて喋ってること自体がまだ怖い

「カッカッカ！本当はお前らに会いたくて仕方ねえんだよ！昔からの友人で、大事な家族だ。信じてやってくれ」

「元気にしてるかなあ〜ロメオ兄ちゃん…」

この二人は本当にロメオさんが好きなんだなあと感じる
しかし、ロメオさんは何をしているのか
よくよく考えれば、この人たちをだましているに等しいのだ

私の良心が痛む

「よし、じゃあ作戦を発表するぜ！」

ボスは大声をあげて仕切る
みんながボスに注目を集める

「作戦はいたって簡単だ。正面から乗り込んで…ぶっ潰す…！」

「簡単すぎじゃない!?!」

私はいてもたってもいられなくてツッコんでしまった…

「カッカッカ。まあ落ち着け。まるっきり算段がないわけじゃない。

」

ボスは私のツッコミが予定調和であるかのように応え続ける

「乗り込むのは、本上とルリオ、マイジだ。まあ…乗り込むっての

は語弊があるなあ。正確には話し合いをしに行く。だな」

「話し合い？」

「そう、相手だつていきなり抗争に持ち込みたいわけじゃねえからな。どんだけシマを奪われても、古くからここを守り続けてるファミリー相手だ。犠牲が0なわけじゃねえ」

「それにしたつて…いきなり相手の本丸に乗り込むのよ？そんな無茶苦茶な…」

私の反応を遮って、ルリオさんが発言する

「いや…悪くないかもしれませんが。我々はいまやギリギリの状態。そこからなんとかイーブンに持ち込もうとするならば、交渉という選択肢は悪くないのかもしれませんがね」

「ん、話し合いで解決かあ。お互いに犠牲が出ないならそれが一番いいよね」

先刻まで私たちに銃を突き付けていたとは思えないくらいの平和主義な発言

「それで、アナタは何をするつもりですか？」

ルリオさんはボスに向けて言う

「ん？俺か？俺は別で動かせてもらう。それは…悪いがここでは言えねえ。一つ言えるとするなら、この状況をイーブンまで持つていくための秘策だ。それにはチビマルコの情報収集が必要だからな」

「可愛い子猫ちゃんと一緒にいかい？ 僕と秘密のデートをしてくれるなんて光栄の限りだよお〜…ヒッ！」

気持ち悪くニヤつくマルコ

ボスが笑いながら拳を振り上げると条件反射のように縮こまっていた

「カッカッカ！今回の作戦は誰か一人でも失敗すればすべて台無しだ。うまく歯車がかみ合ってたよ。でも…お前らを信頼している。絶対に成功するってな」

私たちは誰も発言するわけでもなくお互いの顔を見合わせていた

「絶対成功…させる」

私は一人でこっそりつぶやいた
我ながらすごいバカだと思う

でも、今までの自分では考えられないほどうまく言えないけど高揚感みたいなものがあつた。

「それで…お前らに詳しい話をしておくとだな…」

以下、作戦伝達終了

「…こんなところだ。大丈夫かあ？」

そついい終わると扉をノックする音が聞こえた

「どうぞ。」

ルリオさんがそう言うと

部下の一人が息を切らしながら入ってきた

「失礼します！」

「どうかしたのですか？」

「偵察班からの連絡です。『敵対ファミリー幹部エリカ行方不明』
とのこと。いまだに情報はつかめず。潜伏先も分かっていません！」

私たちは色んな思惑が交錯するなかに立っていた
そのことに私たちが気が付くのはもうちょっと後だった

不器用な愛の形。いろんな愛し方ができるっていつのは本当？

小さいころはよく知らねえ

語るような記憶は何一つない

だが一つ言えるのは

俺の人生はロクでもねえ

まだ自分が何者かも分からないうちに両親は俺を捨てやがった

こんなご時世だ

頼るべきものは何一つない

生きていくことに精いっぱい何一つ先のことなんて考えられない

今を生き残る方法だけを考えて生きてきた

そつでなければ自分に未来はない

そつするしかなかった

気が付いたら俺はこの街で同じような仲間と一緒に過ごしていた

悪くはない

そつ

悪くはねえんだ

愛情すらろくに受けられなかった同じようなガキが集まってやることなんてロクなもんじゃねえよ

そういうもんになっちまうんだよな

でも、そんな風にしていかなければ俺は生きていけなかった

それしか方法を知らなかったんだ

でも、一人の大人がやってきた

全力で俺らをぶん殴る大人だ

所詮はガキ集団だ

大人が本気を出せばあつという間に征服されちまう

初めて大人ってヤツに相手にされたんだ

いや

一人の人間として向き合ってくれるヤツがいてくれた

思いつきりぶん殴って

こんなくそつたれな俺たちを叱ってくれるヤツがいた

いい年こいたクソジジイのくせに

全力で俺に向き合ってくれた

全員が見て見ぬふり

遠巻きに眺める

「おめえ、名前なんていうんだ？」

いきなりぶん殴ったヤツがどの口で言いやがる
手を差しながら気持ちいいくらいの笑顔で

俺らの世界はここで変わった

クソジジイはロクなヤツじゃなかった

だけど

全力で俺らにぶつかってきてくれた

別に俺らは愛情がほしかったわけでもなく

そもそも愛情がなんなのかすらよく分からなかった
だからここでは愛だなんだを語るのは控えておこう

だがその時くらいからだった

少しだけ…これから先のことを考えれる時間が生まれてきた

まだちいせえなりに

空っぱの頭で空っぱなりに先のことを考える時間が出来た

チクシヨウ

こんなクソガキを拾って育ててくれるようなヤツだ

ロクでもねえヤツだよ

本当に

拾われても俺は相変わらずロクデナシだった

悪ガキだった

もし自分がちいせえ頃の自分を育てると言われたらかなり手を焼く
だろう

だがアイツは豪快に俺を笑い飛ばしやがった

そして俺の遥か上を見せつけてきやがる

自分の小ささを知らされる

本当にロクでもねえし

何より

大人げねえ

俺みてえなガキに何本気出してんだよ

本当にロクでもねえ

ここでの生活もそろそろ終わりみてえだ

俺の仲間たちはそれぞれが別の道を歩む

そんな時だ

最初はどうしようもねえ奴らが

今は立派な顔つきになってやがった

未来や希望

考えもしなかったぜ…

とある仲間は教師

とある仲間は弁護士になるとか

恥ずかしげもなく良い笑顔で言いやがる

一丁前なことを言うやつらになったもんだ

だが、最高のヤツらだぜ

俺かあ？

俺は

そっからは無茶苦茶だ
下っ端として

雑用やらなんやら

様々な教養や技術

ありとあらゆるものを叩きこまれた

お前ら、こんなことをするぐらいならもっと真っ当な仕事にも就けるんじゃないか？

…俺はクソジジイの下で働く

そう決めたっつーの

別に俺はクソジジイに恩義を感じたわけじゃねえ

だが

俺もロクでもねえことをすることに決めた

その事をジジイに向かって告げる

ジジイはいつになく真剣な顔つきで俺に再度、確認を取る

へっ

柄にもねえ顔をしてんじゃねえよ

俺はお前に拾われたその日からこうなることを決めてたのかもしん
ねえな

空っぽの頭なりに考えてよ

気が付いたら俺にも部下が出来た

カツカツカ

柄じゃねえっつーの

俺は今まで俺のしたいように生きてきた
ただそれだけだっつーのに

良い顔して俺についてきやがる

そんな奴らが愛おしくてしょうがねえけどな

悪くねえな

ある日に

そう

なんでもねえ

雨が降り注ぐ中で

俺は道端でどうしようもねえ顔つきをしたガキを見つけた

ああ

こんな顔したヤツどっかで見だな

少し考え込む

そっだ

昔の俺もこんな顔してたっけかな

俺は自然にそいつに足を向ける

そいつはビクッと身体を揺らして
すぐに逃げ出そうとする

まあまあ待てよ

そっだな

大人なんてロクなもんじゃねえからな

売り飛ばそうとするヤツ

嘲りながら暴力をふるうヤツ

そういう意味ではそういう選択肢は正解なのかもしれない

現にそういう非合法的ブローカーはこの仕事を始めてからぶっ潰してきたしな

本当にロクでもねえよ

そいつはすぐに倒れこんだ

食うもんもほとんどねえ

食い扶持をまともに稼げなかったんだろっつな

どっかの誰かが言ってたな

空腹の青年は怒れる青年にはなれない

うる覚えだけどな

コイツは死にかけだ

怒れる少年にすらなれねえんだろっつな

俺は睨むような視線を無視して傘を差しだした

俺はクソジジイと違うからな

いきなりぶん殴るようなマネはしねえよ

いや

俺の場合とは状況が違うからな

自分でも何でかわからねえけど
こうやって口に出しちゃった

「お前、名前なんていうんだ？」

ああ

クソジジイの気持ちが少しだけ分かった

そいつはすくすくと成長しやがった

いや

成長しすぎじゃねえか？

あつという間に俺の身長を追い越してみるみる成長しやがった

まあ

負ける気はしねえけどな

イテイロー

こいつの名前だ

俺が名づけた

コイツは自分の名前すらなかった

おいおい

俺より悲惨じゃねえか

まあ、俺も自分の名前にこだわらなんてねえし
ロクな思い出もねえし

便宜上で不便だからな

拾ったばかりのときは本当に苦労したぜ

俺も若かったしな

口を開かねえし

ダチの一人や二人も作りやしやがらねえ

ずっと隅っこで黙って見てるだけだ

コイツが何を考えて生きてるのかよくわかんねえ

だけど、確かなのは
コイツは俺に似てる

カッカッカ

こつこつやつを見てるとついつい構いたくなっちゃう

…それから俺は毎日そいつに話しかけた

一方的にだ

内容までは覚えちゃいねえけどな

どうしようもない話すぎて内容までは覚えてねえけどな

俺は嫌がらせに関しては自信があるからな
人が困る顔を見るといじめたくなっちゃう
そう言ったらすげえ嫌な奴かもしんねえな

ソイツ…いや、今はイチでいいか

イチは最初はまったく相手にしなかった

そりゃウゼエクソオヤジに一方的に絡まれてんだ
嫌に決まってるだろう

…だからやるんだけどな

こつこつからずつと話しかける毎日

つたく、どこまで頑固なんだよ

だが変化がまったくないわけではなかった

もちろん、メシを食ってから元気をだんだんと取り戻してきたっつ

ーのもあるんだろっけどよ

少ないなりに、感情というものが見え隠れするようになってきた

面白い話をするときはわずかに楽しそうな顔をして

ちよつと悲しい話をするときには、少し悲しそうな顔をすんだよ

もしかしたらずっと一緒にいるうちに俺がコイツの変化に敏感になっただけかもしれないけどな

それからも続く日々

そんなある日、また一つ転機があった

「…俺は」

初めてイチの声を聞いた

嬉しかったもんだ

だけど、俺は何を喋るのか

イチが何を言いたいのか

嬉しさを表情に出さないように気を付けて黙って話の続きを聞いた

「…俺は、母親が混血で…差別されてきた…」

初めて見たときから知っていた

「差別され続けて…日々の食うものにも困っていた。だから母親は身体を売って毎日をしのいでたんだ… 母親は、暴力がひどかった。

俺の顔を見るたびに俺に暴力をふるった。食うもんもロクにももらえなかった」

初めて聞くイチの声

自分の何かを振り絞っているようにも見える

「ある日、母親は体調を崩してそのまま死んだ。医者にかかる金さえないんだ…死ぬ間際でさえ俺に恨みつらみをぶつけてきた…悲しかったよ…そして、俺は家を失った。同じような境遇の奴はいっぱいいたけど、俺を見ると混血なんだと罵って…俺は相手にされなかったよ…」

イチがどうして一人でいたのか

「俺は不器用だし、どんくさいから盗みとか強盗とか…そういうことすら出来なかった。自分一人じゃなに一つ出来なかったんだ…」

今にも泣きだしそうに震える声

「今にも空腹で意識がなくなりそうな時に…アンタが来たんだ…俺はアンタが怖くて仕方がなかった…もちろん今もだ。生きてきて今まで一度もアンタみたいな人間は見たことがない。」

こちらを睨むイチ

そう、その顔だ

俺らはやっぱり似てるな…

…そっくりじゃねえか

俺はイチの手を取ってこう言ってる

「カツカツカ！外に出ようぜイチ」

なんでこうしたのかは今でもよくわかんねえ
だけど

コイツの気持ちを精いっぱい受け止めてやる
そう考えたのは確かだ

俺たちは外の広場に出た

いるのは俺ら二人だけ

「よっしゃ！かかってこいよイチ」

イチは俺が何を言ってるのかよく分かっていないようだった
俺は構えを取る

「んだよ〜。シラけるじゃねえか。ほら、ここだここ！思いっきり
殴ってこいよお！！」

「いきなり、外に連れ出したかと思えば…アンタを何を言ってるん
だ…バカじゃないのか！！」

おう

確かにバカかもな

そこは今も昔も変わっちゃいねえ

いつでも俺は空っぽの頭で

自分に正直に生きてきた

そこだけは誇ってもいいかもしんねえな

バカだけだよ

「お前が乗り気じゃねえなら、こっちから行くぜえ?!」

思い切りイチにオーソトガリとかいう技をかける
なんでも、ジュード とかいう競技があるらしいな

下っ端時代に教わったぜえ

一応、手加減はしてるぜ?
全力なりにな

「クソっ!めちやくちゃだ!!アンタは俺に何をやる気だよ!!
もう…もう…俺に…構わないでくれよっ!」

イチは自分が何をされたのか理解したのか
こちらに敵意をむき出しにした

それなりにガタイがいい身体

コイツはいい格闘選手にでもなるんじゃないかな

だけど、そんな素人パンチじゃ俺は倒せねえぜえ?

起き上がりざまに俺に殴りかかってくる

「クソっ!クソっ!!見透かしたような顔しやがって…!!ふざけ

んなよおおおおお！！！！」

そうそう

俺も

こんなヤツだった

自分がクソジジイみたいになってるのは癪だが

確かに俺はクソジジイの息子だ…

血はつながってねえけど

そしてこいつは俺の…息子みてえなのかもしんねえな

誰一人として相手にしてくれなかった

ぶつかってくれなかった

人間として

やり場のない感情は次第に人の心に闇を生んでいくもんだ

大人はそれを受け止めてやらねえとな

いや

大人だからどうのこうのつてもんじゃねえな

人間として

俺は立派なヤツじゃねえけど

今まで自分なりにまっすぐに生きてきたつもりだ

そうだな

こうやって今があつて

楽しめてるのもクソジジイのお蔭なのかもしんねえな

…ぜってー感謝なんてしてやんねえけどよ

こうやって考えてるけど

絶賛戦闘中つてなあ

まあ、俺ほどの人間が

コイツにやられるほど弱くはねえよ

だけど

俺は様子を見ながら

そろそろ限界だな…

そんな事を感じていた

適当にいなしていたイチの拳を

避けずに

真正面から受け止めた

疲れ切った顔だ

そりゃそうだろう

それを見計らって殴られてやったんだから

「なんで…避けなかった…？」

自分の拳が俺に当たるなんて考えもしなかったんだろ？
な
驚いた顔でこっち見やがる

バカヤロー

当てさせてやったんだよ

いて じゃねえかチクシヨウ

だけど

そんな事はどうでもよかった

「カツカツカ！いいパンチしてんじゃねえかあ？イチよう！？お前
はいいボクサーになれるかもしんねえぜ？」

俺はイチの辛さや痛みを全部受け止めてやる

俺にはこういうやり方しか出来ねえんだけどさ…バカだから

「…うう、ウワアアアア！！」

少しの間の後に

イチは

全力で

泣いた

本当に全力でな

恐らくだけどな

全力で泣くなんてことはそうそう出来ねえんだよ

辛い状況や苦しい状況でも自分の気持ちを取り繕うとしちまうんだ

自分がそんな状況に置かれてるなんてことを考えたくねえんだ

そうやって誤魔化し誤魔化し生きていくと、いつか壊れちまう

俺はそんな強い強い

隠れた本当の想いを育ててやるのが必要なんじゃねえかって勝手に思ってる

俺は全力でイチを優しく抱きしめてやった

「やっと、いい顔になりやがったなあ？今のその気持ちを忘れんじやねえぞ。お前は絶対に強く生きていけるからなあ？」

カッカッカ！

こっちまで気分が良くなってくるぜ

それからイチは変わりやがった
今までが嘘のように明るく
そして全力で物事に打ち込むようになった

自分の血とか関係ねえ

俺らは家族だぜイチ？

いつしか俺の下で働くようになって
俺の右腕として頼もしい男になったもんだ

「イチよう？お前も立派になったもんだなあ。カッカッカ！」

俺は思い立ったようにイチに向かって話をかける
イチは突然の発言でも優しい笑顔で応える

「ボス…私も貴方に会わなければ今頃死んでいたかもしれません。
私は、アナタに一生ついていきます」

少し昔を思い出して目頭が熱くなったのか
上を向いて涙が出そうになるのを堪えている

「カッカッカ！俺はボスじゃねーっの！！それよりも今回の仕事
はデカくなりそうだなあ！」

「ええ…それにしても、なぜ日本で取引を行うんでしょうか？少し
謎が多すぎます」

「まあ、いいじゃねーか。クソジジイの期待に全力で応えるだけだ！それにこの仕事が終わったら、何か話があるみてーだしな。さつさと終わらせて帰ろうぜイチ」

「ええ、家族が待っていますからね」

今のイチはとてもいい顔つきだ

以下、格闘娘

『…っていう話だったんだヨ！！ボスとワタシのシークレット感動話はどうだつタ？ファイティングガール？』

「…いや、嘘でしょ！！」

途中まで真剣に聞いてたけどバカバカしくなっていた
いきなり通信がきたかと思ったらいきなり過去編突入！？

「女子高生のボスにオッサンのアンタ！！矛盾がありすぎて話にならないわよ！！」

『OH…事実は時として小説よりクレイジーなり。ってスクールで習わなかったか？ファイティングガール？』

「バカにしないでって!!!この小説よりクレイジーな事実があつて
たまるかっていうの!!!」

本当にそうだった

「そ・れ・に!!!なにアンタ、その妄想の過去話で普通に喋ってん
のよ!!!いつもみたいに『OH!アイアムチャンピオン〜!』とか
言いなさいよ!妄想だから美化されてんの?なんなの?」

『ワタシはそんなコト言ワナイよ〜!それこそモーソーよ!!!』

こんなくだらないことを言い争っていてもしょうがない

「カツカツカ!!!懐かしい話じゃねえか!!!あれは今から...36万、
いや1万4000年前だったか?」

「人類史以前の話!?!とんでもない!!!」

悪ふざけもこれまでにしてほしい

作戦決行に向けての準備中の話であった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0406v/>

放課後に帰宅部で青春で

2011年12月29日11時47分発行